九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

人格発達とQOL（クオリティ・オブ・ライフ）昔話・夢解釈

荒木，正見

https://hdl.handle.net/2324/6796473

出版情報：pp.1-236, 2022-05-13. 22nd Century Art
バージョン：
権利関係：

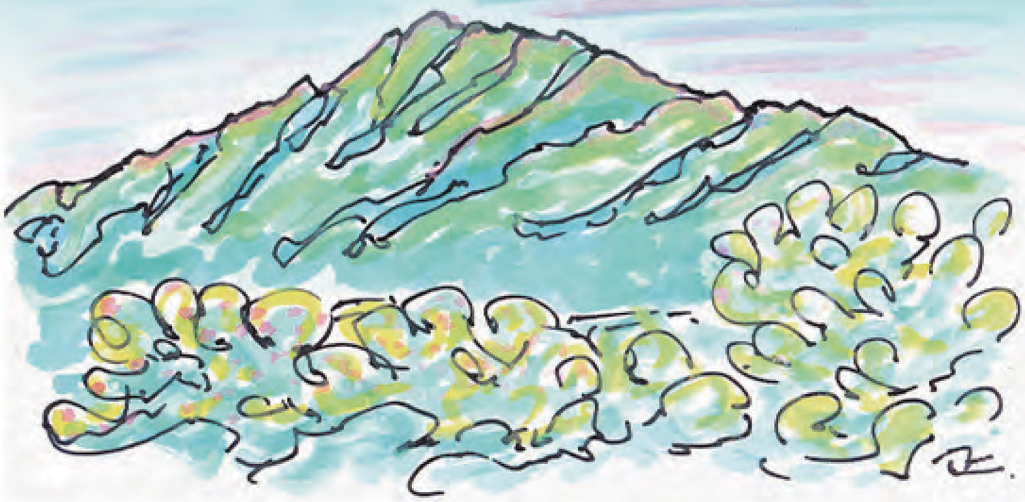
人格発達とQOL

クオリティ・オブ・ライフ

荒木 正見

Masami Araki

22世紀アート



人格発達とQOL（クオリティ・オブ・ライフ）

昔話・夢解釈

荒木正見

22世紀アート

目次

序

第一章　解釈の目安　――人格発達の概念と解釈学の方法――

一　人格発達考察に関する諸概念

（1）「意識」と「無意識」

（2）「退行」／「再統合」／「エネルギー」

（3）エリクソンの人格発達モデル

（4）英雄譚における人格発達図式

二　ストーリー解釈と構造

（1）共時的解釈

（2）「現象学的還元」と「構造」

（3）場所

第二章　昔話における「人格発達」と「癒し」
一　昔話と「人格発達」や「癒し」
二　昔話解釈の方法
三　『聴耳（ききみみ）』における「人格発達」と「癒し」
四　『瘤（こぶ）取り』における「癒し」
五　『手斧（ておの）息子』における「人格発達」と「癒し」
六　『躄（いざり）長者』における「人格発達」と「癒し」
七　『田螺（たにし）息子』における「人格発達」と「癒し」
八　「場所」の意味と人格発達
第三章　夢解釈における「人格発達」と「癒し」
一　夢解釈の方法
（1）　「夢を見ること」に付随する側面
（2）　夢の構造的解釈の側面

（3）　夢解釈の実践的側面
二　夏目漱石『夢十夜』「第三夜」の夢解釈
（1）　場所の構造と夢の構造
（2）『夢十夜』「第三夜」における場所の構造的解釈
（3）　『夢十夜』「第三夜」における夢のテーマ
（4）　『夢十夜』「第三夜」と夏目漱石
（5）　『夢十夜』「第三夜」と夏目漱石の癒し
三　夏目漱石『夢十夜』「第四夜」の夢解釈
（1）　現象学的還元と夢における場所
（2）　『夢十夜』「第四夜」における場所の移動と「意識」-「無意識」構造
（3）　場所と象徴的意味
（4）　漱石の生育史と時代
（5）　『夢十夜』「第四夜」と夏目漱石の癒し
参考文献

おわりに
初出一覧
著者略歴

序

本書は、拙著『人格発達と癒し　―昔話解釈・夢解釈―』（ナカニシヤ出版、２００２年）を改題したものである。本書の内容はこの本を踏襲したものであるが、20年経って筆者なりにこの本の意義を改めて考察し、ＱＯＬ（Quality of Life）の視点から捉え直すこととした。そのつながりは以下のように考察される。

本書は、ＱＯＬ(Quality of Life)を癒しという感覚的側面から考えるためのひとつの契機を人格発達に求め、しかもそれを昔話や夢に手がかりを求めるものである。

その意図について解説しておきたい。

今日、それぞれの研究者が質問事項を工夫しつつ様々な角度からＱＯＬを考察している。特に医療においては、日常生活ができるという側面と、各自の生き甲斐の実現という二面から考えようとしているといえる。

筆者は本書で、ＱＯＬの目標としての全体的な感性を「癒し感」と捉える。

日常生活を普通に送ることができるようになることも、生き甲斐に沿って生きられることも、後述するような人類本来の生存に合致する限りにおいて真の意味の癒しであるといえる。

いま「看護職の倫理綱領」（日本看護協会）の前文に「看護は、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会を対象としている。さらに、健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和を行い、生涯を通して最期まで、その人らしく人生を全うできるようその人のもつ力に働きかけながら支援することを目的としている。」(https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/rinri.html˙最終検索２０２２年５月５日）とあるが、このことが患者に対してのＱＯＬの提供であることはいうまでもない。そして、この対象としての患者は、そのような看護職の努力に対して癒し感を得る。すなわち、ＱＯＬを分析的に考えるに当たっても、その前提的な感情としての「癒し感」に立ち返って考えなければならないであろう。

そして、ここで倫理学的視点を交えて確認しておかねばならないのは、真なる癒し感は倫理学の目的、人類の生存を前提とすることを忘れてはならない。自己中心的な倫理的未熟さに基づく個人的癒しは時に人類の生存を危うくする場合もある。そのような態度は、結局は癒し感を失うことになる。従って一個人としては「人格の発達」が必須である。本書ではその意味においてＱＯＬと人格発達とは密接な関係があると捉える。

このようにＱＯＬを考えるに当たっては、生活をどのように考えればよいかという課題が横たわる。特に医療現場においてはそのことをより真摯に考えなければならない。『ナーシング・グラフィカ　健康支援と社会保障①　健康と社会・生活』（平野かよ子・渡戸一郎編、メディカ出版、第４版２０１６／２０１９）では生活を考える要素として「身体的・生存的水準」「社会的・経済的水準」「文化的・精神的水準」を挙げている（39頁）。

これらの基準はＱＯＬ考察にはふさわしいものである。

同様な基準として、丸山マサ美編著『医療倫理学　第２版』（中央法規、2012年）に解説されている（当該箇所執筆：土田友章）ＱＯＬの視点からの健康の基準はMOS-SF-36を前提として、「身体機能」「日常役割機能（身体）」「日常役割機能（精神）」「全体的健康感」「社会生活機能」「体の痛み」「活力」「心の健康」の８項目が挙げられている。

これらの視点は医療や介護の現場で配慮すべき重要な要素であることはいうまでもない。さらには、我々一人ひとりの生き方において重要な視点でもある。

このように今日ＱＯＬが重視されればされるほど、総合的な人格発達が求められることに気づく。その意味において本書は、ＱＯＬの目標としての癒し感を得るための人格発達に焦点を当てて考察する試みである。

ところで、ＱＯＬであれ、人格発達であれ、それが人類の生存を前提とする癒し感という総合的な

感覚に関わるものだけに、文化の中で当然のように受け継がれてきた。このような継承は理論的、分析的なものではないが、心理的なフォーマットとして、安堵感、癒し感が存在することによって、物語としての面白さを演出し、夢などの象徴的表現の意味を読み取る術となる。

本書はその点に着目して、昔話や夢の解釈を通して人格発達の契機を探り、癒しという安定的な状態、すなわちＱＯＬを得るための手がかりを得ようとするものである。

かくして本書では、読むことによって自らＱＯＬを実現し、癒しを得ることを期待するが、それは、知識によって具体的な生き方と癒しの仕方を知ることで人格発達を促し、最終的な癒しを目指すという性格のものである。したがって本書では、人格発達や癒しを考える一般的な方法や目安を骨組みにする。特に、第一章においては、それらについて、グリム童話『ヘンゼルとグレーテル』を例示しつつ、先行研究を参照して概略する。

そして、このような意味で個性を伸ばすことを含むＱＯＬの考え方を推進しようとする際、そこには多様な知識が必要になることに気付く。

人間は心身を統合的に有し同時に社会や環境や時代や歴史との関わりを以て存在しているものである。そして重要なことは、その全体はそれぞれに常に変化発達し続けているということである。

本書ではこのような問題意識を背景として、その中で特に心理社会的な発達の姿を昔話や夢の中に

確認することを課題とする。すなわち、心理・社会的な人格発達の普遍的な姿を知ることで、みずからの個性的な発達の目安にしたいというものである。

そして、ＱＯＬを得るべく目標としての感覚こそが「癒し」である。

「癒し」とは決して単なる一時の慰めではない。一時の慰めで表面的な癒しを得たところで、原因となる不安定さを解消しなければ結局はまた苦しむことになる。個性に応じて豊かで統合的な人格を得たときに初めて真に癒された気持ちになれるものである。

人は持って生まれたものがあり、その限りにおいて人格の完璧な普遍的完成など得られないのではないかという疑義も生じるかもしれない。その限りにおいてはその通りであるが、それだからこそ個性を射程に入れたＱＯＬを追求しなければならない。本書で言及する口承文学はそれだからこそ様々なテーマを持ち、それぞれのテーマを通して様々な統合的生き方を教えてくれる。

前以て述べておけば、この統合的生き方は一個人に限定されるものではない。口承文学のそれぞれに反映されているのは、個人的な生き方の背後に社会が存在するということである。社会の発達も示唆されつつそこで生きていく個人の人格発達が象徴的に語られている。そのような含みを以て本書を捉えていただければ幸いである。

そこでこの本は、昔話や夢を、人格発達と癒しという視点から解釈し、われわれの日常生活に生か

そうとする試みであるとする。

いうまでもなく、癒しという自己感覚は、より高いＱＯＬを得ることによって得られる。先に述べたようにそれは心身や社会や人間関係や環境など様々な要因が関係してくる。その中で人格発達は自己自身の努力や管理によって比較的自分自身で得やすいものである。その手掛かりは伝統的には昔話などの口承文学に保存されてきている。また、夢にはそのヒントが隠されている。多様な手掛かりのうち、本書ではそれら昔話や夢を解釈することによって人格発達の一端を考えようとする。

以下、その詳細については本文での考察をたどることになるが、ここでは、全体の見通しについて概略する。

これまで述べてきたように、癒しを得るためのひとつの仕方として、人格発達を得ることがあげられる。癒しを得るためにはさまざまな方法があるが、子どものころの辛い劣等感のいくつかは、成長し、知識を得ていくに従って解消するように、人格の発達に従って何らかの癒しを得るのではないかと思われる。いま、昔話や夢を解釈しようとするとき、このような視点から捉えることで、癒しに対するひとつの手掛かりが得られるのではないか。これがこの本における考察の目的のひとつである。

次に、この本では、読むことによって癒しを得ることを期待するが、それは、知識によって具体的な癒しの仕方を知ることで人格発達を促し、最終的な癒しを目指すという性格のものである。したが

って、この本では、人格発達や癒しを考える一般的な方法や目安を骨組みにする。特に、第一章においては、それらについて、グリム童話『ヘンゼルとグレーテル』を例示しつつ、先行研究を参照して概略する。

そして、そのような方法を用いて具体的な癒しの姿を解釈していくことになるが、第二章では、その対象を主に日本の昔話に求める。その理由の詳細は第二章に詳述するが、一言で言えば、現実が複雑多岐にわたればわたるほど、昔話のような元型に立ち返って、それらの複合体としての現実を反省することが求められるからである。もちろん、それぞれの昔話からどのような現実を考えることができるかについては、それぞれにおいて言及する。

さらに、昔話と現実を繋ぐものとして、第三章では、夢を考察の対象にとりあげる。第三章の方法に加えて、夢には夢特有の解釈の方法があるので、その方法について改めて述べ、次に、夢の解釈の一例として夏目漱石『夢十夜』の夢をとりあげて、解釈を試みる。

以上の試みのなかから、癒しや、人格発達への手がかりを求めようとするのが、この本の目的である。

ところで、先にも述べたように、この本は、人格発達と癒しを並行に考えるという特徴を持つ。その意味では、この本を読んで考えることも、人格発達や癒しに繋がるのではないかと期待する。と同

時に、考える道筋については丁寧にかつ正確に述べなければならないことになる。このことには、学問的な叙述が要求されることになり、時に難解な印象を与えてしまうことにもなる。その点に関しては、本書の性格上容赦願うしかないが、仮に難解な理論を述べる箇所を素通りしても、伝えたいことは伝わるよう努力したつもりである。

また、この本は、学問的にはその目的と、考察の対象とから比較論的考察を記すものになる。すなわち、当面の目的を果たすために表面的には心理学、特に発達心理学を意識する。したがって、すべての考察対象に、心理学的な前提に基づく考察が為されている。しかし、本書で取り扱う考察対象は、昔話や童話も、小説も、本来、文学に属するものである。文学は、感動をこそ、その本質とする。作品の感動を、作品そのものに密着して考察することこそ、文学研究の王道である。

さらに本書にとっても重要なことは、それぞれの文学作品は、文学としての感動という本質をもって、人格発達に寄与し、癒しを与えているのである。その意味で、単に心理学的側面からの解釈だけでは不完全である。したがって本書においても、文学を文学として研究する姿勢を保つ。第二章で、昔話を物語として分析する意味と方法について論じ、第三章で、夏目漱石の生育史、成立時の状況、文学研究者の研究内容などを可能な限り述べたのは、その理由による。

ところで、このような異なる領域の解釈を結びつけようとする企ては、広義の解釈学になる。それ

は、文学と他の領域の比較研究という意味での比較文学としての解釈学でもあるし、哲学的基盤に基づく解釈学として、諸学を等距離に捉えつつ、解釈対象の本質を明らかにしようとする比較思想の試みでもある。それらの、学問的位置づけを意識しつつも、本文中ではいちいち断る余地がないので、前もって確認しておく。

言及する諸概念についてはこの本の性格上、概略するにとどめた。その詳細な考察についてはこの本の最後に記した参考資料を参照されることを懇願する。

なお、本書の性格上、記述に、昔話や小説のオリジナリティを守る箇所には特に、差別に繋がる恐れのある表現を使わざるを得なかった。幾多の不愉快については謹んで陳謝する。また、癒しという性格上、心身の障害に繋がる表現さえも用いざるを得なかったが、昔話にしろ小説にしろ、本来、他の誰かではなく作者や語り手自身の心の傷を象徴的に表現したものであり、記述し語ることで癒されたいという本能のなせるものである。完全に癒されている人はだれもいないのだから、その意味では本書のレベルでは差別は存在しないつもりである。そして何より筆者自身が、記された言葉のひとつひとつを自分が発達すべき目安だと大切に受け止め、翻って、すべての方々の癒しを希求するものである。

また、引用文献における旧かな旧漢字は現在のものに直し、外国語の文献は拙訳を記載した。

第一章　解釈の目安　――人格発達の概念と解釈学の方法――

この章では、解釈の目安について概略するが、それは大まかに、人格発達を考察する目安となる概念と、解釈学的な方法およびそれに関わる概念との二種類に分かれる。一では、この本で主に用いる人格発達に関する概念について概略し、二では解釈学をふまえた具体的方法を列記する。

その際、グリム童話の『ヘンゼルとグレーテル』(Grim *Kinder-und Hausmärchen*, S. 189-195) を例に用いつつ概略する。

物語の概要は次の通りである。

① 大きな森の入り口に樵（きこり）の四人家族が住んでいた。

② 飢饉になり、母親は、兄妹のヘンゼルとグレーテルを森に捨てれば食べ物が助かると、父親に相談する。

③ 父親はいやいやながらも承知し、実行することになる。

④　子どもたちはこの相談を隠れ聞く。

⑤　翌日の夜、子どもたちは森に置き去りになるが、ヘンゼルが準備し、往く途中に撒いた白い小石を目印にして無事帰宅する。

⑥　その翌日、子どもたちはふたたび森に置き去りにされるが、昨夜は鍵をかけられていたため小石を拾えず、持っていたパンをちぎって撒くが鳥にたべられてしまって迷子になる。

⑦　子どもたちはお腹をすかせて森の奥に迷い込む。

⑧　白い鳥に導かれて着いた森の一番奥にはお菓子の家があり、子どもたちは喜んで近づく。

⑨　お菓子の家は魔女のもので、子どもたちは捕らえられてしまう。

⑩　ヘンゼルは檻の中で魔女の餌にふさわしく太るように食べさせられるが、魔女の目が不自由なのに乗じて、いつまでも痩せているように見せかける。

⑪　下働きをさせられていたグレーテルは、魔女がヘンゼルを焼き殺そうとしたに、詭計を用いて魔女を押し込んで殺す。

⑫　子どもたちを白い鴨が道案内し無事帰宅する。

⑬　家では父親が迎え、子どもたちが森に迷っている間に母親は死んでしまったと告げ、これからは三人で仲良く暮らそうと言う。

以下、随時上記の箇条書きを参照しつつ考察を進める。

一　人格発達考察に関する諸概念

（1）「意識」と「無意識」

「意識がある」「意識不明」などという言葉で示されるように、「意識」とは本来、自覚的な状態をいう。したがって「無意識」とは、無自覚的な状態をさす。より端的に言えば、知っていることは「意識」であり、知らないことは「無意識」ということになる。

のちに『ヘンゼルとグレーテル』、および、昔話や夢に関して考察するように、物語中では、意識的な場所から無意識的な場所に移動して、再び意識的な場所に帰ってくると、人格発達したり癒されたりすることがしばしば示される。

つまり、「意識」と「無意識」とは、具体的な物語の中では、場所や領野として構造的に考えることができるし、注意深く読むと、とかくそのように記されているものである。

まず「意識」については、「自我（Ich）に対する心的内容の繋がり、および、その繋がりの実感を意識と名づける」（C. G. Jung *Gesammelte Werke*, Sechster Band, S. 451.＝以下、Jung, Bd. 6, S.

451と略記する）と述べられる。この場合の「自我」は、ユングにとって一般的な用法の、自覚の中心をなすと解してよい。要するに「意識」とは自覚的状態、もしくは自覚的領野を意味することになる。

そして、医学、心理学的な立場として特に問題になるのは「無意識」についてであるが、当面、ユングは「無意識」を、自分としては「純心理学的な」概念として用い、哲学上の概念ではない、と述べる（Jung, Bd. 6, S. 525）。この差異については必要に応じて言及していくが、今日、心理学的に用いられる「意識」「無意識」概念のひとつの典型として、このユングの規定を考察することができるし、それは、近代の哲学史上考察されてきた「意識」概念と、同じ構造を持つといえる。

まず、ユングは「無意識」を、「意識的ではない、つまり知覚的な仕方では自我とつながりを持っていないあらゆる心的内容ないしは心的過程の総称」と延べている（ibid.）。

この、「自我」とは先に述べたように、ユングにおいては、自覚的領野の中心を意味する。したがって、「無意識」とは、無自覚的な領野の全体を意味することになる。無自覚的であるから、自覚的領野、即ち「意識」からは、論理的な意味においても認識できず、「自我」にとっては未知な対象のありかということになる。

次に問題になるのは、ではそのような未知な対象のありかは存在するのかという点である。ユングは、心理的障害を例に挙げて、健康な状態との差異から、「無意識」の存在を証明しようとする。

例えば、ヒステリー性健忘症の場合、患者自身においては、その原因となった心的コンプレックスについてなんら自覚していないのであるが、催眠などの治療によってそれらコンプレックスを自覚し、治療に役立つという状況がある。これは「無意識」の存在を証明する一例だとされる（ibid.）。

もちろん、ユングも述べるように、本来的には未知のものだから、その内容やプロセスを客観的に確認することはできない。それを知るためには、「それを決定するのはただ経験だけである」と述べられるように、その内容やプロセスが「意識」に現れたその結果から遡行して推測するしかないのである。

それにもかかわらず、先の例のように、催眠などの治療手段を用いる場合に限らず、忘れていたことを思い出す、などというように、「意識的内容もそのエネルギー価値を失えば無意識になり得る」（Jung, Bd. 6, S. 525-526）と述べられるように、「意識」の内容が、その内容を意識化するエネルギーを失えば、忘却し、「無意識」に沈み込む。またそれが、何らかの必然性によって、意識化するエネルギーを得れば、また、「意識」に立ち現れるということになる。これが一般的な状態ではあるが、この「意識」「無意識」のエネルギーについては、単純に、エネルギーが十分にあれば意識化し、そうでなければ「無意識」に沈み込むかといえば、そうではない。つまり、実態はもっと複雑なのである。なお、エネルギーについては、当面、活力、生命力などと解しておき、次項以下に詳述することにな

る。

複雑な実態については、その病的な例として、心理的症状の一例、すなわちフロイトの言葉での「抑圧（Verdrängung）」に関連して、より詳細に述べられる。

人格の分離、多重人格、精神分裂症などは、今日でも問題になるが、ユングによると、それは「それほどのエネルギー価値を失うこともないままに、志向的な忘却によって識閾下に入ってしまう」（Jung, Bd. 6, S. 526）状態だとされる。また、感覚的知覚の場合にも、それが微弱だったり、注意が他に向いていたりすれば、その内容は意識されることがないにもかかわらず、催眠などで思い出すということが起こると指摘される。

さらに、価値性が少ないことや、注意がその対象に向いていないことなどから、「無意識」に沈み込んでいると考えられることもあるとされるし、神話像のように「一度も意識の対象になったことがない」（ibid.）にもかかわらず、なにか既知でもあるかのような知識もあることが指摘される。

ユングはこのようなもろもろの現象から「無意識」の存在があると述べている。

しかしまたユングは科学者として、その「無意識」について「どんなものが無意識内容になる可能性を持っているのか」「識閾下における感覚的知覚の最も下の限界は」「無意識の心的結合の精密度や範囲を測定する尺度は」「忘却された内容が完全に消えてしまうのは」などについては答えられないと

する（Jung, Bd. 6, S. 526-527）。たしかに「意識」しか自覚できず、自覚すればすべて「意識」になるのだから、これらについては理論上答えられない。

そのうえでユングは、「意識」にあらわれる内容から推測して、「無意識」の内容を二種に分類する。

その第一は「個人的無意識（das persönliche Unbewußte）」内容である。これは「個人的存在が取得したものすべて」だとされる（Jung, Bd. 6, S. 527）ように、また、第一に「意識内容がその強度を失い忘却したか、それとも意識がそれを回避したために、無意識になってしまったすべての内容から成立する」ものと、第二に、「強度が低いために意識には到達しなかったが、なんらかの方法で魂（Psyche＝意識・無意識の全体）に侵入した内容、部分的には感覚の知覚から成立する」ものとがあるとされる（C. G. Jung *Gesammelte Werke*, Achter Band, S. 175.＝以下、Jung, Bd. 8, S. 175と略記する）ように、個人の経験や体験に由来する要因の強いものである。

その第二は「集合的無意識（das kollektive Unbewußte）」内容である。これは個人に帰属するのではなく「心的機能一般という遺伝的可能性に、すなわち遺伝的な頭脳構造に由来している」とされ、具体的には「神話的連関、主題、像」がこれに相当するとされる（Jung, Bd. 6, S. 527）ように、また、「表象可能性（Vorstellungsmöglichkeit）の遺産（Erbgut）として、個人的なものではなく普遍人類的なもの、いなそればかりか普遍動物的なものでさえあり、個人の心（Seele）の真の基礎をなす」

とされる（Jung, Bd. 8, S. 175）ように、個人的無意識、そして、個人的な特殊性においてある「意識」の双方を構成する基盤としての無意識過程だとされる。

そして、このような「無意識」が「意識」に対して持つ機能は、「無意識」が「意識」に対して持つ「補償的関係」だとされる。この「補償的関係」については、本書では今後論じていくことになるが、とりあえず、「意識」「無意識」の全体が、完全な状態や、安定的な状態になろうとするこの補償的関係こそが、人格の完成を目指すエネルギーの源である。

このように、ユングは「意識」と「無意識」の領域を想定し、さらに「無意識」を、「集合的無意識」と「個人的無意識」とに分類して考える。このような領域の設定も重要であるが、今後の考察で無視してはならないのは、先に述べたように、「意識」「無意識」のそれぞれにエネルギーを想定したことである。ユングにおいては、「意識」「無意識」の全体が「魂（プシュケー）」と呼ばれる。それは「意識的なものも無意識的なものをも含めたすべての心的過程の総体」（Jung, Bd. 6, S. 503）とされるが、その全体に流れるエネルギーの状態が、健康や病気の状態を作るとされるのである。とりあえず以上のことを確定して、本書の考察が進行することになる。

ここで哲学的な厳密さをもって確認しておかなければならないことがある。

その第一は、「意識」と「無意識」の全体、すなわち「魂」とは、哲学的な意味での絶対的な存在そ

のものだということである。したがって、いずれもが相互に影響し合い、その影響の領域は無限である。つまり、本来的には、「意識」「無意識」は、心という限定された領域ではなく、心や物などと分類される根底の全存在を意味する。この詳細については本節の（2）で考察する。

第二は、したがって、「意識」「無意識」は、その全体的かつ絶対的な因果性によって成り立っているということである。個々の事柄や症状の発生は、厳密に言えば、絶対的な因果性の結果であり、どこから因果関係があるなどとは言えないのであるが、現実には、相対的な因果性を求めることになる。つまり、われわれが考えることができる限りの因果性を求めることになる。しかし、この場合も、本来の絶対的な因果性を考慮しつつ、次元の違った因果性の可能性を常に配慮しなければならない。この詳細についても、本節の（2）で考察する。

さて、『ヘンゼルとグレーテル』は、病んだ家族の再生の物語である。それも、家族の中で最も性格上の問題を抱えた母親の死という、冷厳な解決の仕方をする。

ここで注意しなければならないのは、このような物語の解釈の仕方である。この物語のように、家族の中で最も性格上の問題を抱えた母親の死という解決が、現実には間違っていることは、誰の目にも明らかである。にもかかわらずそのような結末に至るのは、当然のことながら、これが物語、つまりフィクションだからである。

現実と物語の違いは、前者では多くの登場人物の意思がばらばらに絡むのに対して、後者では、登場人物の意思は、個人もしくは複数の作者の意思の投影だということである。

この点は、二の（1）の、「共時的解釈」の概念とも関係するが、ここではとりあえず、前者と後者の違いを、次のようにまとめておく。

すなわち、前者では、登場人物にせよ、その背景となる場所や出来事にせよ、ばらばらな事実の集積の上に成立しているが、後者では、前者に比べてある種の統一的な論理によって成り立っているといえる。さらにより端的にいえば、物語は個人であれ、集合的な人々であれ、いずれにしても誰かの心の上で展開しているといえる。

ということになれば、『ヘンゼルとグレーテル』の全体にも、この、「意識」「無意識」の構造が現れているといえるが、この物語の場合、それが最もはっきり示されるのは、それぞれの場所の意味についてである。

①で示されるように、一家の「住み家」は「大きな森の入り口」である。これはまさに、「意識」「無意識」の境界を意味する。物語は、これから「意識」を目指すのか、それとも「無意識」をめざすのかによってその展開の方向が決定される。めざす方向によって、物語の大枠が全く異なることになる。この物語の場合、次の展開は「森」に向かうのであるが、不明瞭で、怖くて、人間社会から離れてい

くイメージを持つ「森」は「無意識」を象徴する領野である。さらに⑦で示されるように「森」の深奥にある「魔女の家」は、お菓子の家、魔女など非現実的な事柄が起こるように、「無意識」の深奥でもある。このように、「意識」「無意識」と物語中の場所とが対応することが多く見られる。そしてそれはまた、次節の「退行」「再統合」「エネルギー」などの諸概念と対応させると、物語の意味がより明確に解釈されることになる。

（2）「退行」／「再統合」／「エネルギー」

「無意識的な構成の変化」、これは同時に、「意識」「無意識」の全体の変化を意味するが、この変化を本書では、「退行」と「再統合」という概念を用いて説明する。いずれの概念もさまざまな心理学者が指摘し、理論を展開しているが、筆者は次のように理解し規定しつつ、テキスト解釈や教育相談等に応用している。

「退行」は、本来、S・フロイトが唱えた概念であるが、筆者なりに捉え直して次のように理解し応用している。すなわち「退行」とは「子どもがえり」「幼児がえり」などといわれるように、まず、「意識」と「無意識」の境界が曖昧になることである。日常身につけている意識的な仮面がゆるみ、日ごろ抑圧している内面的な衝動やコンプレックスなどの内面の不安定な状態が現れやすくなる。多くの

場合、動物的で非現実的な行為に走る。遊び、スポーツなどに熱中している時はさほど危険はないとしても、病気、妄想、犯罪など、危険な方向性でもある。全体的に混乱しているし、エネルギーの浪費も大きく、常に危険性をはらんでいる。物語、夢、昔話などではそのような行為や状態として、「退行」は具体的に表現される。また、「退行」は、無意識的な領域との混合であるから、物語などでは、先に述べたように、海、池、湖、川や山、荒野や砂漠、というような曖昧な場所に行く場合、さらには、神秘的な場所に行く場合などで表現されることが多い。

『ヘンゼルとグレーテル』の場合、この「退行」は、⑧の「お菓子の家」で典型的に示される。「お菓子の家」は、非現実的な事柄だし、魔女という、これも非現実的で、しかも生命を脅かす危険なものが支配している。ここで起こったことを考えても、⑨のように捕らえられ、食べられそうになる。⑪は、子供たちにとってうまくいった事柄ではあるが、やはり間一髪の混乱であるには違いない。このように、「退行」は、物語の中で図式的に表現される。

ところで、「退行」は、人格発達にとってマイナスかというと、そうではない。このように意識と無意識をかき回すことで自分の問題を浮かび上がらせることができるし、そのあと、うまくまとめれば、退行しないでいるよりもずっと高いレベルの人格発達が得られることにもなる。すなわち、そこにエネルギーを量的に満たしたり、エネルギーの浪費が少なくなるように質的に整えたりすると、それま

でつけていた意識的な仮面がゆるみ、「意識」と「無意識」とが溶け合っているだけに、むしろ大きな、したがってより高い「再統合」、すなわち人格発達が期待できる。「再統合」というのは、このような退行後に得られる新たなまとまりを意味する。したがって、それが高いレベルで行なわれれば、「人格発達」と同義になる。仮に、このエネルギーの質が整わなかったり、量が不足したりすると人格発達がうまくいかないばかりか、状況によっては死に至ることになる。

ユングはこのようなエネルギーをS・フロイトに倣って「リビドー（Libido）」と呼ぶ。ユングによれば、「リビドーとは心的エネルギー（die psychische Energie）である」（Jung, Bd. 6, S. 490）と端的に述べられはするが、それに続いて「心的エネルギーとは心的過程の強度であり、またその過程の心理学的価値である」（ibid.）と説明される。そして、その心理学的価値は「他から承認されてはじめて生ずるようなものではなく、単に自らの決定力によってのみ規定される価値」（ibid.）だとされる。また、「この決定力は一定の心的作用（「業績」）として現れる」（ibid.）と述べられている。

筆者はこのようなユングの心理学的価値に関する規定に対して、認識論的な意味で、また、夢解釈や心理治療の実践的な意味で同意するが、他方、存在論的には、ユング自身の「意識」-「無意識」構造からも、二重に理解されなければならないと考える。詳細は、以下の「意識」と「無意識」に関する考察を経て確認するが、先だって結論を述べておけば次のように記すことができる。

まず、「心的エネルギー」であるが、これは、心という側面から、認識の状態を確認し、心理治療という側面から相談者の状態を心の状態として捉えようとすることは必然的なことである。その意味においては、心的エネルギーの価値を、「単に自らの決定力によってのみ規定される価値」と述べることは当然だともいえるが、他方、それだからといって、存在論的にも、特定の心理が自らの個人的な決定力によってのみ決定しているかといえば、それはユング自身においてさえ矛盾しているといえる。

つまり、後述するように、ユングの功績のひとつは、個々の「意識」の背後に、ただ単に個人にのみ由来する心的過程、すなわち個人的無意識を想定すると共に、個人的無意識のさらに背後に、普遍的意味を持つ集合的無意識を想定したことにある。この点からは、心的エネルギーの価値は、この集合的無意識にも関連して決定されるし、それは普遍的な決定力をも含むことを意味するはずである。

そして、先に言及したように、このエネルギーは、もはや「心的」と呼ぶ必要のない総合的な活力を指していると理解してよい。たしかに、心理学という、なんらかの心的過程を問題にする領野においては、「心的エネルギー」と呼ぶのがふさわしいが、「集合的無意識」の無限性を考慮に入れれば、どこからが「心的」で、どこからがそうでないかは区別がつかないはずである。したがって本書では、このような理由で単に「エネルギー」と呼び、曖昧ながらも、生命力、活力などと解しておく。

このように、高いレベルで統合するために必要なのが、「エネルギー」である。「エネルギー」は、

物語や夢、昔話の進行の行方や、人格発達や歴史的諸現象の発達に至るまで、重要な役割を果たすキーワードだといえる。ちなみに物語というものは、すべて原則的には、ストーリーの展開を通して「退行」を促し、かき回すことによって問題意識、すなわちテーマをあらわにし、それを円満な解決という高いレベルの再統合か、悲劇という低いレベルの再統合かに導くものだともいえる。

ところで、筆者は、「エネルギー」を「量」の側面と「質」の側面との双方から考察している。「量」は、「エネルギー」の量的側面を意味し、食事、睡眠、体力、金銭、豊かな生活環境などで示される。また、「質」は、「エネルギー」をうまく利用する合理的な統合性を意味する。したがって、「質」の側面は多くの場合、知識や知恵が関係し、それらや他の諸条件によって、ホメオスタシスすなわち恒常性が得られた状態として表現される。当然、そのような知識や知恵を得ることが、一般に高く評価され、例えば昔話の場合には、結婚や至福を得ることになる。

さて、『ヘンゼルとグレーテル』の場合、少なくとも子どもたちにおいてはハッピーエンドに至ったのだから、これらの「エネルギー」をはじめとする問題は、結局はうまくいったということになる。⑦で、おなかをすかせて森に迷いこんだのは、「エネルギー」の「量」が欠如しており、当然「退行」が進行し、⑧の非現実的な「お菓子の家」が現れることになる。しかし、この物語の作者は、子どもたちが発達し救われるように設定する。⑨で捕らえられるものの、食事すなわち「エネルギー」の「量」

は十分に満たされる。さらに⑩では知恵を用いて危機を逃れようとする。これは、「エネルギー」の「質」の問題である。しかし、魔女はさらに子どもたちを危機に陥れる。⑪では、それをグレーテルが詭計、すなわち知恵、つまり「エネルギー」の「質」によって完全に阻止するのである。魔女の死によって、物語全体は完全に明るさ、すなわち「エネルギー」をとりもどす。子どもたちも、「退行」を意味する「森」を出て、「住み家」に戻る。ここで、現実的には最大の問題であった母親はすでに死んでいるというのが象徴的である。その意味や、母親がいかに未熟であったかは、次節の人格発達の図式によって説明される。

（3） エリクソンの人格発達モデル

筆者は、物語や夢を解釈する場合、人は発達しつつあるものだ、という前提で解釈するのがふさわしいことを経験的に感じている。そして、その人格発達を考察する目安となるのがエリクソン（Erik H. Erikson）の人格発達モデルである。人格発達の課題などについては、例えばハビガースト（R. J. Havighurst）のように、より具体的なものを述べた例などもあるが、筆者は、人格発達理論の基本を述べているという点で、エリクソンの理論を利用している。この項では、エリクソンの人格発達モデルについて、おもに、E・エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』（小此木啓吾訳『自我同

一性』）の二節（Erikson, *Identity and the Life Cycle*, pp. 51-107）に基づいて概略する。

エリクソンの人格発達理論にはいくつかの前提がある。まず、それを列記する。

（1）人格は発達しつづける。

人格発達モデルの最後は、成熟し統合する人生の最後だとされている。それまで、人格は発達し続けるといえる。

（2）発達の各段階において獲得すべき要因がある。

「人の成長（human growth）を、健康な人格（personality）がさらされる、内的および外的な葛藤（conflicts）という観点から述べる」（ibid.）とされるように、エリクソンは、発達の各段階において、葛藤の克服として現れる獲得すべき要因があるとし、その要因を獲得できないと、いつまでも、その要因を危機条件として持ちつづけるとする。

この点に関して実践的には、前節の「退行」「再統合」の概念を重ね、現実的な教育相談や物語解釈の体験を含めて考えれば、おおむね、その要因を獲得するためには、その要因を獲得すべき段階まで退行して、獲得し直さなければならないといえる。もちろん、その退行は、催眠や自立性中和といっ

た医療的な退行もあるし、スポーツや趣味といった日常の退行もある。一般的にも、それらによって癒されるという表現をするが、いったん退行して、再統合が必要な発達の段階を整え直しつつわれわれは人格発達をとげ、そして、癒されているといえる。

(3)獲得すべき要因は、各段階における対立的な側面のバランスとして表現される。危機的葛藤の克服という視点は、エリクソンの実際の記述では、各段階において対立的葛藤の両極が表記される。現実的には、その両極のバランスが求められることになる。

以下、各段階に添って箇条書きに概説する。

1　乳児期：基本的信頼　対　基本的不信

・生後一か年の経験から獲得される自己自身と世界に対するひとつの態度。
・主に母親との関わりから、口唇の感触を通して得られる信頼感。
・他人には筋の通った信頼、自分自身に関しては信頼に値するという、感覚。
・「私は与えられる存在である」という実感。

2　早期児童期：自律性　対　恥と疑惑

・一歳児ていどの経験から獲得される。

・筋肉系の成熟、その結果得られる「つかまえておくこと」と「手放すこと」というはげしく葛藤しあう無数の行動パターンを協調させる能力。

・主に両親との関わりから得られる自己統制能力。

・トイレットトレーニングがその典型。

・指導のこつは、断固たる態度をとると同時に寛大であれ。

・「私は意志する存在である」という実感。

3　遊戯期：積極性・主導性・自発性　対　罪・罪責

・四、五歳の子どもが得る「傷つかない積極性」。

・「良心」の確立。

・自分が一個の人間で「ある」ことをしっかり確信した子どもは、両親をモデルにしつつ、また、子ども同士の付き合いのなかで、幼児的な意味での性差を知り、自分が「どんな種類の人間に」なろ

うとしているかを知る。

・「動き回る」「言語を用いる」「想像する」という能力の発達。

・成長途上の、憎しみや罪悪感を早いうちに予防し、緩和する。

・「私はかくありたいと想像する存在である」という実感。

4　学齢期：生産性・勤勉性　対　劣等感

・「物を生産すること」によって認められることを学ぶ。

・「仕事を完成させる」喜びを身につける。

・危険な点は、親との比較、家庭と学校との不一致による、不全感と劣等感の発達。

・最初の「分業」の感覚や「機会均等」の感覚が発達する。

・「私は学ぶ存在である」という自覚。

5　青年期：同一性　対　同一性拡散・役割の拡散

・新しい連続性と不変性の獲得。

・この時期に体験される自我同一性の感覚とは、内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力が他

者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験から生まれた自信のこと。

・この段階におこる危険な点は、同一性拡散。

・党派や群集の英雄と自分との同一化や、違う他人の極端な排除などの「同一性拡散の感覚に対する必然的な防衛」がおこる。

6　初期成人期：親密さと隔たり・親密性　対　自己吸収・孤独

・自己の同一性について確信のもてない青年は、人間関係の親密さからしりごみする。

・自分自身についてより確実な感覚を持てば持つほどそれだけ友情や闘争、リーダー・シップ、愛、直感などの形での親密さを求めるようになる。

・際限のないおしゃべりや、自分がどう感じるか、他人がどのように見えるかを告白し、計画や願望や期待を話し合うことによって自分自身の同一性の定義を得ようとする。

・このような親密な関係を他人とつくり上げることができない場合や、自分自身の内的な関係をつくり上げることができない場合には、自分自身を孤立させ、非常に規格化された形式的な人間関係しか見出せなくなる。

7　成人期：生殖性 対 停滞

・次の世代の確立と指導に対する興味・関心のこと。

・子どもに地域社会から歓迎され信頼される存在になれると思いこませるような「種への信念」が重要。

・これに失敗すると、生殖性から偽りの親密さへの強迫的な要求への退行がおこるが、しばしばそれは、停滞の感覚の浸透と人間関係の貧困化を伴う。

・ただ子どもを持っているということや、欲しがっているという事実だけでは、生殖性が含まれていることにはならない。

8　成熟期：完全性・統合性 対 絶望と嫌悪

・「完全性」、なんらかの形でものごとや人々の世話をやりとげ、子孫の創造者、物や思想の生産者としてさけがたい勝利や失望に自己を適応させること。すなわちこのことは、人は個人的な完成をのみ得るのではなく他者との関係を、時間空間を超えて完成し、それによって永遠の人格を得るといえるのである。

・自分自身のただひとつのライフ・サイクルを受け容れることであり、自分のライフ・サイクルにと

って、存在しなければならず、どうしても代理がきかない存在としての大切な人々を受け容れること。

・自分の人生は自分自身の責任であるという事実を受け容れること。
・個人の人生は、ただ一つのライフ・サイクルと、歴史の一節との偶然の一致であることの自覚。
・自分にとって、すべての人間的な完全性というものは、自分がともにする完全性の一様式と、興亡をともにするようなものという自覚。
・完全性が得られない絶望は、嫌悪、人嫌い、制度や人々への軽蔑や不快感になる。
・自己の完全性は、いわば、弟子になることと指導の責任を受け入れることとの両面からの参加が可能になる情緒の完成。
・自己の完全性は宗教、政治、経済秩序、テクノロジー、貴族的な生活、芸術や科学の中で学ばされ実践されなければならない。

さて、以上のエリクソンの発達図式から、『ヘンゼルとグレーテル』を再検討すると、この物語の発端でもありモチーフでもある、最も中心的な問題を担った母親の未熟さが明らかになる。②で明らかなように、この母親は、自分が生き残ることばかり考えている自己中心的な存在である。これは、エ

リクソンの発達図式に照らし合わせれば、７の成人期において、最も顕著な未発達性を示しているといえる。すなわち、「次の世代の確立と指導に対する興味・関心」は全くない。エリクソンの図式の場合、ある段階が未発達であるなら多くの場合、その前の諸段階にすでに問題を抱えていることが指摘されるが、この物語の場合も、それは各所で指摘される。６の初期成人期に関しては、母親が子どもを自分の所有物のように扱い、魔女が食べてしまおうとする点に現れている。いずれも、対人的な距離感が極端にアンバランスだということになる。すなわち「自分自身を孤立させ、非常に規格化された形式的な人間関係しか見出せなく」なるのである。さらに遡れば、５の青年期に問題を抱えているともいえる。つまり、同一性や自己の役割を考える訓練が得られていないのである。そのような性格はそれ以前の各段階においても問題点として指摘されるだろうし、究極的には１の乳児期に適切なケアを受けられなかったので、人間不信的な、温かみのないパーソナリティーが育ってしまったと考えられるのである。このように負の要因を背負った登場人物は、物語の論理的必然性によって生存することを否定されるのである。

（４）英雄譚における人格発達図式

また、筆者は、よりシンプルな人格発達の図式を求めて、物語分析の一環としてレトリックの構造

や、心理学的な退行・再統合の構造と重ねつつ、日本の昔話とくに英雄譚において潜在的に前提されているであろう人格発達の図式を次のように求めた（荒木正見『昔話と人格発達』）。ここではその図式について、『桃太郎』を例にあげつつ概説する。

1　誕生――モチーフ（潜在的テーマ）〔退行（統合崩壊）の兆し〕

昔話において英雄の誕生は、全体の恒常性（ホメオスタシス）に変化を与える兆しである。そしてその英雄の誕生の状態（述語的側面）に着目すると、なにか違和感を与える状況が設定されており、そこにはすでにテーマが内包されていることに気付く。

例えば、『桃太郎』が正義を貫くテーマを持つことは明らかだが、桃から生まれるという違和感を与える状況にモチーフが含まれるはずである。流れてくる桃は、『日本昔話大成３』（関敬吾編、六九-八五頁）によると、多くの地方では二個流れてくる。そこから桃太郎が生まれるパターンは二種類ある。ひとつは、はじめに流れてきた桃をおばあさんが食べてしまい、おじいさんにわるいことをしたと反省して、もう一個流れてきた桃をおじいさんのために持って帰ったところ桃太郎が生まれた、というものである。もうひとつは、はじめから桃が二つ流れてきて、おばあさんが「よい桃こっちこい、わるい桃あっちいけ」というと、良い桃が寄ってきて桃太郎が生まれたというものである。この両者に

共通しているのは、すでに善悪の区別が生じていることである。

2　成長――モチーフの展開〔退行への予感〕

昔話の英雄が、テーマを象徴し、担っていることはいうまでもないが、物語の構造において、英雄の成長はテーマの展開と一致する。

例えば桃太郎は、強く賢く正しく成長するが、この、問題を起こさない優等生だということが、すでにモチーフに示され、のちにテーマに連なるということは明らかである。

この場合、順調で健全な成長というのは、常識的な意味での違和感はないかもしれないが、この種の物語というものは、違和感をもってテーマとするものだという、レトリックの構造と心理的な感触との一般的な現れを背景にして考えれば、そこに違和感が現れてくる。そこで、この違和感を背景にして、例えばテーマの反復を捜せば、テーマがくっきりと現れてくることになる。

3　冒険――テーマの発現〔退行から再統合への過程〕

英雄譚には冒険がつきものである。冒険には混乱とそれにまつわるエネルギーの消耗と、そして、勝利するにふさわしいエネルギーの充塡が与えられて、英雄の勝利に至るのである。

この場合、エネルギーすなわち英雄自身の、もしくは物語そのものの活力は、量的なエネルギーに限らず、質的なエネルギーも考えられる。量的なエネルギーは、英雄を主語とする述語に着目すれば、眠る、食べる、休むなど、分かり易い形で表現される。これに対して質的エネルギーは、統合的な構成、すなわち少ないエネルギーで大きな効果をもたらす仕組みだと理解する。したがって、知恵を得、無駄なものを切り捨てたりなどという形で表現される。

このようにエネルギーの充塡される状態は、多くの場合、対立的要素の統合過程か、貧困、独身などの欠如状態が満たされていく過程として表現される。

『桃太郎』の場合は、鬼という分かり易い敵と戦うのだから、その敵の述語や属性に着目すればよい。一般的には、鬼が必ず悪を意味するというわけではないが、この場合は、一方的に悪だと表現されている。したがって桃太郎の戦いは悪との戦いだということになる。このことを、テーマの反復を想定して、誕生以来のこれまでの内容と比較してみると、悪との戦いとその克服というテーマが全体を貫いていることが明らかになる。

4　結婚・人格の完成――テーマの終結〔再統合〕

多くの場合、英雄譚は英雄の結婚で幕を閉じる。結婚は男性的要因と女性的要因との統合を意味す

るが、それぞれが男性もしくは女性だということは、人間にとって最も原初的な欠如だからであり、統合はその欠如の充塡を意味する。したがって、結婚は同時に人格の完成を意味する。

もちろん、人格の完成という意味がより根本的なだけに、必ずしも結婚が英雄譚の終結ではない場合もある。しかし、反面、『桃太郎』が結婚しないパターンがほとんどなのは、次のようにそれなりの未完成な理由があることにもよる。

すなわち『桃太郎』が結婚しないことを違和感と感じないのは、英雄譚は結婚で終わるという物語構造上の常識が背景にあってのことである。では、結婚するためには何が必要かといえば、やはり統合に至るエネルギーである。『桃太郎』において、テーマの反復を意識すれば、「食欲」が頻繁に現れていることに気付く。モチーフにおけるお婆さんの食欲、戦いに敗北する原因となった鬼の宴会、これらは、正常の域を越えた食欲の例である。量的には多いのだが、それは生存のバランスを失わせるような、質的には良くないものとして現れる。反面、食欲は当然、生存の役に立つ。『桃太郎』では、食欲の良い面は黍団子によって示される。述語に着目すれば、黍団子によって味方を得、それによって鬼との戦いに勝利するといえる。しかし、それにもかかわらず桃太郎は結婚しない。ということは、なにか別の構造上の理由があるはずである。それは、エネルギーの獲得のしかたと、その使い方だといえる。黍団子はお婆さんから与えられたものであり、それを三人の家来に分け与えて、彼らの力で

勝利する。エネルギーとは本来、自分で獲得し、自分で使うという原則からすれば、未熟である。それゆえ、桃太郎は結婚には至らないといえる。

物語の構造からいえば、この統合はテーマの終結を意味するため、最後の安定的な構図を形作る。ここでは、すでに違和感はないのだからテーマは消滅している。また、物語に期待を持たせるために、「旅立ちのテーマ」すなわち、新しい可能性、新しいテーマに向けて旅立つという終わり方をする場合もある。

二　ストーリー解釈と構造

この節では、ストーリー解釈の前提となる概念のいくつかを述べる。特にここでは、解釈の大枠となる概念を述べ、より細かい概念は、以降の解釈の中で随時触れていくことにする。

（1）共時的解釈

本書において「共時的」とは、科学的必然性や科学的因果性、また、「通時的」すなわち時間的連続

による必然性が無いにもかかわらず、二つ以上の事柄相互に何らかの必然性や因果性が認められる状態を指す。したがって、自然科学的必然性・因果性や通時的必然性も含まれる。

例えば『ヘンゼルとグレーテル』の物語の場合、⑬で父親が母親の死を告げるが、それは「子どもたちが森に行っていた間」なのである。ここで物語の聞き手の心には、母親の死が、⑪の魔女の死と重なり、双方に共通する未熟な母親性の死を感じることになる。したがって、共時的解釈の方法をとれば、これらのふたりの死は、物語全体からいえば同じものの死だと見なすことができる。

同様に、この死は女性の死であり、魔女を殺したのもグレーテルという女性である。共時的解釈の方法を考慮すれば、この共通点は重要である。そもそも物語の始まり、つまりモチーフは、未熟な母親にあったし、物語のテーマは未熟な母親性の死によって新たな発達が得られるところにある。すなわち、この物語は、女性の発達にテーマがあることになる。そのことを潜在的な論理とするならば、魔女を殺すのはグレーテルでなければならないし、魔女を乗り越えて人格発達を推し進めたグレーテルが家に帰れば、ハウスキーパーとして、つまり一家の一本の柱としての生活が待っていなければならない。そこで、未熟な母親は同時に死ななければならないのである。

ところで、このような共時的な考え方は、物質的存在や心的イメージやその他もろもろすべてを一元的に一枚のスクリーンに映すように認識する仕方を前提としている。それが次節の「現象学的還元」

の方法である。

（2）「現象学的還元」と「構造」

本書は、物語を解釈する前提として、「現象学的還元」とそこから導かれる方法を用いる。

物語や昔話に限らず、事柄の意味とは、本来、存在全体によって構成されているものである。したがって、解釈者の持つ特定の前提的概念を押しつけてその前提に合致するもののみを客観的とするという超越的な独断をしてはならない。まして、まるで「赤信号＝止まれ」というような、ひとつの事柄の機械的置き換えは絶対にしてはならないことである。このような、すべての認識に共通する「あらゆる超越的措定の排除」（Husserl, *Die Idee der Phänomenologie* : fünf Vorlesungen, S. 5. ＝『現象学の理念』）をフッサールに倣って「現象学的還元（die phä nomenologische Reduktion）」もしくは「現象学的判断中止（epochē）」と呼ぶ。この現象学的判断中止を前提にすれば、はじめに物語で起こったことをそのまま受容することが求められる。

そのうえで、個々の事柄の象徴的意味に関して、辞書、事典類を参考にすることになるが、特にシンボル事典を参考にする場合に顕著なように、事典中の意味は時として無限ともいうべき多くの意味が記される。その中のどれがふさわしいかは、全体の中で決まることである。そして、その全体の仕

組みや構成の状態を表現しているものがなんらかの「構造」である。

構造と個々の事柄の象徴的意味とを組み合わせて、はじめて物語解釈が成り立つが、構造も、全体を網羅するという共通点があるとしても、さまざまな構造が指摘されよう。したがって、どの構造で解読を進めるのがふさわしいか、という問題も生じるが、筆者は、論理構造に沿った解釈妥当性の常識に照らして、ひとつの構造上に複数の事柄とその意味が論理的整合的に位置づけられ、ひとつの事柄が複数の構造上で同じ意味と判断される場合には、その意味は妥当していると見なす。

本書の考察はおおむね以上の前提に従って展開するが、以下、その理論的背景について確認しておく。

存在すべては、われわれがそう思っている通りに存在しているのだろうか、というのが考察の契機である。フッサールは、その問題を「現象学的還元」という概念とともに次のように提起した。

フッサールが現象学的還元の概念を確立したのは、上記の『現象学の理念』ヴァルター・ビーメルによる「編者序文」では、この書のもとになる講述をゲッティンゲンで行なった一九〇七年だとされている（ibid., S. 7）。したがって、ここでは、この書を参考にしつつ現象学的還元の意味を考察する。

フッサールはまず、「哲学的思考（philosophisches Denken）」と、「生活や学問における自然的思考

(natürliches Denken)」とを区別する（ibid., S. 3.）。

前者は「認識可能性の諸問題に携わる立場」であり、後者は「認識可能性の諸々の難問には無頓着な思考」である（ibid.）。そして、フッサールにおける認識可能性の問題、すなわち認識論とは、デカルトの懐疑考察（die Cartesianische Zweifelsbetrachtung）に始まるとされ、それに関して次のように述べられている。

コギタチオ（cogitatio）、すなわち、体験しそれについて端的に反省している体験の存在は疑い得ず、コギタチオの直観的、直接的な把捉と所有はすでにひとつの認識することであり、コギタチオネス（cogitationes）は最初の絶対的な所与性である。（ibid.）

すなわち、コギタチオ、およびその複数形のコギタチオネスとは、『現象学の理念』の訳注に、「純粋思念」「顕在的な意味体験」と述べられているように（フッサール、立松弘孝訳『現象学の理念』一五一頁）、構造的には意識現象であり、「体験に対する端的な反省」「直観的、直接的所与」などと述べられるように、複雑な反省や思弁的な反省を加えない意識に現れたままの現象を意味する。そして、それこそが最初の絶対的な所与性とされる時、現象学的還元の手がかりが得られることになる。

ここで現象学的還元を説明する際に、フッサールは、「内在と超越（Immanenz und Transzendenz）」

という対概念を提出し、それを基準にして論を運ぶ。すなわち、「コギタチオの直観的認識は内在的」とされ、客観的科学の、自然科学や精神科学、そして、数学も、超越的だとされる。さらに、客観的科学は超越の危惧、すなわち、いかに認識は自己を超え得るのか、意識内部に見つけられない存在にどのように的中することができるのか、という危惧に囚われるが、コギタチオの直観的認識の場合には、そのような危惧は成り立たないとする（Op. cit., S. 5）。

この点に関しては、次のように考察されよう。フッサールが述べるように、この内在は自然科学的な意味での心理学における内在とは異なる。そのような心理学は、人間の心と、それ以外の客観的世界とを始めから分けて考えるが、そのように考える限りにおいては、先の超越の危惧に苛（さいな）まれることは明らかである。これに対して、「コギタチオの直観的認識は内在的」と述べられる内在は、直観的であるから、その限りにおいては未だ超越的とは言えないが（のちに構成理論によって超越性を与えられる）、コギタチオそのものしか存在を確かめることができないのである。そこには、超越的などというものは、あるかどうかさえ問われないのである。このような内在をフッサールは「実的内在（reele Immanenz）」と呼ぶ（ibid.）。フッサールは、こうして、テカルトのコギトを手がかりにして、「実的内在者、もしくはここでは同義語ではあるが、十全的自己所与は疑いようがない」（ibid.）と、述べることになる。そして、それをふまえて「現象学的還元を、すなわちあらゆる超越的措定の排除を遂

行しなければならない」(ibid.)、つまり、例えば科学的な客観性といった客観的存在として考えることを排除しなければならないと述べることになる。

このことをフッサールは定義的に「現象学的還元とは、すべての超越的なもの（私に内在的に与えられていないもの）に無効だという符号をつけることであり、すなわち、その超越者の実在と妥当性をそのまま定立しないで、せいぜい妥当現象(Geltungsphänomen)として定立することである」(ibid., S. 6) と述べる。

やや難解になったが、要するに、この節のはじめに述べたように、フッサールもまた、すべての事柄は、簡単に「客観的」と呼んではならないと確認するのである。

そして、解釈に関してそこから生じることとして、ひとつの事柄を解釈するとしても、その事柄がそもそもどのような前提のもとで理解されなければならないのか、などと考えなければならない。言い換えれば、ある事柄は、普遍的な全体のひとつの切り口としての体系的構造のどれがふさわしく、その構造のどこに位置しているかを、常に吟味しつつ考察し続けなければならないのである。ちなみに本書ではその構造については、一の諸概念や、次項で述べる「場所」などの概念として述べているが、解釈の進展と内容に応じて適宜補足していくことはいうまでもない。

（3）場所

本書では、先述の構造のひとつとして特に「場所」に着目するのであるが、そのような解釈を可能にするために、場所に豊かな意味付けを与える考え方の根本を、西田幾多郎に拠る。

哲学的なテーマの中核を為す、絶対的な存在そのものを敢えて「場所」と名づけた西田幾多郎の場所概念について、筆者がかつて考察し、西田幾多郎『場所』（大正十五年、『西田幾多郎全集』第四巻、二〇八-二一八九頁）などを用いてまとめたその要点は以下の通りである。なお、『比較思想事典』（中村元監修、峰島旭雄責任編集）において筆者が簡潔にまとめた拙筆項目「場所［現代思想］」（四一二-四一三頁）を参照する。

（1）場所とは、古来、哲学のテーマのひとつで、例えば唯一絶対的な神などとよばれてきたような唯一絶対無限な存在の名称である（場所の唯一絶対無限性）。

（2）場所は一般的（普遍的）なものと特殊なものとの合一である。したがって、われわれが認識して言葉に発することができるすべての事柄（特殊なもの）を包み込んでいる。

（3）特殊なものだけしか認識できないわれわれにとっては、場所が全体として現れれば「無」として認識される。そして、すべての事柄はその無から現れるようにして認識される。これは、

場所という唯一絶対の存在から言えば、唯一の存在である場所自身が自己分化することである。つまり、どのような事柄も、例えば特定の人物であれ、特定の事実であれ、物理的現象であれ、イメージや空想であれ、夢や理想や愛であれ、すべて場所自身の自己分化、もしくは自己限定である（場所の自己限定）。

（4）このように特殊なものや個物も本来は普遍的な場所自身ではあるが、場所そのものは「無」としてしか認識されないものなので、それら特殊や個物は、場所を表現し、それらの発展なしには普遍的な場所の発展はないことになる（個による場所の限定）。

（5）このように、それら特殊や個が存在しないと普遍的な場所も存在しないし、逆に、普遍的な場所が存在しないと特殊や個も存在しない。それらは、相互に限定しつつ発展していくが、その発展の過程が総合的に示されるのが歴史である（場所の歴史性）。

このように西田幾多郎の理論は哲学の問題として、普遍的な存在を主な問題としているが、普遍的だということは、特殊にも通用するということである。つまり、この構造は特定の場所、本書の場合は物語や夢、イメージなどにおけるさまざまな事柄を問題にする場合にも有効だといえる。

そして、このような、最終的には歴史の意味に表現されている相互作用に着目すれば、そこには、

場所に関するダイナミズムが示されることになるが、人格発達の場合、歴史は生育史として示される。本書では各所で、このような場所に関するダイナミズムに注目しつつ分析することになる。

さて、このように示される「場所」の概念を物語解釈に適用させようとすれば、まず、(1)で示される場所の絶対性に言及しなければならない。ある物語において、まずはその物語の全体、それは、物語の内容のみではなく、物語が語られる状況、その歴史などをもすべて含んだ全体である。

そして(2)(3)のように、その全体から限定された個としての、その物語の特異性に着目しなければならない。一般的にはこの特異性はその成立とともに理解されるが、本書の場合、この特異性は、例えば「昔話」という領域を意味することになる。

さらに(4)のように、例えば「昔話」が、存在の全体、とりわけこの場合はわれわれ全体に対して与える影響が示されることになる。それは、本書では、解釈の最後に、われわれに対する生き方のヒントとでも言うべきまとめとして述べられる。

(5)では、むしろ解釈の手がかりとして考えると分かり易い。つまり、(1)から(4)までの、全体としての場所とそこに成立する個別的な事物との関係が、結果として歴史の流れとして現れているはずである。したがって、一般的にもある事柄を知ろうとすればその歴史を研究するのである。このように、歴史を、全体と個別の相互限定のダイナミズムの航跡だと捉えなおして、そのダイナミズムの

詳細を知り、ひいては、場所や個別の本質的意味を知るのである。

また、以上のこの関係は、特定の場所と、そこに成立する個々の事物やストーリーとの関係にも応用できる。

(1)(2)(3)においては、例えば『ヘンゼルとグレーテル』における森や魔女の家が無意識という意味を持つように、ある場所の持つ固有の意味は、そこに成立するすべての事柄に前もって特定の意味を与えてしまうのである。

しかし、(4)においては、それぞれの場所においても、その場所の意味とは独立して現れる個々の事物が個々の性格を発揮して物語を面白く見せる。これは、結局は場所を豊かに示すことでもある。

そして(5)においては、場所と事物の双方の働きが生き生きと歴史を形作り、ストーリーを展開させることになる。

このように、場所に関する考察は、ただ漫然と場所に着目するのではなく、全体としての場所とそこに成立する個々の事物との相互に働きかけるダイナミズムを捉え、それを、発展し展開する歴史や生育史として捉えていくのである。

本書では、このように捉えた場所の概念を、各所で応用して解釈を進め、全体を通して個々の場面の解釈に、この場所論的解釈が有効な場合には積極的に応用する。煩瑣(はんさ)にわたるので、上記の理論を

いちいち述べ直すことは最小限にとどめるが、本書で「場所」に着目した論を展開するときは常に以上の考え方を用いているつもりである。

第二章　昔話における「人格発達」と「癒し」

一　昔話と「人格発達」や「癒し」

昔話にはなぜ、物語の元型としての根底的な型が表現されうるのか。この節では、まずそのことを確認し、「人格発達」や「癒し」の意味をどのように求めればよいのかについて述べる。

昔話はまず口承文学、すなわち口伝えに伝承された物語だという点で、普遍的な型すなわち元型的パターンを表現しやすい形式を持つものだといえる。

特に昔話については、一般的に柳田國男の定義に従うが、その定義を考慮すれば、いかに型を重視し、そのことでわれわれの生き方の根底的原則を保存しようとしているかが分かる。まず、その定義を述べておく。

柳田國男の『口承文藝史考』という著作には、「我々がハナシといっているもののうちで、「昔々ある処に」という類の文句をもって始まり、話の区切りごとに必ずトサ・ゲナ・ソウナ・トイウなどの

語を附して、それが又聴きであることを示し、最後に一定の今は無意識に近い言葉をもって、話の終りを明らかにしたもの」（『柳田國男全集』第八巻、九〇頁）という定義が述べられている。

この定義からは、昔話が、伝聞であることに徹して、非現実的な性格を持っていることが強調されている。つまり、最初の「昔々ある処に」と、最後につけられて呪文性を持ち、物語の内容とは関係のない言葉、例えば「豆が煮えた」「どんどはらい」などのような言葉で挟まれたことで、非現実性を示し、さらに「又聴き」すなわち伝聞性を強調することでその非現実性を強化していると言える。

昔話のこの非現実性についてはさらに、柳田國男の、伝説と昔話との比較を参考にすると一層分かりやすくなる。柳田國男の定義によれば、伝説と昔話との相違は「（イ）一方（伝説）はこれを信ずる者があり、他方（昔話）には一人もないこと、（ロ）片方（伝説）は必ず一つの村里に定着しているに対して、こちら（昔話）はいかなる場合にも「昔々ある処に」であること、（ハ）次には昔話には型があり文句があって、それを変えると間違いであるに反して、伝説にはきまった様式がなく、告げたい人の都合で長くも短かくもなし得るということ」（同上、一一〇頁）とされている。つまり、伝説は、例えひとりであったとしても、それが現実にあったと信じる人がいるという前提のもとで成立しているが、これに対して昔話はまったくの非現実を前提としている。

では、このような非現実的な物語がわれわれの歴史の中で生き残り、生活や文化の中に残ってきて

いるということは、いったいどのような理由と意味を持つものなのか。

第一には、生存の原理や生存の知恵が含まれているということである。時を超えて残ってきたということから、それはなんらかの意味でわれわれにとって必要なものだと考えられる。このようなものは現実的に直接必要なものに比べて必要な理由が曖昧ではあるが、やはり残ってきた以上、なにか必要な理由があるはずだといえる。したがって、それは現実的なものよりもっと普遍的な意味で必要なものではないかと考えられる。つまり、普段はそれほど必要だと感じてなくても、もしくはただ単に楽しいからという程度の理由だとしても、それが何百年も伝承されるということは、何か深いところで必要だと感じているのではないかということである。そして、そのようなものの存在理由は、もはや、最も抽象的で根底的な理由だと思われる。つまり、それは生存にとって必要だというしかないと思われる。したがって、昔話には、生存の原理や生存の知恵が含まれていると考えられる。

第二には、昔話は形式上、生存の原理や知恵を読み取れるだけの奥行きがあるということである。地域が替わっても、また、時代が替わっても、特定の形式をかたくなに守るというのは、その形式でなければ伝えられないことがあるからだと推測できる。そして、そこで守られる形式によって表現されることの内容が、先に述べた生存に関して必要なこと、すなわち生存の原理や生存の知恵であるならば、昔話には、それを分析し、本書のようにやや深読みをして、生存の原理や生存の知恵を探し出

すことができるだけの奥行きがあるといえる。

いま、以上のような前提のもとで昔話の中の「人格発達」や「癒し」を読み取ろうとする時、それらはどのような型として表現されるのであろうか。

「人格発達」に関しては、子どもが大人になったり、小さいものが大きくなったりするが、物語分析の常識から言えば、人格発達の完成は、結婚で示されるのである。

また、「癒し」というのは、何らかの心身の傷や病気や障害、その他の不健康な状態が回復することをいう。

ということは、昔話の中に、人格発達の内容や、なにか上記のような不都合な状態が回復した内容があれば、そこに「人格発達」や「癒し」が存在することになる。そして、空間的時間的に型を変えないのだから、ひとつの物語の内容はすべて共時的に必然的な糸で結ばれているということになる。そこで、その回復に至る経緯の中に、必然的な回復に至る理由が忍ばせてあることになる。それこそが「人格発達」や「癒し」の条件である。これから、具体的な昔話の中の、このような点に着目して、「人格発達」や「癒し」を読みとっていく。

二　昔話解釈の方法

さて、以上の本質的な考察をふまえて昔話を解釈するのであるが、その具体的な方法は以下のように述べることができる。

第一に、共時性や現象学的還元に配慮すれば、全体をひとつのスクリーンに平たく写したような気持ちで、「述語が連続する流れ」として分析するということである。物語であるから、行為の主人公が入れ替わり立ち替わりして全体の流れを作っていくのではあるが、その主語に着目するのではなく、むしろ、述語に着目して、どのような述語が繋がれて物語の全体の流れを構成しているのか、という視点で分析する。そこには、語り手の心の動きの全体が反映されていると思われるからである。

それは、この物語が本章の一で述べたような意味での、伝聞による口承文学だということによる。口承文学は、必ず語り手がある。昔話の場合には、その語り手は不特定多数だが、共通の心理というものがある。その心理は、結局は語り手自身の心理の連続になり、その連続を反映するのは、関係を表現する述語の方だからである。

第二に、物語の中で示される当初の目的が実現したか否かに着目する。これはそのままテーマだとも言える。当初の目的とは、裏返せばなんらかの欠如を意味し、表現としてはそのように示されるものである。貧窮であったり、独身であったり、子どもであったり、病気であったり、障害があったり、

完全な状態からすれば物語にはさまざまな欠如がある。われわれの現実ではそれぞれの欠如を背負ってこそ人間らしい生き方ができるものだし、欠如のない完全な人などというものは存在しないが、物語では、その欠如が満たされる過程が記される。その欠如がどのように満たされていくかが、目的でありテーマであることになる。したがって、はじめに提出される欠如は、潜在的テーマすなわち「モチーフ」だといえる。この欠如が満たされれば、目的の実現としていわばハッピーエンドということになるし、それがうまくいかなかったら、悲劇ということになる。本書のように、昔話から生き方のヒントを得ようとする場合には、このうまくいくかいかないかの理由を考えることが重要な手がかりになる。

第三に、したがって、「ホメオスタシス（恒常性）、もしくは、発展可能性」が得られたか否か、を確認しなければならない。昔話の場合にはたいてい「めでたしめでたし」と、ホメオスタシスや発展可能性の獲得が表現されているので分かりやすいが、やはり、得られた安定的な状態を確かめることである。「ホメオスタシス」とは、恒常性と訳されるように、有機体が自らの存在を安定的に保っている状態を意味する。物語の場合、その連続性からさらに新たなテーマへと、旅立ちを示して終わることもある。これが、「発展可能性」である。

物語の登場人物もそうだが、先に語り手の心理の流れとして述べたように、物語そのものもひとつ

の有機体である。安定的な状態と言えば、そのひとつには生命体にとっての死をも意味するが、それはまた別の意味での有機体に変化することである。あくまでも、そのものの同一性、つまり、そのものがそのものとしてあるあり方を維持した上での安定的な状態を、そのもののホメオスタシスという。もちろん、この同一性という概念も厳密に個々の事柄に適用して考えなければならない。例えば、「肉体としての夏目漱石」はすでにその同一性を失っているが、「小説家夏目漱石」の同一性は現在も安定的に存在している。このように同一性を論じる場合には、論じる対象を厳密に規定して取りかからなければならない。このような同一性を意識したうえで、その物語において欠如がどのように満たされ、ホメオスタシスが得られたか、さらに、発展可能性にまで展開しているのか、などと考えるのである。

第四に、物語中の「エネルギー」に着目する。先に述べたように、エネルギーとは、本書の場合、有機体が安定的に同一性を維持することを理解する概念として用いる。あくまで象徴的な概念であり、科学的な定義などとは厳密に考えず、生命力、もしくは活力という程度に解しておく。

このような意味でのエネルギーについては、二つの側面から考えることができる。ひとつの側面は、「エネルギーの量的側面」である。物語の場合、休養、食事、睡眠、豊かな暮らしなど、豊かなイメージで表現される状態である。いまひとつの側面は「エネルギーの質的側面」である。これは有機体の統合的あり方で、その有機体の本質に即したあり方、すなわち理に適ったあり方をすれば少ないエ

ネルギーを有効に利用することができると理解する。したがって、この質に関しては、全体の構成や知識、知恵が重要な役割を果たす。

有機体の状態や、物語の展開で欠如が充実する方向を目指そうとする時、これらのエネルギーの状態に着目すれば、その実現の可否が予測できる。現実はそんなに甘くないといえるが、物語ではこのような意味でのエネルギーを安定的に保つことで、ホメオスタシスを得るようになっている。また、発展可能性の場合も、このようなエネルギーの充実を前提にして新たな可能性に向かって出発するようになっているといえよう。

第五に、特に場所に着目して解釈する際に、西田幾多郎の概念を考慮して、全体としての場所が個を規定し、また、個が全体としての場所を表現し、その相互運動が、全体としての意味を形成しているというダイナミズムに配慮することが必要である。

すなわち一例として、本書では特に、「意識」と「無意識」とが、場所の普遍的意味と密接な関係があるという前提で述べるが、その場所で行動する登場人物たちやその場所に示されるさまざまな事柄はその普遍的前提の上にまた個々の特有の意味を形成し、そのことが、その場所を解釈可能なレベルへと引き上げ、物語全体のより具体的な解釈を可能にするのである。このことを常に配慮しつつ個々の解釈を遂行する。

以上のような前提は、元来物語分析の探究から生まれたものであるが、それらを参考にして個々の昔話を分析し解釈していけば、特に昔話の成立上の前提からも、われわれの生き方の参考になると思われる。

三　『聴耳（ききみみ）』における「人格発達」と「癒し」

■『聴耳』の典型

関敬吾編『日本昔話大成3』には、『聴耳』が三種の型に分類されている。そのうちのA（二八八-二八九頁）は、動物の言葉を教えてもらって金持ちになったという「聴耳」のモチーフのみが示されているだけであるが、B（二九〇-三〇四頁）とC（三〇四-三〇九頁）は、「聴耳」のモチーフに加えて、「癒し」のモチーフが示されている。そのうちCは、狐を助けたら狐が女房になりに来たという「狐女房」の話と複合している型なので、ここでは、まず、Bの典型として記されている物語の概略を紹介する。

『聴耳』B（鹿児島県大島郡奄美大島）

1　貧しい男の流れ者が、ある村の薬師堂で、薬師如来と出雲神との密談を聞く。

2　密談の内容は、この男と生まれたての赤ん坊を結婚の糸で結んできたというものであった。

3　男は赤ん坊と結ばれてはたまらないと、その夜生まれた赤ん坊を捜し当てて、首を一突きして去る。

4　やがてある村を通りかかると、石の下から二匹の親子ねずみがでてきて、子鼠をつれてお伊勢参りに行くように頼まれる。

5　旅費は子鼠が盗んでまかなったのだが、帰りに見つかって子鼠は殺されてしまう。

6　瀕死の子鼠は、お伊勢参りができたので思い残すことはない。感謝のしるしに母鼠がお礼をしようとするが、お金ではなくこの家の宝を望むように、と言って死ぬ。

7　男は言われたとおりにして、ぼろぼろの頭巾をもらう。

8　その頭巾をかぶると、鳥の話が分かる。それは、京都の禁裏様（きんりさま）の病気を治すには、普請の際に屋根に巻き込んだ白蛇と、軒にはさみこんだ蛞蝓（なめくじ）と、土台の下敷きにした蛙とを取り去ることだという内容であった。

9　男は禁裏様の館で占い師を演じ、そのように三匹を取り去ると、禁裏様の病気はたちまち治る。

10　男は褒美に妃のひとりをもらって結婚するが、彼女の首には赤ん坊の時にその男につけられた傷があったという。

■『聴耳』の解釈

では、『聴耳』は、どのように解釈できるのであろうか。第一章や第二章の一、二を参考にして、物語を考えてみたい。

この物語で最後の状態を確認すると、禁裏様すなわち天皇が癒されることによって、主人公が美女と結婚できる、すなわち、独身だという欠如が満たされるということになる。ユング心理学などによると、天皇や殿様、王様は、意識と無意識の中心を象徴している。すなわち、天皇、殿様、王様は自覚している領域と無自覚の領域のすべて、本当の意味での世界のすべて、つまり全存在の中心の象徴である。その中心が癒されるのだから、これは大変な大事業を成し遂げたことになる。

このことは、結婚ということからも言える。当初は野卑で独身の男が、最後には天皇の妃のひとりと結婚するというのだから、破格の出来事である。それは、天皇の癒しを助けたからである。「結婚」とは昔話や物語分析では、人格の完成と同義だとされる。したがって、主人公は人格発達し、人格の完成を成し遂げたということになる。

このように考えれば、まず、テーマには「癒し」と「人格発達」が示されている。

そして、いま、この物語は、全存在の中心の癒しと人格の完成が同じ意味を持つといえる。これは、共時的解釈の方法を生かした読み方である。第一章、二の（1）で述べたように、「共時的」というのは、科学的必然性や科学的因果性がないにもかかわらず、なにか相互に関係があるとしか思えないような関係をいう。例えば、一日中、同じ名字の人にしばしば出会うという場合、それは共時的関係、すなわち共時性があるという。この物語の場合、全存在の中心の癒しと人格の完成が同時に起こったのだから、その両者は共時的関係があるという。

では、癒さなければならなかった病いとは何であろうか。この昔話には、禁裏様の病気の原因は、三匹の動物の苦痛であったとされている。物語や映像や夢の心理分析において、動物はわれわれの無意識における動物的要素を意味しているとされる。三匹の動物のうち、蛇は、意識と無意識とをつなぐ働きをするとともに、知恵と本能の両面を持っている。白蛇になると神秘的意味合いが増してくる。蛞蝓は、本能のうちでも原初的な要素を持つ。蛙は、意識と無意識とをつなぐ働きをする。われわれの内面において、これらの諸要素が傷ついていたとすれば、これはかなり重い症状である。

ところで第二章の二で、物語の分析は、主語ではなく、述語の流れを見ることが必要だとした。また、物語の全体を共時的な意味関係で見直すことも重要である。そのようにして確認すれば、すでに

物語の前の部分において、傷ついている内面的な諸要素つまりは未熟さが現れていることに気づく。それは、赤ん坊に対する殺害未遂と、子鼠の死である。

赤ん坊に対する殺害未遂は、同じ女性との結婚に到る伏線からも分かるように、男の内面の幼い女性像からの決別である。その意味では、男の人格発達を意味するのだが、方法が余りに野卑で幼稚である。このことは、この物語全体の流れに、未熟な要素が流れ続けることを示唆している。けれども、そのきっかけは薬師堂という神秘的な場所で、神仏の密談を聴いたところにあった。ここで、場所の意味に配慮して考察することが効果を発揮するが、これは、神秘的な場所で神秘的な情報を得たわけだから、無意識的なものとの出会いを意味することになる。つまり、そこで話されたことが今後の物語の展開のモチーフになる。神仏が結んだのだから、必ず結婚に至る。ということは、この物語は、もともと未熟なものが、人格発達して結婚に至るということを潜在的なモチーフとして持っていることになる。

子鼠の死の状況には疑問が生じる。子鼠も、その母親も、まるで喜んでいるようである。語り手にとっては、子鼠は死んで当然と言わんばかりである。その当然な理由は、ふたつの点から説明できる。ひとつは、子鼠が泥棒をして旅費をまかなったという点である。昔話の場合、善悪は明瞭であり、このような金銭の盗みには罰を与えなければならない。もうひとつは、「癒し」と関係するもっと重要な

ことである。子鼠は、伊勢参りを済ませてから死ぬのである。場所の意味に着目するならば、伊勢参りというのは、旅を続けて神秘的な場所に至り、祈ることで人間が変わる、すなわち、人格発達することを意味するのである。お参りをするまでは、まだ人格発達していないのだから、旅のための盗みも黙認される。しかし、いざ人格発達してしまうと、正義を通さなければならない。語り手の心の中に生じるこのような論理によって子鼠は死ぬのである。共時的に言えば、子鼠の死によって、この物語の全体がぐっと人格発達するのである。また、西田幾多郎が論じたように、個が全体としての場所を表現するというダイナミズムを考慮すれば、子鼠の死という感情に訴える個の行為が、物語全体に強い意味を与え、その意味こそが、人格発達そのものであるということになる。そしてそれは、最後の癒しに接近することを意味する。

ということになれば、子鼠の死が同時に、神秘的な頭巾の獲得と一致することも説明できる。物語の全体が大きく人格発達すれば、その人格発達を具体的に実現する道具が必要になる。それが、この頭巾である。『浦島太郎』の玉手箱や、『一寸法師』の打出の小槌など、昔話には一気に結論を導く神秘的な小道具がしばしば登場するが、それらが必ず結論に結びつくということは、それらは、本来の原理原則を象徴しているものだといえる。それぞれの物語の主人公が、物語の中で行なった行為の結果が、それぞれの小道具によって具現されるのである。この物語の頭巾は、鳥の言葉を聞くことがで

きた。人間以外の動物の言葉を聞くことができるというのは、知恵を象徴しているが、その知恵は、意識と無意識の全体から必然的に導かれた真の知恵である。語り手の内面において、赤ん坊は傷つけられて幼稚さが死に、今、どこかで着々と美しく人格発達し続けているという思いがある。先に述べたように、赤ん坊を傷つけるという幼稚さは、伊勢参りと、幼稚さを象徴する子鼠の死によってなくなり、物語の全体は人格発達をとげたという思いもある。それらのすべてによって示される人格発達への次のステップが、頭巾によって象徴されているのである。

この頭巾が、最後の難関を取り除いて、すべてが自由に人格発達する。そこではじめて、物語の全体に「癒し」が生まれる。そして、この癒しは人格発達と同義であることになる。

このように考えてくると、『聴耳』には、重要な「人格発達」と「癒し」のヒントが示されている。それを述べる前に、他の『聴耳』との比較をしておく。

■『聴耳』の比較

『聴耳』の物語を型として確認するためには、他の地域の話と比較しなければならない。この節は、考え方を確認しつつ述べるという意味合いのある節なので、以降の節では簡略化するこのような比較を試みておく。比較することで、これまで述べてきたことが改めて確認できるはずである。比較する

『聴耳』は、比較的構造のはっきりした次の昔話である。

『聴耳』（愛媛県北宇和郡）（『日本昔話大成３』二九六頁）

１　ある日若者が鯛を助けた。

２　その鯛は海の王の一人娘だったので、お礼に海の王から龍宮に招かれた。

３　陸に帰る時、土産に「聴耳」という人間以外の言葉が判るという宝をもらった。

４　若者はその聴耳で雀の声を聴いて黄金を手に入れた。

５　次に烏（からす）の声を聴くと、御殿の姫が病気なのは屋敷の主の蛇が建物の屋根に挟まれて死にかけているからだという。

６　若者は蛇を助け、蛇が助かると同時に姫の病気も治り、やがて姫と結婚した。

この北宇和郡の物語は、『浦島太郎』のように始まり、一見、先の奄美大島の物語と異なるように見えるのであるが、その型において共通のものであることがわかる。特に、場所の構造的意味の共通性にはそれが顕著だし、他の概念においても本書での方法を用いると、ほぼ同じことを示しているとさえいえる。以下、ストーリーに添って、それを確認していく。

若者が鯛を助けたのは、無意識的なものとの関わりの開始である。奄美大島の場合は、薬師堂だったのが、ここでは海およびその中心の龍宮という神秘的かつ無意識的な存在となり、神秘的な情報は鯛が女性だったということになる。奄美大島の場合は、その情報の赤ん坊がそのまま将来の結婚相手になるが、北宇和郡の場合は、語り手の内面のみで結婚というモチーフが示される。しかし、この語り手の内面のモチーフということになれば、双方ともが同じ型を持っていることになる。

次に「聴耳」を手に入れる状況であるが、双方に共通していることは、いずれも無意識の要素を意味するもの（鯛、鼠）からの恩返しによることと、神秘的な場所（龍宮、伊勢神宮）が関係するということである。これは、無意識の中心まで到達して変化し、その結果、恩返しという形の人格発達を得たことを意味する。

雀の声を聴いて金を手に入れる点については、奄美大島では触れない。しかし、結局は褒美を手に入れることになる。

そして、双方に共通しているのは、動物が閉じ込められて病んでおり、それが解放されることによって、高貴な人が癒され、主人公に幸福と結婚が訪れるという結末である。動物が閉じ込められて病んでいるというのは、先にも述べたように無意識的な要素が傷ついていることを意味する。それを動物の言葉を解読して知るというのであるから、これは、意識と無意識とを貫く真の知恵を発揮するこ

と、つまり、生存や存在の原理原則を発揮することを意味する。

すなわち、「聴耳」という道具は、この生存や存在の原理原則を象徴するものだということになる。

こうして比較してみると、表面上異なる話でも、共通の型を持つことが分かるし、その共通の型は、共通のテーマを表現していることが分かる。

そのテーマを一言で言えば、「無意識的な構成の変化による人格発達に基づく癒しと至福」だといえる。

では、このことを導くために本書で用いる概念はどのように働いたのであろうか。

「場所」「退行」「再統合」「エネルギー」という概念を用いて、もう一度、この『聴耳』の物語を見直すと、先の分析に加えて、次のように補うことができる。

まず、薬師堂という神秘的な場所や、海や旅という未知の場所は、退行する場所である。無意識に入り込んでいるので、日常の意識的な活動では知ることのできない事柄や、感情を知ることができる。しかも、ここで得られる知識の中で、神仏、天皇、殿様、老人、先生、リーダーなどの中核的存在から得られた知識や、寺社、龍宮などの神秘的な場所の中心において得られた知識は、意識無意識の全体の構成によって生じた中心的知識であり、原則的には真実であるといえる。したがって、薬師如来と出雲神が密談した内容は、結局実現するし、伊勢神宮にお参りすれば、物語の幼児的要素としての

子鼠が死に、そのことで物語全体が人格発達し、同時に画期的な知恵の象徴たる「聴耳」を手に入れるのである。また、龍宮に至っても同様に「聴耳」を手に入れることになる。

ここで、エネルギーの問題を考えてみる。いずれも「聴耳」を手に入れたのだから、エネルギーは充実していたはずである。それは、どこに示されているのであろうか。少なくとも、エネルギーの量が満たされる記述は見あたらない。そこで質の問題になる。では、質の高さを現わす表現があるのだろうか。それは「感謝」である。何か善いことをすれば感謝される。この善いことができるというのは、質の高さを意味している。われわれも日常、「人間の質が高い」ということと「善い人」というのを同じ意味で使う。『聴耳』のふたりの主人公は、それぞれに行為は異なるが、いずれも感謝されてその結果「聴耳」をもらっている。その時、語り手には、この主人公の質を高く述べたいという意志が働いているはずである。

さて、「聴耳」を手に入れて、それを利用する仕方はほぼ同じである。先にも述べたように、それは、意識無意識の全体を見通すような、日常を超える知恵や知識を意味する。なぜそのようなものが手に入ったかといえば、退行し、善いことを行ない、質の高い再統合を得たからである。

もちろん、禁裏様の館も、御殿も、無意識の中心で、本来は全体のホメオスタシスの中心が健康に存在しているはずの場所である。その中心が病んでいるというのは、意識無意識の全体の構成が病ん

でいることになるが、意識的な象徴でもあれば一目瞭然、原因を取り除くことができる。この場合、それは動物で示される意識的な表面では見えないが、退行してはじめて気づく無意識の要素が病んでおり、「聴耳」によって鳥や烏から知らされるまではそれが分からなかったのである。そこで、意識無意識の全体を見通す知恵や知識の出番となる。神秘的な「聴耳」を信じるためには、人は退行しなければならない。意識的な殻が固かったら、説明のできない神秘的対象は理解できないからである。

こうして無意識的な原因をとり除けば、当然、全体は高いレベルの再統合を得ることになる。それは同時に、すべての欠如が満たされることを意味し、独身の主人公は、高いレベルの結婚に至ることになる。

■『聴耳』と「人格発達」および「癒し」

では、この物語から得られる「人格発達」や「癒し」のヒントはどのようなものであろうか。

まず、最も大まかなことからいえば、奄美大島の場合、この物語の癒しが、未熟さからの癒しであるのだから、未熟さを脱しなければならないということである。「人格発達」こそが「癒し」に繋がる、ということでもある。この例では、それは、赤ん坊への殺害未遂や子鼠の死という刺激的な設定になっているが、その行為が次のより成熟した段階に繋がっている。

次に双方に共通する重要な契機と言えば「聴耳」の獲得だが、その箇所を振り返れば、善行を施すことを契機として退行し、しかもすみやかに現実においてそれを利用しなければならないといえる。ここで重要なのは、善いことをして無意識の構成を充実することと、退行の期間である。第一章一の（2）に述べたように、退行は混乱状態でもあるため、エネルギーを消耗する。したがって、そのまま退行していると帰ってくることさえできなくなる。時間をかけ過ぎて、帰ってきた時には、時すでに遅し、というのは『浦島太郎』である。そこで早急に、意識の世界へと帰ってこなければならない。善行をするなどというように、無意識の構成が充実していれば、このような、退行からの還帰が早くなり、その分、次の人格発達へと向かうことができるといえる。

こうして、退行と再統合を繰り返し、徐々に高い統合を得て人格発達をすることになるが、その場合重要なものはやはり知恵や知識ということになる。それも、この物語でも示されるように、退行と再統合の過程において得られた知恵や知識である。退行の際に得なければならない知識は、神仏や竜王が登場するように、絶対的な原理や原則、すなわち生存原理に則した知恵や知識でなければならない。極度の恐怖心を伴ったり、人格の尊厳を損なったり、ただの一時的な気晴らしだったり、極端な減量を長期間続けたり、正常な日常生活の感覚を失うような、特殊な娯楽や特殊なスポーツなどは、必ずしも生存原理に則したものとはいえない。一般的に、退行して得られる知識のなかには、生存に

反するような知識、つまり、人がそのままそれを続けていけば次第に死が近づいてくるような行為を勧める知識が含まれる。それらは、実は、意識過剰の偽の知識なのである。われわれが求めなければならない知識とは、われわれがそれを続けることによってわれわれの生存が維持され、発達できる行為に関する知識でなければならない。このような知識によって人格発達してこそ、真の癒しが得られるのである。

この『聴耳』の物語から「癒し」についてわれわれが示唆されるヒントは以上のようなものである。以下、他の昔話の解釈を通して、さらにそのヒントを得る。

四　『瘤取り』における「癒し」

この節では、「退行」と「再統合」の型が明瞭に示される『瘤取り』を分析して、心身に障害を持つ場合の癒しの条件の一端を考える。なお、この物語には、「人格発達」のテーマは明瞭には示されない。主人公に老人を設定することによって、語り手はそのテーマを無意識的に避けたとも考えられる。しかし、それだけに「癒し」のテーマが直接的に示されることになる。

■『瘤取り』の典型

『瘤取り』は昔話の中でも代表的なものだけに、各地でさまざまな変容が起こっている。鬼であったり天狗であったり、『鼠浄土』の話と合体したりする場合が多い。ここでは、典型として、最も単純で、他との共通性が高い関敬吾編『日本昔話大成4』における大分県宇佐市の例（二六四頁）、長崎県下県郡の例（同上）、島根県大原郡、仁多郡の例（二六五頁）、および『宇治拾遺物語』の三『鬼に瘤取らるる事』（『新日本古典文学大系42）などを参考にひとつの物語として紹介する。

『瘤取り』（大分県宇佐市、長崎県下県郡、島根県大原郡・仁多郡）

1　瘤のある爺が山仕事に行く。

2　雨が降ってきたので、木のうろに入って寝る。

3　目をさますと夜になっており、近くで鬼（天狗＝この本では鬼にしておく）が宴会をしている。

4　彼らの踊りをみているうちに爺もたまらなくなり、つい飛び出して踊る。

5　鬼たちは喜び、爺が帰ろうとすると、瘤を取って、あしたも来るようにという。

6　隣の爺がこれを聞いて、鬼の宴会に飛び出して踊るが、下手なので瘤をつけられてしまう。

■『瘤取り』の解釈

この物語には、ひとりの爺の瘤が取れたという点で、明瞭な癒しのテーマが含まれている。なぜ、瘤がとれたのか、それを第一章、一の（2）や二の（3）における「退行」「再統合」「エネルギー」「場所」などの概念を手がかりにして考えていく。

ところで、はじめに物語解釈の方法の一端から考えれば、この物語には明瞭な対比構造を指摘することができる。対比構造には、比較においてテーマが内包されるのが常識であるが、この場合もそれを確認することができる。

それは、ふたりの爺の存在である。片方は瘤が取れ、片方は瘤をつけられてしまったのである。しかも、瘤がつけられた隣の爺もさほど悪いことをしたとも思えない。太宰治も昔話をもとに独特の風刺をこめた作品『お伽草子』で、「この物語には所謂「不正」の事件は、一つも無かったのに、それでも不幸な人が出てしまった」と述べている（新潮文庫、二二七頁）。しかし、先に述べた昔話の性格を考えれば、やはり、この隣の爺はなにか悪いことをしてしまったと考えられる。その悪いこととはなんだったのか、それはなぜ悪いのか、それを考えることが癒しの手がかりになるのではないか。したがって、このふたりの爺の対比の考察をしつつ、以下の考察を進める。

まず、「場所」を考慮して、癒しという点から、それが行なわれた場所について考えてみる。瘤が取れて、爺が癒しを得るのは「山」という場所である。「山」は無意識の象徴だから、ここで退行が起こっている。したがって、語り手としては、エネルギーが消耗することをどこかに意識しているといえる。雨がふってきてエネルギーの消耗は進む。長崎県下県郡の場合には単に「日が暮れた」（『日本昔話大成４』二六四頁）となっているが、エネルギーが消耗する状況という点では同じことを考えているといえる。

ところでこの爺は「木のうろ」というさらに深い無意識へと退行する。しかしここで彼は眠り込んでしまう。眠りはエネルギーの充実を意味する。物語の展開として、次は鬼との遭遇というエネルギーを消耗する大変な事態が待っているのだから、その後に予想される新たな統合を、高いレベルのものにするためにも、ここではエネルギーをたっぷり蓄えておかなければならない。

やがて、鬼の宴会が始まる。この物語では、宴会と踊りは最もリラックスした状況なので、退行の極だといえる。そこでは、鬼のような超現実的なものが出現する。この鬼については、のちに詳しく述べるが、結論から言えば、この物語の場合は生存原理を意味している。

この爺は、眠った後エネルギーが満ち足りていたこともあって、自然にこの退行に向かう。『日本昔話大成４』における山形県新庄市の例（二六〇頁）では、面白そうで黙っていられなくて踊りに参加

したと語られるし、鳥取県東伯郡の例や石川県珠洲市の例（二六六頁）や新潟県西蒲原郡の例（二六七頁）などは、踊り好きな爺と語られている。これらは自然な退行を表現しているといえる。

そのような自然な気持ちで踊れば、当然、鬼たちにとっても心地よく、物語の全体が楽しくなる。この楽しさこそが「癒し」である。そこで、この物語の帰結では、もともとあった身体症状における異常な要因がとり除かれることになるのである。

では、これに対して、隣の爺の場合はどのように解釈すればよいのだろうか。

まず隣の爺は、瘤を取る、という目的意識を強く持つ。この目的意識を貫こうとするところに、無理が生じる。はじめの爺と違って、意図的に木のうろに隠れる。眠ってエネルギーを蓄えるどころではなく、今か今かとエネルギーを消耗して鬼を待つ。そして、鬼の中に出ていくが、新潟県栃尾市の例のように（二六七頁）、「無理に」出ていくのである。『宇治拾遺物語』では「おそろしと思ながら、ゆるぎ出たれば」つまり、恐ろしいと思いながらも身体を震わせて現れた、とされ、「天骨もなく、おろおろかなでたりければ」つまり才能もなく下手糞に演じてしまったのでとされるように（『新日本古典文学大系42』一一二-一一三頁）、緊張のあまりエネルギーが消耗した様子が描かれている。これだけエネルギーを消耗していては「癒し」はありえない。鬼たちは、別に悪事を働く意図もなく、ごく自然に隣の爺に不幸な身体的条件を与えてしまうのである。隣の爺は「癒される」ばかりか、もっと悪化

した症状を得てしまうことになる。

■『瘤取り』と「癒し」

このような物語を理解する場合、昔話が語り手の心理の表現であることを考えれば、そこで記される状態は、そのまま直接的に理解してはならない。この物語でも、身体症状として記されるが、あくまで、心理的な地平で述べられる意味での異常な事態であって、現実的な身体の状態を直接指すわけではない。したがって、ここでとりたい「瘤」とは、単に物質的な意味での瘤ととるのではなく、心身の全体における何らかのアンバランスと理解しなければならない。以下、一応はこの物語の言葉を用いて解釈するが、実際には、以上のような意味で述べていることを前提にしておく。

『瘤取り』から導かれる癒しへのヒントは、まず、自然な退行を心がけることだといえる。しかし、自然な退行ほどむずかしいものはない。「自然な」退行ということを、ただ単に自分の思うままに、とか、自分にとって心地よいからなどという理解で行なってはならないからである。自然という言葉が、天然自然という意味にも適用されるように、本来「自然に」という言葉には、自分のわがままではなく、客観的な普遍性との合致というニュアンスがある。『宇治拾遺物語』では、この爺が踊りに飛び出していく際に、「ものの付たりけるにや、又、しかるべく神仏の思はせ給けるにや」（同上、一〇頁）

と、自分の意志ではないことと、神仏という客観的な存在との関わりとの双方を暗示している。また、この物語で、そのような客観的な判断をし、普遍的な目安の役を果たし、具体的な行為を行なったのが、鬼や天狗であった。この物語では、鬼や天狗は、意図的な悪事はしない。隣の爺に瘤をつけるのも、返してあげるという意識である。つまり、鬼や天狗こそが、自然に行動しているのである。場所のありかにおいても、無意識の中心に存在するものとして表現されるし、その述語的意味においてもまた、鬼や天狗は、生存原理そのものだといってよい。

退行しているときこそ、真の生存原理が必要である。一般に、退行している時には、何が本当に自分にとって必要なのかがわからない。退行しているつもりで、実はただ単に自分のコンプレックスに振り回されて遊んでいる時に、生存原理のことを言われると、逆に厳しく感じ、反発し、恐怖心さえ感じるものである。しかし、その時こそ本当に必要なのは、真の生存原理である。月並みな言い方かもしれないが、その時こそ、勇気と愛をもって、生存原理を伝えることが求められる。

東北地方の『瘤取り』には、この生存原理を意識して、神秘的な対象に祈るところから始める例が多いようである。福島県南会津郡の例では、天狗に瘤をとってもらう仕方を習うのに、社に祈願している（『日本昔話大成４』二六八頁）。また、宮城県登米郡の例では、神様の使いの鬼、と明確に語られている（二六九頁）。

もし退行している時に、このような真の生存原理に出会えなかったら、それはいずれ、自覚しないままに重要な病に陥ったり、反社会的な人格を形成したり、非人間的、非現実的な生き方に陥ることになる。非行グループや、事件に結びつく団体や、非社会的なことを是と言わしめる集団や、反社会的な集団といわれるものなどは、退行させながら、真の生存原理に出会わせるのではなく、えせ原理を押しつけているにすぎないのである。それは、結局は、隣の爺でしかない。自分では上手に踊っているつもりでも、実際には、生存にとってとても危険な状態にあるといえる。

このような場合の目安は、先ほどの社会性や日常の常識性などだが、その場合常に、生存を延長できる方向を向いているのか、を考慮しなければならない。

こうして、『瘤取り』から、癒しのヒントを得たといえるが、似たような昔話でも同様な解釈が成り立つのであろうか。次章ではその例を考えてみる。

五　『手斧（ておの）息子』における「人格発達」と「癒し」

この節でも、心身のアンバランスを身体的な障害として表現されている昔話の例を第一章、一の（2）

や二の（3）における、「退行」「再統合」「エネルギー」「場所」などの概念を利用しつつ解釈し、「人格発達」や「癒し」の問題を考えてみたい。先の『瘤取り』よりは、たくましい話である。

■『手斧息子』の典型

『手斧息子』という昔話がある。生まれつき身体の一部が手斧（ておの）や鉋（かんな）になっている少年の話である。心身のアンバランスを表現する場合、同じように身体症状で表すのに、『瘤取り』は「瘤」をただの厄介ものとして表現しているのに対して、『手斧息子』は、その症状を道具として活用して自分の人格発達を助けるという、積極的な話である。主に鹿児島県に伝わる話だが、その典型的な例を紹介する。

『手斧息子』（鹿児島県大島郡沖永良部島）（『日本昔話大成3』四四-四七頁）

1　ある村に、脛に手斧（ておの）が手には鉋（かんな）が生えている少年がいた。

2　少年が過失で人を傷つけて困るので、親は少年に船を作らせて海に流す。

3　少年は鬼の島に着く。

4　少年が鬼の家にしのびこんでみると、大鍋には人間が煮られている。

5　少年は樽の味噌を食べてしまい、糞を入れる。

6　少年は塩甕の塩を捨て、自分が隠れる。
7　鬼が帰ってきて、塩を取ろうとすると、少年の鉋で手を傷つけてしまう。
8　鬼は味噌を食べようとして、糞を食べる。
9　鬼は少年を発見して追いかけるが、少年は逆に脛の手斧で鬼の大将を殺す。
10　鬼たちは宝を船に積み込んで逃げるが、少年はその船に隠れる。
11　鬼たちの前に少年が現れると鬼たちは海に飛び込んで逃げる。
12　少年は宝を持って帰るが、両親はまた人を傷つけないかと悲しむ。
13　少年が宝を家に運び込んでから、川に入って水を浴びて、川石で手足をこすったら手斧も鉋もとれて、りっぱな男になった。
14　親を大切にして、よい暮しをした。

■『手斧息子』の解釈

この物語は、身体にハンディがあった少年が、冒険の結果、治癒したというものである。この癒しが、最後の場面で、ただ単に「川に入って水を浴びた」だけで行なわれたのには、全体の筋から必然的な理由があるといえるし、「場所」の意味に着目すればそれを具体的に考えることができるはずであ

る。これを、「退行」「再統合」「エネルギー」「場所」などの概念を参考にして考察する。

まず、少年は、不運な姿をしている。両手両足に刃物が生えているということだけをとってみれば、さまざまな象徴的意味を考えることができるが、その後に起こった出来事に、この物語におけるこのことの意味がこめられている。

このような象徴的な事柄や出来事を分析し、解釈する場合には、とかく、事柄そのものについて、分析や解釈をする人の主観や好みや、個人的な情報が投影されやすく、つい、自由な思い込みで意味を説明してしまう。しかし、第一章、二の（2）において、「現象学的還元」とその概念から展開させて述べたように、事柄の意味は、全体的な表現の内にこそ示されているものである。そのような発想をもって、分析や解釈を行なおうとする場合、当の事柄がどのような出来事を引き起こしたのか、どのように修飾されているのか、どのような述語を持っているのか、など、当の事柄にまつわる具体的な情報から、その意味を組み立てていかなければならないことを述べてきた。これは、物語に限らず、日常の場面でも同様である。少年非行の場合に、しばしば、「うちの子にかぎって」という親の思い込みが、少年のアンバランスを見落としていることが指摘される。「うちの子」がどのような行動をとっているのか、どのような生き方をしているのかなど、具体的な観察を丁寧に行なっていれば、「うちの子」の真の姿が理解され、アンバランスがあれば、早めに対応できるはずである。

さて、『手斧息子』の場合、身体のハンディによって起こった出来事は、他人を傷つけることと、それによって追放されることである。つまり彼の姿は、当面のところ、生存にとって不利な状況である。

ここで「場所」の構造に着目すれば、少年は、そのハンディを背負ったまま海に流されるのである。親から徹底的に離されるというのは、「自立」のテーマであり、陸や村と対比されるとき、海は無意識や識閾下を意味するので、ここから「退行」が開始するが、この退行は自立するための、すなわち大人になるための退行だということになる。つまり、人格発達を目指す退行なのである。

さらに、エネルギーを考える。少年は海に流されるに当たって、すなわち退行が開始されるに当たってエネルギーを得たのであろうか。第一章、一の（2）でも述べたように、エネルギーを得ていないと再統合が困難になる。

海に流されるに当たって、その船は少年自身によって造られたものであった。ここが重要である。昔話や英雄伝説や神話の場合、エネルギーは本人が造り出し、本人が使用するのが原則である。この原則にそったときには、おおむねハッピーエンドになる。この原則からいえば、少年は自らを流す船を造った時点で、エネルギーを得たことになる。そして、この物語の特徴である、身体に手斧と鉋をつけていることが、この船を造るのにおおいに役立ったのである。このように、すでにハンディをエネルギーの獲得に利用している。これは、この少年の、むしろハンディをこそ活かした積極的な癒し

がすでに潜在的に始まっていることを意味する。

鬼の島での冒険は、「場所」の意味からいえば、鬼の島が無意識の極、すなわち退行の極であるだけに、さまざまな象徴的意味を持っている。

まず、人間が煮られているのは、物語全体の「死と再生」を暗示する。「死と再生」とは、物語中のそれまでの状況が終わり、新たな状況が生まれることを意味する。「死」の段階は、このように死体や骸骨で表現されたり、枯れ木や切り株で表現されたりする。また、「再生」は、赤ん坊や幼児で表現されたり、苗や芽吹きで表現されたりする。「死」の段階でエネルギーがあれば、大きな「再生」、すなわち高いレベルでの人格発達、さらには質の高い再統合が得られる。この物語では、人間が煮られている場面のすぐあとに、主人公がエネルギーの量を満たすための「味噌を食べてしまう」という行為を準備している。また、塩甕の塩を捨てて自分が隠れるのは、後の行動からも分かるように、知恵、すなわちエネルギーの質を象徴している。こうして、この物語では着々と、高いレベルの人格発達すなわち質の高い再統合が準備される。

鬼との戦いは、物語全体の葛藤を意味する。つまり、対立的な要因相互の戦いとみてよい。生存原理にかなった方が勝てば、ハッピーエンドになり、そうでなければ悲劇になる。この物語は、結果がハッピーエンドなのだから、鬼にとっては不利な条件が重なる。塩を取ろうとする鬼は、隠れていた

少年の鉋で手を傷つける。これは、鬼にとってはエネルギーの消耗である。それが、本来、少年の生存を妨害したハンディによってなされたことに注目しなければならない。少年はハンディを逆に利用することを覚えたのである。これが知恵の発揮である。すなわち、エネルギーの質の充実を意味する。味噌を食べようとした鬼は糞(くそ)を食べさせられる。これは、まともな食事ができなかったという意味では、鬼のエネルギーの量的な消耗である。また、不潔なものを食べたという意味では、エネルギーの質的な消耗である。そして、鬼の大将との一騎討ちでは、逃げたとみせかけて脛の手斧でやっつけてしまう。先程と同様、知恵を用いてハンディを逆に利用して、勝利を得るのである。鬼の大将が死んだので、これで、少年にとっての死と再生は実質的には終わり、共時的にはすでに成長しているといえるが、昔話なので、具体的にわかる形で終結へと向かわねばならない。

鬼の島から海に漕ぎ出す鬼の船は、場所の方向の意味から言って再統合に向かっている。したがって当然、少年にとってふさわしい宝物という土産が手に入り、そのまま、陸の村へと帰って来る。この場合の宝物はもちろん、成長そのものである。これで、図式的な再統合はできたはずだが、この物語のテーマ、すなわち、少年の持つハンディについて決着を付けなければならない。手斧も鉋も、少年にとってもはやハンディではない。それで、川に行って川石でこするだけですっかりきれいになると表現されるのである。「場所」の意味としては川は退行の場所であり、同時に神秘的なエネルギーが

流れてくる場所でもある。

こうして、この少年の物語は、生まれつきのハンディを克服するばかりか、むしろそれを利用して、自分の人格発達を成し遂げたという物語でもあることが明らかになった。

■『手斧息子』と「人格発達」および「癒し」

この物語はどのような癒しなのかを考える場合、先にも述べたように、昔話におけるハンディは、表面的な表現そのままのハンディを意味しているとはとらないことを確認する。あくまで、心身の全体におけるなんらかのアンバランスだと捉えるべきである。したがって、このようなハンディはすべての人に存在すると言わなければならない。そして、普遍的な型を伝える昔話のこのような自己のハンディを超える仕方は、われわれすべてにとって必要なものだといえる。

ふりかえって、「癒し」という視点から確認してみると、まず、全体を貫く重要な姿勢として、ハンディに負けないという意気込みが必要だといえる。この少年は、身にふりかかる不幸や不運に対して、常に前向きに取り組む。人に迷惑をかけるとはいえ、親に捨てられて海に流される状況は、先にも述べたように、自立と退行を意味する物語上のレトリックではあるにせよ、当人にとっては衝撃的な出来事である。それをひとつひとつ素直に受容し、さらに生き抜くための工夫を繰り返す。結局はそれ

が、エネルギーの質、量の双方にわたる充実を導き、人格発達を招き、結局は癒しに至ることになる。

このように、この少年の行動で目立つのは、いつも工夫をしているということである。鬼の島でのさまざまな工夫が、彼を勝利へと導いたのである。これは、知恵の発揮、すなわち、エネルギーの質を整える工夫だと言える。

その際、彼のすぐれた点は、ハンディを武器にするというところにある。当初、村から追放される原因にまでなった身体的なハンディを、彼なりにうまく利用して、相手をやっつけるのである。

その結果、宝物つまり成長を手に入れ、ハンディがハンディではなくなったという、つまり、癒されて普通の身体になったということに至るのである。

このことは、われわれの生き方に重要なヒントを与えてくれる。われわれはだれしもなんらかのハンディを背負って生きている。このハンディは、要するに心身のアンバランスなのだから、たとえどんなに不安定な身体症状であったとしても、物質的な形の問題ではなく、結局は内面的な受け取り方の問題である。したがって、形は変化しなくても、成長し人格発達するにしたがって癒されることも多いのである。こうした、人格発達による癒しが、この物語のひとつのテーマである。

それに加えて、この物語は、さらに積極的な癒しを提起する。それが、ハンディをこそ武器に使って、高いレベルの人格発達と癒しに結びつけるというものである。人類の歴史の一側面においては、

古来、重いハンディを背負った人々を大切にする文化があった。それは、ハンディがあるからこそ、ハンディのない人々よりも優れた能力を育て、発揮することが出来るからである。視覚障害の方が、どれほど注意深く身体中の感覚を研ぎ澄まして生活しているかについては、よく言われることだが、実は、すべての人が、なんらかのこのような、自分だけの感覚を持っているはずである。完全な人はだれもいないのだから。

この『手斧息子』が教えるように、われわれも、自分のハンディをマイナスに捉えて落ち込んでいるのではなく、むしろそれをこそ生かして成長と癒しに結びつけたいのであるが、そのときこそ、本当に必要なものが、エネルギーだということに気づく。特に、工夫する知恵、すなわちエネルギーの質については、十分に配慮する必要があるといえる。これは、社会や自然を含む全体のエネルギーの問題である。

さて、この物語ではこのように主人公の知恵が、戦い、すなわち内面の葛藤に克つ重要な役割を果たしたが、知恵を生かして戦わないで癒され、人格発達を遂げる場合もある。次節ではこのような昔話を考えてみる。

六　『躄（いざり）長者』における「人格発達」と「癒し」

この節では、特に「エネルギー」の質について、超越的なものにゆだねて「人格発達」と「癒し」を得る例をとりあげる。この場合も、「場所」に着目すると、「退行」と「再統合」との関わりが理解しやすくなる。

■『躄長者』の典型

『躄長者』は、基本的には、娘が、神仏のお告げによって、貧しく足の不自由な人のところに嫁にいったら、やがて金持ちになり亭主の足も癒ったという型として伝えられている。『日本昔話大成３』では、青森県八戸地方の例が典型として掲載されている（一六九-一七〇頁）。また、これに対して、島根県邑智郡の例は、鴻池の先祖の話として、足が不自由で貧しかったところに、下関の長者の娘が嫁に来た、という型になっている（一七〇頁）。また、新潟県見附市の例は、足が不自由なのは嫁の方で、その嫁入り道具によって金持ちになる（一七〇頁）。福島県双葉郡の例もこれと同様な型だが、足の不自由な嫁が鴻池の娘ということになっている（一七〇頁）。この中で、はじめのものをこの節では典型としてとりあげる。

『躄長者』（青森県八戸地方）

1　いい娘がいた。

2　娘が嫁にいきたいと神に祈ったところ、夢の中で、橋の下の躄のところに嫁にいくと金持ちになるとのお告げがある。

3　娘が町にいくと、橋の下に躄の男がいた。

4　男が断るところを娘は無理に嫁になる。

5　川に水を汲みにいくと酒樽が流れてきたので、ふたりで呑む。

6　男が湯にはいって髭をそるといい男ぶりになる。

7　男が持っていた行李には大金が入っていたので、酒屋を始め、家を建てる。

8　嫁の実家がある村の人たちが、躄の婿を珍しがって見に来るたびに酒を呑むので、店は繁盛し金持ちになる。

9　金持ちになると躄が癒る。

10　本当は男の実家は大富豪で、息子が嫁を貰い、店もうまくいっていることを聞きつけて、船に米や金を積んで、一層大規模な援助をする。

11　拾った酒樽からはいつまでも酒が湧いたというが、それは神から授かったものだった。

■『躄長者』の解釈

この物語には、結婚したという点で、「人格発達」のテーマが含まれ、不自由な足が治癒したという点で、「癒し」のテーマが含まれている。さらに、大富豪になったという大きな至福も示されている。さらに、始めと終りから、神の加護という考え方が流れていることが分かる。その背景には、橋の下、川などという、第一章、二の（3）で述べた「場所」が示される。また、この節でも第一章、一の（2）で述べた「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を手がかりに考えていく。

はじめに物語解釈の方法から考えれば、この物語には、典型で述べられるように、神の加護という概念が背後に流れている。神のいう通りにすれば、日常的には躊躇するような結婚をしてもうまくいくということである。では、神の加護や神のお告げというものは、どのように解すればよいのだろうか。

この典型例において、お告げが夢に現れたというのは、象徴的である。夢を見る時は睡眠中なので、退行していることはいうまでもない。退行とは、意識と無意識の境界があいまいになり、全体が混乱している状態であったが、このように混乱している時こそ、本来の問題が現れやすい。なぜなら、問題というものは、良きにつけ悪しきにつけ、心身の平衡状態を破るなんらかの緊張であり、退行して

ほとんどの緊張状態が解けた時こそ、最も強い緊張である当面の問題が現れるのだといえるからである。したがって夢は、当面の問題意識の現れだといえる。

このように考えると、夢はまた、これから実現することへの準備状態を示すものでもある。つまり、意識と無意識の全体にとって、最も緊張している事柄が現れているのだから、それは、いずれ近いうちに、具体的に分かる姿として現れてくると考えられるからである。しかし、夢に対しては夢の言語の翻訳とでもいうような独特の解釈をしなければならない。例えば、Aさんと結婚した夢を見た場合、夢を見た人がAさんに対してどのような印象をもっているかを確認した上で、その印象に相当する人格的特徴が、夢を見た人に備わる、と解釈する。この解釈の行く末として、現実のAさんとの結婚に結びつく場合もあるが、Aさん抜きに実現する場合もありうる。

また、夢を見ることが退行の一形態である以上、夢を吉兆とするためには、つまり、夢という象徴的な知らせを生存にとって優位なものとして実現するためには、エネルギーを充実させる必要がある。もちろん、これまで述べてきたように、それは、量と質の双方から考えなければならない。

この物語の場合、神に祈るという行為から始まっているので、無意識的ではあるにしても全体的な構成としては、良い結婚の実現を目指して準備が進行しているはずである。つまり、エネルギーの質的充実を神への祈りとして獲得していたといえる。

そこで示されたのが、このお告げである。お告げの内容は、ハンディのある結婚ではあったが、娘はそれにすなおに従って行動する。その結果、ことごとくうまくいくことになるが、実は、神の庇護があったのだということが、酒樽のエピソードで分かる。これは、娘の側から言えば、神という超越的なものを利用して、エネルギーの質を高め、癒しと至福を得たということになる。

次に、「退行」「再統合」とを、「場所」と関係づけながら考えてみる。

はじめに娘がいたのは「田舎」のようだが、足の不自由な男がいるのは「町」である。田舎と町の対比は、物語の場合には、より意識的な発展を意味する。したがって、娘が町に出かけるのは、基本的には意識的な発展に向かって進んでいることを意味する。

ところが、男のいる場所は「橋の下」である。これは、退行している場所である。退行している場面では、幼児化して、未発達なわけであり、男の身体が不自由であっても、今後の発達可能性を秘めているといえる。また、「場所」の象徴的な意味としては「橋」は過渡的な状態を表す。その意味でも、男の将来に向かった可能性が秘められているといえる。このような象徴理解は、物語の背後に潜在的に流れていることではあるが、娘が神のお告げを信じきって強引に結婚する姿に、語り手も聞き手も、むしろ今後の発展を期待できるのは、このような象徴理解が潜在的に行なわれているからだといえる。

重要なのはその次である。川を流れてくる酒樽は、あとから、神からの授かりものという説明がさ

れるのであるから、神秘的な役割を果たす。その酒でふたりは三三九度をするのであるが、この儀式は、通過儀礼、すなわちイニシエーションと呼ばれるものである。人は成長する時の節目節目に儀式を行なう。それまで少しずつ変化しながら成長してきたものが、儀式を行なうことで一段階上のレベルに達したことを確定するわけである。このような儀式を通過儀礼、もしくはイニシエーションと呼ぶ。退行と再統合という、この本で用いる目安からいえば、通過儀礼は、再統合のための儀式だともいえる。そして、この、結婚を意味する儀式はもちろん物語解釈の常識からは、「人格発達」を遂げたという意味を持つ。ところで「場所」の意味からいえば、「川」は無意識的な場所であり、流れてくるものは、神秘的な意味合い、つまり、エネルギーの質の充実という意味が含まれる。この場合は酒なので、エネルギーの量をも満たすことになる。「人格発達」も遂げていることだし、これだけ条件が揃えば、いずれは男の不自由な足が癒されることは予測できるが、この物語ではここまでのところはまだ、「いい男ぶり」でとどめている。物語の興味と進行上、もっと大きな至福を準備しているからだといえる。

男は実は金持ちだったのである。これは、各地に伝えられている昔話を比較しても、足の不自由な側が本当は金持ちだったということになっている。「本当は金持ち」というのは、すでに「人格発達」を遂げているということとともに、潜在的な可能性を意味するが、それは無意識の持つエネルギーの

大きさを意味する。もう少し踏み込んで言えば、目先の姿ではなく、表面からは見えにくい真のすばらしさを意味している。

そのすばらしさが、「場所」の意味からいえば、町という発展的で意識的な場所での、酒屋の開店と家の新築という、社会人として一人前になることに現れる。そして、それまではただのハンディだと思っていた不自由な足が、商売繁盛のための武器に転じるのである。足の不自由な婿を見に来る、などというのは、人権侵害もはなはだしいのであるが、昔話という架空の話だということを前提に語られる場合に、それがややゆるやかに感じられるのは、実は、具体的なそのことを指しているというより、そのことによって象徴されている内容、つまり、この本で分析しているような内容について理解しているのだという暗黙の了解があるからだと思われる。ハンディを武器にするというのは、前節の『手斧息子』でも述べたように、重要な癒しの方法だし、われわれすべてが抱える何らかのハンディを乗り越える方法でもある。

さて、ここで金持ちになると同時に、足が癒る。語り手はここでエネルギーが充実したことを告げたいのである。そして、普通ならここで物語はおわるはずだが、この典型例の場合には、もっと大きな至福をつけ加える。最後の言葉が手がかりになるように、それには理由がある。これまでのことはすべて神の加護によるものだったというのである。つまり、この分析のはじめに述べたように、神の

お告げの意味をわきまえて、神にすなおに従ったことが、すべてをうまく導いたのだということである。

このような意味で、エネルギーの質の充実を神のお告げのような超越的なものにゆだねるというのが、この物語の重要な要素になるといえる。次は、それによって得られた癒しを手がかりにして、この昔話から得られる「人格発達」と「癒し」のヒントを考えてみる。

■『躄長者』と「人格発達」および「癒し」

くりかえし述べるように、このような物語に記される状態は、そのまま現実的な事柄に重ねて理解するわけにはいかない。この物語で身体症状として記されるアンバランスは、誰かの問題ではなく、語り手や聞き手自身の、ごく普通にもっている心身のアンバランスな状態を意味している。それだからこそ、長く語り伝えられてきたのである。そのような前提で、この物語から得られる「人格発達」と「癒し」のヒントを考えてみる。

すでに明らかなように、この物語は、神の加護に対する全面的な依存という大きな特徴がある。それは、夢という退行した場面で示された。もちろん先にも述べたように、われわれの日常においては、夢で示されたことそのものがそのまま実現するわけではない。この物語は、その意味で、夢の言語を

翻訳して語っていると理解すればよいと思われる。

解釈でも述べたように、夢は、意識と無意識の全体の問題や準備状態を暗示している。したがって、夢に示される事柄のよりよい解決や実現を目指せば、「人格発達」や「癒し」に至るということになる。その場合、「よりよい」方向はどのように求めればよいのであろうか。この娘が行なったことを振り返れば、彼女は祈ったのだった。「よい結婚ができますように」というのがその祈りの言葉である。その結果が神のお告げになったのである。では、祈りとはなんだろうか。

祈りの言葉とは、意識と無意識の全体の方向づけを意味する。この言葉のように、それは抽象的な表現でしかない。祈りの言葉とは常に抽象的な性格を持つものである。仮に「Xさんと結婚できますように」と、少し具体化したとしても、それがどのように叶うかについては不明である。究極まで言葉にすることはできない。しかし、言葉がある方向を指し示すことはできる。つまり、その方向に向かって、意識と無意識の全体の構成を整えることはできる。退行して、全体の状態が緩和しているときこそ、そこに良い指示を与えれば、実現が近づく。この娘の場合、祈り続けて、よい方向への準備が整ったところで、眠りというエネルギーを満たす退行をし、より具体的な指示を得たと解することができる。

親鸞は、「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに」（金子校注『歎

異抄』四一頁）と述べられるように、念仏を唱えればどんな人でも浄土にいけると説いた。その念仏とは「南無阿弥陀仏」というものであった。つまり、われわれを浄土へと救ってくれる阿弥陀仏の名を、「南無」と心をこめて口にすればよい。音声を発するという退行の状況で、救い主の名を呼び続ければ、その救い主が救ってくれようとしている境遇、それはまた救い主自身が居る境遇でもあるが、に到達できるというのが、親鸞の考えである。この場合、浄土に行くといっても、浄土系仏教の現世的性格を考慮すれば、死と同義ではなく、精神的な安定をこそ重視しているわけであり、この念仏による祈りと、この昔話の娘の祈りとは、構造的によく似ているといえる。

ここで、われわれ自身のことを振り返らなければならない。われわれも祈るのである。神社仏閣をはじめとするさまざまな宗教的な場所を訪れてただ儀礼的に祈るというのではなく、本気で祈る瞬間を誰もが持ったことがあるだろう。努力した結果、最後の頼みとして祈る場合、努力も届かない遠い人の幸せを祈る場合、その他さまざまに場面で祈るが、多くの場合祈りは最後の手段である。それまでさまざまに試みて、なおかつ叶えられない場合に、真剣に祈る。祈る目的がなんであれ、結局は癒しを求めて祈るのである。祈るのは、意識的な努力ばかりでは最後の統合に至らないことを知っているからである。

その祈りに対して、神仏、すなわち超越的な威力が応えてくれるためには、どのようにすればよい

のだろうか。この物語は、次のように教えてくれている。

まずなによりも真剣に祈ることである。問題が本当に見えるためには、意識と無意識の全体を本当に整えなければならないのである。それは、意識過剰になれというわけではない。夢という退行が最後の解答を与えてくれたように、ほどよい退行を導くことができるよう、問題にゆったりと焦点を合わせるつもりで祈ることである。

さらに、現れてきた問題の表面的な姿に囚われず、問題が本当に意味していることを知ろうとすることである。このときも意識過剰にならないことが必要だと思われる。意識的な解釈をし始めると、結局は自分の歪んだ内面を投影して問題の本質を見失うからである。祈って現れてきた問題なら、意識と無意識の全体を象徴している事柄のはずである。意識と無意識の全体とは、本来、生きているものだから、問題は問題なりに、生存にとって有利な方向に転換できるはずである。それはどのようにすればよいのか、と考えることも必要である。

ここに至れば、先に『瘤取り』について考えた「自然に」ふるまうということとの共通点が指摘される。『瘤取り』の考察では、「自然に」ということを、ただ単に自分の思うままに、とか、自分にとって心地よいからなどという理解で行なってはならない、と述べた。そして、自分のわがままではなく、客観的な事柄もしくは普遍的な事柄との合致を考えることを指摘した。

そこでも述べたが、退行しているときこそ、真の生存原理が必要である。一般に、退行している時には、何が本当に自分にとって必要なのかが分からない。健康な退行なのか、危険な退行なのか、退行している時には自分では分からない。特に危険な退行をしている時に、生存原理のことなどを指摘されると、反発し、恐怖心さえ感じる。その時こそ本当に必要なのは、真の生存原理である。つまり、その時こそ「祈り」が必要だということになる。それは、自分で自分のために祈るだけではなく、愛する人のために真剣に祈り、生存原理を伝えることが必要だと思われる。

もちろん、その問題がなんらかのハンディに結びつく場合には、先の『手斧息子』の場合と同様に、ハンディに負けないという意気込みが必要だろうし、具体的に生き抜くための工夫を繰り返さなければならないし、ハンディをこそ武器にしなければならない。それら現実的な努力があったうえで、その底に、真摯な祈りを必要とするのである。

こうして、『躄長者』は、祈りによって裏付けられた知恵を通してハンディを乗り越えて人格発達し癒される仕方を教えてくれる物語だといえる。

七　『田螺息子（たにし）』における「人格発達」と「癒し」

この節では、前節に続いて、神仏、すなわち超越的なものにあやかった「人格発達」と「癒し」についての例をとりあげる。昔話は『田螺息子』である。田螺が、人間になって結婚したという話であるから、「人格発達」は察しがつくとしても、「癒し」とはいえないのではないか、ということも考えられるが、後に述べるように、息子が田螺の姿だというのは、いわば、期待外れの子どもの姿だといえる。しかし、期待しているのは親や周囲であって、彼らから見て田螺にすぎないとなれば、これは心身を病んだ子どもの姿でもある。そして、そのような子どもは子どもなりに、人格発達し、自らを癒そうとするが、それにはやはり、「退行」「再統合」とそれを遂行する「エネルギー」を考えなければならない。そして、この物語では、これまでと同様にそれらが周到に、「場所」に対応させられて述べられている。以上の視点から、この物語を考えてみる。

■『田螺息子』の典型

『日本昔話大成３』（八-二四頁）において『田螺息子』として分類されている物語は、奄美大島から東北地方まで、幅広く分布している。それだけに、内容的に異なるものもあるが、全体に共通する型、もしくは、本来完全な型だったらこのようなものではないか、という型は、意外に普遍的に伝承されているように思われる。そのひとつの代表を以下に記すが、普遍的な典型として必要なエピソードは、

(1)神仏に祈って子どもを授かる。(2)田螺（蛙など）が生まれる。(3)計略を用いて娘と結婚する。(4)田螺は一度死んで、りっぱな男になって生まれかわる、などである。これらに着目しながら、具体的な物語について考える。

『田螺息子』（岩手県和賀郡）

1　子どものいない老夫婦があった。

2　水神さまにお願いして、ようやく田螺を授かった。

3　田螺はお椀に入れて神棚にあげていたが、なかなか大きくならなかった。

4　ある祭りの日、おじいさんが町に出かけようとすると、田螺は初めて大声を出して、自分も連れて行けという。

5　おじいさんが、田螺を連れて町の長者の家に行くと、長者の一家は、神様の授かりものの田螺を大切に扱って、泊まっていくようにと勧めた。

6　田螺はおじいさんに、長者の娘を自分の嫁に貰って帰るからと、お米を小さな一袋にあずかった。

7　田螺は長者に、大切な米だからと神棚にあげてもらい、自分はゆっくり布団で休むが、夜中に

神棚に上り、米をひとつかみ取り、噛んで、眠っている娘の口許にぬりつける。

8　翌朝田螺は娘が米を盗んだと騒ぎたて、娘を嫁に貰って帰る。

9　次の祭りの日、田螺は嫁の髪に留まって宮参りに出かけるが、烏（からす）がつついて地面に転がり落ち、姿が見えなくなってしまう。

10　悲しんでいる嫁のかたわらに、立派な若者が立っている。それはあの田螺の変身した姿であった。

11　ふたりは改めて盛大な結婚式をあげた。

■『田螺息子』の解釈

この物語が、「癒し」をテーマにしているということについては、賛否両論があるかもしれない。たしかに、これまでの昔話のようには、明瞭な障害は無いし、癒されるという事態も無い。しかし、最後に、田螺だったものが、立派な男になったというのは、ひとつの癒しととることができる。何度も述べてきたように、昔話は、個人もしくは複数の語り手の共同主観的な象徴である。つまり、昔話の全体が一つの心理の中で展開しているといえる。となれば、当初に田螺だったというのは、語り手の内面の一要素が、人間にはなり得ない未熟な弱さを持っていることになる。それが、最後に立派な男

になるのであるから、この弱さが克服され、発達を遂げ、心が癒されたことになる。この物語について、とりあえずこのように捉えた上で、その癒しが得られたのはなぜなのかを、「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を参考にしながら考えてみる。

まず、全体の見通しを立てるために最後の箇所を確認すれば、そこでは「田螺の死」と「男への変身」という、「死と再生」のテーマが現れている。この「死と再生」のテーマは、昔話やメルヘン、神話などにはしばしば現れるテーマであるが、ここで、その心理学的意味を述べておく。

「死と再生」とは、いわば劇的な人格発達を意味するといえる。ひとことでいえば、何かが終ったのが死であり、新たな何かが生まれたのが再生である。絵画や夢やサンドプレイ（箱庭療法）の分析では、枯れ木や骸骨や死体などは何かが終ったことの象徴だととるし、赤ん坊や木の芽などは新たなにかの象徴ととる。そして、この「死」と「再生」とは、本来セットになって連続して現れるものである。その場合、「死」の段階でこれまで述べたような、質と量との双方の意味において捉えられるエネルギーが十分に満ち足りていれば、高いレベルの「再生」が得られるし、そうでなければ、十分な再生は望めないことになる。この高いレベルの再生こそが、人格発達であり成長である。このように考えれば、この物語の田螺の死と男への変身は、まさに「死と再生」を行なって、劇的に人格発達を遂げたことになる。

そして、この物語は、そのような劇的な人格発達につきもののエネルギーの獲得が、神の神秘性に支えられて、幾分荒唐無稽ながら着実に展開している。それも場所との関係を巧みに利用しながら展開していくのである。ここでの分析は、その神との関わりに着目して、ストーリーをたどってみる。

はじめに、神様に田螺を授かる。ここでまず、物理的空間とは異なるとはいえ、神の威力のもとという場所の意味のもとで物事が進展することが示される。神の力によるわけだから、エネルギーの浪費は少ないのだが、エネルギーとは本来、自分で手に入れて自分で使うというのが昔話での原則であるから、ここでは、子どもが田螺の段階にとどまってしまうのである。

では、それはどのように人格発達し、癒されたのであろうか。この物語は、前提として田螺の人格発達をモチーフにしているのだから、当初なぜ田螺だったのかという問いかけは無駄だとしても、人格発達の節目節目で起こったことを再検討してみる必要はある。

はじめの節目は、誕生である。老夫婦が神に祈ったというのだから、子どもを産むにはエネルギー的に無理があることを暗示している。無理だから神に祈らなければならなかったのである。祈りに対して、神は子どもを授けてくれるが、神は絶対的な原理であるから、老夫婦のエネルギー不足に見合った子どもとして田螺を授けてくれるのである。田螺は鹿児島県大島郡の例や、大分県速見郡の例（一一頁）のように、蛙という場合もある。無意識と意識とを繋ぐ象徴という意味では、どちらでもふさ

わしいといえるが、田螺のような巻き貝が子宮をも象徴するとなれば、未熟な子どもが子宮で示される方がよりふさわしいといえる。

ものごとの始まり、特に子供の誕生を神に委ねるのは、ものごとのけじめ、すなわちロゴス、つまりものごとのあり方の原理原則をわきまえていると言える。このような場合には一般に、混乱の解決は知恵や超越的な力に求めることになる。この物語は、まさにこのような展開の連続だといえる。

次の節目は、町のお祭りに連れていけとはじめて口を利くところである。これにはエネルギーの点で伏線がある。田螺はなかなか大きくならない。それは、エネルギーが不足しているからだと考えることができる。ただし、この場面では田螺を神棚に上げている。神の申し子でもあるし、神の許でいつも祈りの対象になっているのだから、潜在的には発達しているはずである。つまり、それまで神棚に祭られていたというのがエネルギーの点での伏線である。神は原理原則を意味するので、エネルギーの質的側面を意味する。もともと神からさずかった田螺が、その神のすぐそばにいることは、気持ちの上で安心できる。これは、エネルギーをじっと蓄えていることにもなる。したがって、神の申し子でもある田螺が、神の許でいつも祈りの対象になっているのだから、潜在的には発達しているはずだといえるのである。

以上の点に関しては、場所の意味という視点から整理し直すことができる。上記のように、神棚が

神のエネルギーが満ちた場所であることはいうまでもない。そして、お祭りとは、その期間だけ神の威力の及ぶ範囲が広がるのである。お祭りには、神を乗せた神輿が町中を練り歩き、町の境界にはしめ縄が張られ、その範囲は、平常と異なる特別の場所と化すのである。お祭りにつれていけ、と田螺が初めて口を利くことができるのは、この迎える場所のエネルギーがあるからにほかならない。

このように考えれば、田螺の発達が形になって現れるのは祭りの日ということになる。先に述べたように、祭りというのは、神の威力が町中に広がり、エネルギーの高まりを見せる機会である。当初田螺が口を利くのが祭りの日であるが、最後の変身による成長をみせるのも祭りの日である。このことは、まさに、祭りが場所の意味としてエネルギーの高まりを意味することと相関している。

田螺は、おじいさんに連れられて町にいくことになる。場所の意味からいえば、田舎から町へという移動は、無意識的に眠っていたものが目覚めることを意味する。したがってここでは、成長可能性の兆しやきっかけが現れた場面だということになる。多くの場合、ここでは、新たな要素が生まれるが、この物語では、「異性との出会い」という分かりやすいパターンを示すことになる。

そして、さらなる重要な節目は、この田螺がトリックを用いて、長者の娘を嫁にもらう箇所である。この箇所の狡猾さには賛否両論がある。賛成の側は、「情熱と真剣さ」を評価するのかもしれない。また、反対の側は、トリックというずるい知恵を用いたことを批判するはずである。この反対の側の指

摘があるというところが、この田螺がまだ田螺の姿から変身できないという未熟な結果になることに繋がる。ところで、このように未熟な幼さを指摘されるとしても、ともかく結婚できるのはなぜかといえば、やはり、神の加護があるからだといえよう。この田螺は、長老の家でも神棚に祭られる。場所の意味を顧みれば、神棚は、田螺にとってエネルギーが満ちる場所である。田螺は小さくて未熟なのかもしれないが、神の許で、エネルギーを得たからこそ、ともかくも、結婚という統合に至ることができたと考えられる。

しかし、その結婚は未発達なものである。田螺は田螺の姿を抜け出すことができない。そこで再び祭りの日になる。最後の重要な節目は、この祭りの日に起こるのである。二人で祭りに出かけると、田螺は烏につつき落とされてしまう。これは、象徴的な死と再生のうち、死に当たる場面である。すなわち、それまでの幼さの死である。このようなときにはエネルギーの消耗は激しいのであるが、すでに、場所の意味としては、祭りという神の威力が満ちている場所であるから、田螺は見事に生まれ変わるのである。

田螺は立派な若者に生まれ変わり本当に結婚することになる。まさに、象徴的意味での再生であり、真の統合である。

■『田螺息子』と「人格発達」および「癒し」

このように考えてくると、この物語には、神の威力が連続して与えられていることに気づく。それを人間の側からいえば、この物語では、われわれは神の威力に頼って自分を変え、癒され、人格発達し、成長し、真の大人になったということになる。ここではこのことを、「人格発達」と「癒し」という点からもう少し深く考えてみる。

何度も確認してきたように、昔話は、個人もしくは共同主観的な意識の内部における心の動きがそのまま物語になったと考えればよい。ということであれば、生まれた子どもを田螺として表現するというのは、なにか心の中に満たされないもの、つまり癒されなければならないものがあることになる。結果的にそれが成長し、堂々たる大人に変身し、人格の完成を意味する結婚に至ったというのであるから、これは「人格発達」と「癒し」のテーマを含むといえるし、換言すれば、人格発達による癒しのテーマだといえる。

では、このような人格発達や癒しが神の威力によるというのは、どのように解すればよいのであろうか。それには、神をどのように理解するかということが鍵になる。そして、それを考えるために、田螺自身にとって神はどのように現れたのか、もしくは田螺にとって神はどのような場所として現れたのかという視点を生かしてみればよい。

はじめには、田螺にとって神は産みの親である。したがって、神棚にいるときには、親にはぐくまれているのと同じ意味で安らかに発達し成長する。ここでは、なんらかのエネルギーが与えられているはずである。

さらに、町に出かけることになるが、それが祭りの日というのが重要な点である。

この日は神の威力が広がるからである。つまり田螺は引き続き神のエネルギーの許で行動することになる。

トリックを用いて嫁を得る過程でも、神棚にあげられていることが前提であるから、やはり神のエネルギーを得ているはずである。

そしていよいよ烏につつき落とされるのは、やはり祭りの日である。また、烏は、象徴的な意味において神の使いという役を果たしているともいえる。

このように、随所に神のエネルギーが関わっているといえるが、具体的に、エネルギーの量が増したという表現は無い。ということは、なんらかの質的な要因が関わっていることになるが、それはどのように理解すればよいのであろうか。

神とは絶対的なものである。したがって、森羅万象のすべてであり、田螺自身も神のひとつの契機を構成しているといえる。子どもは神からの授かりものと、われわれがいつも素朴に思い、この物語

でもそのように開始するのが、このことを意味している。

ところで、一般的には、人格発達し成長するに従って意識的な自我が目覚め、そのことで、神という全体的で絶対的な存在と自分自身との関係を忘れていく。人は自己中心的になり、大いなる全体との関係から切り離されて、自分の意識や意識的判断を過信して結局は不幸になっていく。

十九世紀のドイツの哲学者、ヘーゲルは、このような意味で「不幸な意識（das unglückliche Bewußtsein）」という概念を立てた。すなわち、意識は自分自身の内において、あたかもスケプシス（懐疑）主義者のように懐疑的な対立的分裂を持っている。つまりこの「二重の、単に矛盾するに過ぎない存在である意識が、不幸な意識である」とされるのである（G. W. F. Hegel Werke 3 *Phänomenologie des Geistes*, S. 163）。

しかし、彼はそのままにしておかなかったのである。彼は理性、すなわち、論理的に考え判断する能力を強く信じていたので、この不幸を理性的に乗り越えてこそ、真の学問であり、真の生き方であるとした。もちろん周知のように、ヘーゲルの場合はこの表現どおりに単なる心構えのように捉えてはならず、あくまで世界観そのものとの一体的自覚が必要である。彼の場合、理性とは、「個別的な意識がそれ自体としては（an sich）絶対的な存在であるという考えを把捉して、意識が自分自身に還帰する」（ibid., S. 178）といった事態を、すなわち、不幸な意識の段階から見れば、あたかも彼岸で

でもあるかのような、対立がすべて溶け込んでしまう絶対的な境位を指す。つまり、理性的に乗り越えるというのは、簡単にいえば、全体の中で個々の事柄がどのように位置づけられているのかを論理的に構成しつくすことを意味する。ヘーゲルは、学問的な理性をもってかつての宗教の持つ絶対的な威力に置き換えたと自負し、現代に続く理性主義の一端を担ったといえるが、現代から逆に神の威力などという問題を考えるとするなら、現代の論理的理性や、そこから派生した、物質によって宇宙すべてが成り立っているという考え方を、神によってすべてが成り立っていると置き換えて考えてみればより分かりやすくなる。

つまり、今われわれが、社会や自然が網の目のように関係し合っていると思っているその仕組みの全体こそが、この物語での神に相当すると考えられる。

したがって、この物語では、まずはこのような仕組みの全体に自分を委ねた場において、癒しが進行したということになる。実際に行動する時は、例えば、田螺がトリックを使って嫁を獲得するように、一見自己中心的な行動に見えることでも、神の絶対的な仕組みに自分自身を委ねているという実感で行なうことが、正しい直観を与えることになるのである。田螺のこのトリックが成功するのはそのような理由によるといえる。そして最後に、烏によって最終的な成長が得られるように、絶対的なものに委ねる気持ちさえあれば、超越的な威力によって真の癒しが得られるのである。

このことを別の側面からいえば、この物語では絶対的なものに関わる際のエネルギーの用い方についても示唆されている。この物語では、田螺は本当に必要な時しか動かない。あとは、神の許でじっとしているのである。本当に必要な時とは、食事などエネルギーを補給する時と、変化し人格発達し成長すべき時である。このことも、人格発達と癒しのための重要な手掛かりである。神の許でじっとしていることは、単にじっとしていることとは違う。先に『瘤取り』で、瘤を取ってもらうことになる爺が木のうろで無心に眠りこんだことがエネルギーの保持につながったと述べたが、それがもし、危険な場所で眠りこんでは大変である。神の許でじっとしているというのは、それが最も安全な場所で行なわれたということを意味している。

本当に安全な場所でじっとして、癒しのためのエネルギーを蓄えること、これは、われわれの日ごろの行動においても考えるべきことである。自覚するにせよ、自覚しないにせよ、われわれは、なにか癒されたいことがあればすぐに行動をおこしたがる。時として、人格発達に逆行し、ただ単に新しいものを求めてさまよって、結局は社会性を失い、生存に不利な状況に身を置きがちである。若い女性たちの中には、新奇なものを求めてさまよえないという理由だけで主婦になることを恥でもあるかのように考えている人もいる。さらに進んで、社会から飛び出して、人と違った極端な活動に身を投じることが人間として優れているのだという考え方をする人もいる。個人の生き方としては、さまざ

まな生き方があっても良いのであろうが、社会の全体において大多数が選び取っていく安心できる場にいて、心をゆったり保つことが恥でもあるかのような意識を持っているとしたら、生存に不利だという意味において心理的には不幸であるといえる。社会的に不利なハングリーさが大きな仕事を成し遂げる、とよくいわれるが、それは本当の理由にはなっていない。社会的なハングリーさがあるにせよ、ないにせよ、社会全体の場所の構成のエネルギーを自分の生存のエネルギーにしていく能力の高いものが、大きな仕事を成し遂げるはずである。そのためには、根底的には社会全体の存在に対する絶対的な信頼感を持たなければならない。実は、社会から飛び出して人と違ったことをすることのみで自己満足を得ている人は、本当は、社会全体に対する信頼感に甘えているにすぎないのである。甘えがある以上、本来の成長エネルギーの方向性が歪められているし、結局は、成長とは反対の、非生存に向かうことになる。

このように考えれば、神という語によって象徴される絶対的な存在への信頼感は、第一章、一の（3）で述べた。エリクソンの発達段階モデルでいえば、最も幼い第一段階において得られるものでもあり、また、最終段階に到達すべきものでもある。それゆえに、人格発達や癒しの基礎を為す重要な要素だといえる。

八　「場所」の意味と人格発達

本章では物語解釈の方法の一端において「場所」に着目することで、物語全体の意味獲得を効果的に行ない、解釈をいっそう深め得ることを、論じてきた。特に、昔話という定型化の進んだ物語をとりあげ、また、「場所」の意味についても、特に、「意識」と「無意識」という対比的な意味構造と対応する場所構造に焦点を合わせて解釈すると有効であった。このような場所論の応用は、物語解釈において、しばしば効力を発揮する。したがってここで、本章の考察を振り返るためにも、「場所」の意味と人格発達の関係について述べておく。

物語全体における「場所」の本質的意味については、特に第一章二の（3）で西田幾多郎の場所論に言及しつつ述べた。全体としての場所、その、特殊例としての特定の場所の双方に、普遍としての場所と、そこに存在し、そこで行動する個との、相関的な「場所」のダイナミズムが有効に働いてきたことはすでに述べてきた通りである。その相関的な「場所」のダイナミズムの関係として、それぞれの物語のテーマが表現されることになる。

換言すれば、これまで述べられてきた例にみられるように、いずれも、それらの相関的なダイナミズムが展開する場所の変容構造を有効に利用して、聞き手の興味を導くというレトリックを持ち、ま

た、それゆえに、それぞれの場所によって象徴される意味を効果的に示唆し、テーマをあらわにするものであった。

本書で特にとりあげた意識-無意識構造に関していえば、意識的な場所と無意識的な場所との構造の中で、登場人物は、エネルギーの量と質とを使い分けて行動しつつ退行と再統合を行ない、そのエネルギーの量と質に応じた人格発達を遂げることが明らかになった。その意味において、心理学的な目安の有効性も確認できたということになる。

そして、さらにそれぞれの物語に応じて、生きるためのヒントともいうべきより詳細な意味も示されてきた。おのおののヒントの共通項を考えれば、結局のところ癒しとは人格発達を遂げることで得られるものだということである。

かくして、本章で用いてきた方法は、本章で限定した場面では有効だということが示されたが、それが、すべての物語で可能なのか、または、物語解釈を超えてすべての事柄に対して可能なのか、それらの考察をさまざまな例とともに行なうのが、今後の重要な課題だということはいうまでもない。

〔付記〕　本章では、多くの象徴解釈に関する資料を参考にし、筆者なりに組み立てた。煩瑣になるのでいちいち断らなかったが、ここで謝意をこめて列記しておく。

ハヴロック・エリス、藤島昌平訳『夢の世界』〈岩波文庫〉岩波書店、一九四一年。
C・G・ユング、林道義訳『元型論』紀伊國屋書店、一九八二年。
M・ポングラチュ／I・ザントナー、種村季弘他訳『夢占い事典』〈河出文庫〉河出書房新社、一九九四年。
ラッセル・グラント、豊田菜穂子訳『夢の事典』飛鳥新社、一九九二年。
トム・チェトウィンド、土田光義訳『夢事典』白揚社、一九八一年。
S・フロイト、高橋義孝訳『夢判断』上・下（新潮文庫）新潮社、一九六九年。
河合隼雄『ユング心理学入門』培風館、一九六七年。
河合隼雄『無意識の構造』中央公論社、一九七七年。
Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing co., 1974.（アト・ド・フリース／山下主一郎監訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店、一九八四年）
Erik H. Erikson *Identity and the Life Cycle* W. W. Norton co., 1959.（E・H・エリクソン／小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房、一九七三年）
C. G. Jung, C. G. Jung *Gesammelte Werke*, Sechster Band, Walter-Verlag, 1976.

第三章　夢解釈における「人格発達」と「癒し」

本章は、前章に引き続いて哲学と心理学との接点から比較論的に、夢を解釈し、人格発達と癒しを考察するが、それに加えて、夢解釈の方法を探究するという目的をも持つ。

ところで、この本の立場として特に重要な前提として「夢を見る」という生理的現象それ自体を、人格発達や癒しの契機として捉えるということがある。第一章で述べたように、われわれは意識と無意識との全体の構成によって成り立っている。ということは、夢を見るだけでも、意識と無意識の全体の構造が変化する。前章で述べたことを考慮すれば、特に夢を見る時は睡眠という退行状態にあるのだからエネルギーの、量もしくは質が豊かな状態で夢を見れば、人格発達に至るはずである。なぜならこれも第一章でエリクソンに関して触れたように、人は本来、常に発達し続けているからである。そして、エリクソンの発達図式の最終段階に典型的に示されるように、また、昔話について考察してきたように、人格発達を遂げることで、矛盾や苦しみを受容できるようになり、癒しを得ることになる。

このように、夢の果たす役割のひとつに、人格発達に貢献できる側面がある。夢に限らず、物語を

語ることや、本章の後半に夏目漱石の作品をとりあげるように、そのような芸術的創作活動を行なうことや、いな、われわれの日常的な行動すべてが、エリクソンの前提によれば人格発達に貢献できる側面を有するのである。そして、どの点が課題なのかは、テーマそのものにヒントがある。

大枠的にいえば、夢見ることや表現活動や行動のすべては、意識と無意識の全体のうちで、ある種のホメオスタシス（恒常性）の崩壊の状態を表現し、それによって意識と無意識の全体の構造を変化させるものだからである。それぞれの昔話に関して考察してきたように、物語のテーマはそもそもそのようなホメオスタシスの崩壊から展開するのであった。たしかにホメオスタシスの崩壊の状態それ自体は、心身の傷をもたらしたり、困難や悲哀が現れたりして、発達よりはむしろ逆の印象を与える。しかし、そこに、エネルギーの量や質を補うことで、物語は新たなホメオスタシスを得るし、多くの場合それは、物語のより高い次元への発達になる。その意味では、ホメオスタシスの崩壊の状態がテーマとして示されることで、問題が自覚され、エネルギーの量や質をどのように補えばよいのかを知り、遂行することができるのである。例えば、本章の後半は夏目漱石の小説『夢十夜』をとりあげるが、その内容はハッピーエンドではない。しかし、それを表現しないで無意識にしまいこんでおいては作者の生育史において得られた人格発達に対するさまざまな阻害要因を解決することはできない。以降述べていくように、特に、夢という表現形式をとれば、作者も読者も、悲しみは悲しみなりに退

行したレベルでの表現だとして社会生活では認められないような事柄も比較的素直に受容することができる。それだけでも、作者や読者の意識と無意識の構造が変化し、それがエネルギーの質の改善につながって人格発達を得、癒されるのである。そして、これは物語に限定される現象ではない。われわれの行動すべてに共通することである。

そのなかで特に夢は、後述するように、意識と無意識の境界付近に成立し、意識的な防衛によって隠蔽する可能性がほとんど無いので、より無意識の状態を反映しやすい表現だといえる。したがって、夢を見つめなおし、どのようにエネルギーを補うかと考え行動することで、自分の人格発達に貢献することになる。

このように、この本では夢を積極的に捉え、癒しの手がかりとする。

そして、本章では、第一章で触れたフッサールの現象学的還元を基底として夢解釈の方法を展開し、そこから具体例の考察へと至る。

具体例の考察は、夏目漱石の『夢十夜』のうち、テーマにおいて、とくに人格発達を意識して読むとわかりやすいものをとりあげた。もちろん、この作品は小説であり、たとえ夏目漱石自身が見た夢であったとしても、意識と無意識の全体によって織り成される創作活動の一環として夢そのものではないことには留意しなければならない。しかし反面、夢として表現し、夢の持つ意識と無意識の境界

における曖昧性を利用していることも事実である。また先に述べたように、夏目漱石自身が人格発達を遂げ、癒されるために、必然的にそのような表現態度をとったともいえるのである。

さて、本章の考察の軸については以下のように設定する。

先に述べた目的から、一貫して、夢解釈の概略を述べるが、この「夢解釈」という語については、鑪幹八郎『夢分析入門』で、「夢分析」と比較して、次のように述べられている。

まず、夢分析については、「「夢の分析」とは、夢の（顕在）内容をイメージ、要素、事物、文章といったものの集積と考え、客観的な水準においてとり扱おうとするものである。従って、この水準では、誰の目にもはっきりと具体的に、析出された資料を確かめることが可能である」（二七五頁）とされる。

他方、夢解釈については、「夢の意味づけ」とされ「「夢の分析」からの資料を統合し、分析者や夢主が夢のもつ意味を引き出す過程を指している」（同上）とされる。

そしてこの両者の比較において最大の違いは、前者が客観的な水準で取り扱われるのに対して、後者は主観的な水準ともいえる点にある。すなわち「いろいろの意味づけを可能にする。唯一の客観的、普遍妥当的な解釈は存在しない」（同上）とさえ述べられている。しかし、それでは夢の意味の具体的妥当性はないのか、ということになるが、結局は、夢という象徴性の高い対象を象徴的な言葉で意味

づける以上、数学のような妥当性はあり得ない。また、妥当性については、それぞれの夢解釈者が自らの解釈の方法を開陳することで、それぞれの方法を追体験することによって確認することができる。この点は、すべての科学的方法と一致する。本章は、そのような意味での、現象学的還元に端を発した夢解釈の方法を考察するものである。

ところで、このように、夢解釈、もしくは夢分析の方法は多岐にわたり、それらを比較検討するのは本章の範囲を越えるので、ここでは、それらを比較検討した結果、筆者が現実的な教育相談の場で用いている夢解釈の方法を述べつつ、その論拠を検討する。

なお、このような方法論についての論証は、具体例の検証によって論理性を高めなければならないが、本章の紙幅では不十分である。当面本章では、その点を割愛しつつ、夢解釈の一端を考察するにとどめる。

一　夢解釈の方法

第一章で述べたように、夢解釈においても現象学的還元を前提とし、構造を意識した考察が求められる。これは夢をはじめとする象徴的要因の強い事柄の解釈には特に重要なことだといえる。

さて、このような現象学的還元を前提として夢解釈に取りかかろうとする時、夢に現れた個々の事柄をすぐさま「A（事柄）はB（意味）である」というように固定的に捉えてはならないことは明らかである。かといってすべてが曖昧なままで放置しておくわけにもいかない。なんらかの、意味決定をしなければならないが、現象学的還元の意図を勘案すれば、意識現象の全体を全体とし、同時に、意識現象でさえ未知で無限な全体のひとつの結果でしかないという全体との関係の中で、個々の事柄を考慮していかなければならないのである。端的に、かつ現実的な作業を前提として言えば、その場合、ひとつの事柄がどのような構造的背景に位置づけられているのかが意味決定に参画する。このような、構造に対する配慮を背景として夢を解釈する場合、筆者は次の三つの側面から考察し、それらを統合しつつ解釈を遂行している。

第一の側面は、「夢を見ること」に付随する側面である。

第二の側面は、夢に示される象徴的意味を見いだす側面、すなわち夢の構造的解釈の側面である。

第三の側面は、それらすべてを統合する論理的整合性の側面、もしくは夢解釈の実践的側面である。

以下、考察するように、これらすべてに構造を配慮している。

（1）「夢を見ること」に付随する側面

a　現実や環境の反映

「夢を見ること」に付随する夢とは、夢を見ている以上必ず見ていると想像される夢のことである。すなわち、夢と現実という構造的差異に必ず伴う夢である。

その中で最も考えられるものが「現実や環境の反映」であり、直接夢に反映する。

さらにその中で最もありうるのが、「生理的理由」である。トイレに行きたいからトイレの夢を見る。漏らしてはいけないから何らかの障害のあるトイレでなかなか用をたすことができない夢を見る、といった夢は多くの人が経験する夢である。また、寝室の近くの騒音が刺激になって騒音に引き起こされ、連想した夢を見ることもある。

「特定の対象への個人的な思い」も、直接夢に現れ易い。好きなタレントが夢に現れるなどというのは、その典型である。

この様式が少し複雑になるのが、「特定の思想・宗教」が夢に現れる場合である。「特定の対象」の場合は、そのものが直接現れるが、「特定の思想・宗教」の場合は、考える様式が現れ、それらの思想や宗教に特有の象徴的表現になる場合が多い。

また、「不安・違和感」といった意識と無意識の全体を通しての構造の変化を意味する感情は、さまざまに姿を変えて夢に登場する。この場合、解釈の鍵になるのは感情である。違和感がある内容の場合でも、ほっとする、安心する、などの肯定的な感情を持つ場合には、その内容の象徴的意味がすでに自分に備わりつつある、つまり、次の段階への人格発達に至りつつあることを意味している。また、怖い、嫌いといった否定的な感情を持つ場合には、その意味は二分する。ひとつには、その内容において生存に不利な方向を指し示している場合である。未熟な女性が、まだ出会ってはならない異性の影に怯えて、見知らぬ男性に追われる夢を見るという例がこれに当たる。もうひとつには、その内容において、生存に有利な方向を意味していても、夢を見る本人の人格発達にとってまだ遠い存在である場合にも、否定的な感情を持つ。現実的にも、教師の正当かつ親切なアドバイスに、生徒が反発する例がこれに当たるし、夢に神を象徴するものが現れて、怖い印象を持ったなどというのがその例である。

このほかにも、民族特有の夢や、受験の不安が反映した夢など、夢を見るものの現実を知ればすぐに納得できる夢もある。

もちろん、夢は象徴的なものだけに、先に述べたように「AはBである」と単純に置き換えてはならない。この現実や環境の反映は、現実を知ればすぐに思い当たるものだけに、下記のさまざまな原

因との複合的対応を考慮しなければならない。

b　生理学的に眠ることに付随する夢

また、「生理学的に眠ることに付随する夢」もある。これは、生理学といういわば肉体的側面と、精神的側面などの他のさまざまな側面を構造的前提として考えた場合の、一側面に着目した場面での解釈である。

最も典型的なものは、「眠りの深まり」や「眠りからの覚醒」に関わる夢である。前者に関わる夢としては、穴に落ちたり、階段を落ちたり、絶壁で足を踏みはずしたりする。後者は、何か明るい所へ出ようとしたり、階段を上がったりする。これらは、実は毎晩夢見るまでもなく体験していることになる。

では、夢見ることに関わる、このような眠りの深まりや覚醒といった現象は、生理学的にはどのように考えられているのだろうか。この点はまだ研究中といった方がふさわしいレベルではあるが、ここでは、歴史的に進みつつあるその理論的概略を確認する。

妙木浩之「「夢分析」の現在」でも概説されているように、夢に対する生理学的な画期的成果は、一九五三年にシカゴ大学の大学院生E・アゼリンスキーと彼の教授N・クライトマンがＲＥＭ(Rapid Eye

Movement）を発見したことにあるとされる（妙木編『夢の分析』一四頁）。それ以来、おおまかにはこのＲＥＭ睡眠時に夢を見ているとされるようになった。

この研究の成果について、大原健士郎『夢の不思議がわかる本』では、眠りの深まりや覚醒に関して、次のように纏められている。

普通の眠りには徐々に深まっていく四つの段階があり、第一期は五分から十分で通過し、より深い第二期へと至る。やがて、第三期、第四期と深まるが、三十分もすればまた第一期の浅い睡眠に戻り、また第四期までを繰り返すとされるのである。そして、この第一期において、目が活発に活動するので、ＲＥＭ睡眠と名づけたのである。そして、この時期の睡眠中の九割が夢を見るとされる（一八六－一八八頁）。

大原健士郎「夢」では、ＲＥＭ睡眠について、「手指や顔面の筋肉がピクつき、身体全体が大きく動くこともある。しかし、姿勢を保つために働いている筋肉の緊張はなくなる」「いびきは止まり、ねごとは声の調子が情緒的になる」「一般に血圧は高くなり、かなり変動する。呼吸運動や心拍のリズムは乱れ、発汗の状況も変化する。尿の分泌は減少し、瞳孔も大きくなったり小さくなったりする」「陰茎が勃起してくる」「妊婦では胎動が活発になる」（大原編『現代のエスプリ　夢』一六頁）などと説明されている。

また、『夢の不思議がわかる本』では、ＲＥＭ睡眠とより深いＮＯＮ-ＲＥＭ睡眠の両者を次のように比較している（一八七-一八八頁）。

ＲＥＭ睡眠（別名、逆説睡眠もしくはパラ睡眠）。意識、筋肉がやや働く＝目がまぶたの裏で激しく動き、反射的反応の多くは停止し筋肉は弛緩する。←夢を見る（ＮＯＮ-ＲＥＭ睡眠のＲＥＭ睡眠直前直後が一番激しく筋肉が働く）。

ＮＲＥＭ（ＮＯＮ-ＲＥＭ）睡眠（別名、徐波睡眠もしくはオーソ睡眠）。意識、筋肉とも働かない。

このように、夢の深まりは生理学的観察によって裏付けられている。

ｃ　夢の象徴的現れにおける退行的表現

上記のように、夢の深まりは生理学的側面からも裏付けられるが、夢解釈においては、その深まりを、心理学的文化的側面から捉えることもできる。一例として、夢の解釈に有効に利用しているものは、そのテーマに着目して「夢の象徴的現れにおける退行的表現」という視点から捉えることである。

第一章一の（２）で述べたように退行とは、意識と無意識の境界が曖昧になり、一種の混乱状態だけにエネルギーの消耗が激しい状態を指す。このまま放置すれば生存にとって不利であったり危険になったりするが、しかし反面、無意識的な問題のある段階にまで退行するので、混乱の意味を適確に

捉えれば問題が明確になるし、エネルギーを補えば、前の段階より大きな再統合、すなわち人格発達を導くことができる。

夢の解釈に関して、筆者はそれを大きく二つに分けて理解している。

その第一は「歴史的遡行」である。時代劇仕立ての夢を見、過去の自分の夢や、古い風景の夢を見る場合がこれに当たる。この場合、その時代が古いほど、深い退行だと理解し、その段階にこそ、夢を見た本人がその時解決すべき問題がある、と捉える。

第二は「発生的遡行」である。これはおおむね系統的発生を遡ると解しておけば良い。筆者は、『心身症と箱庭療法』で、サンドプレイ（箱庭療法）の経験例から、映像的な退行レベルの循環モデルを提起した（一九-二一頁）。意識に近い段階からより深い退行へと列記すると以下のように示される。説明は本章に合わせて新たに作成した。

（1）ロゴス的世界：意識的に考察される、存在そのものや論理的構造、存在原理など。宗教的、哲学的象徴によって示される世界。

（2）人間社会：人間の一般的な生活を表現する世界。退行の中でも標準的段階。

（3）家畜・牧場・動物園：人間と動物たちが触れ合う世界。

（4）　動物界：動物たちだけの世界。人間の内面の動物性の状態。
（5）　爬虫類界：爬虫類たちの世界。動物がさらに抽象化された状態。
（6）　恐竜界：恐竜たちの世界。エネルギーの状態を露呈する世界。
（7）　植物界：植物によって表現される世界。無意識の深層の配置状態を表す世界。
（8）　鉱物・砂漠界：鉱物や砂そのものによって表現される世界。無意識の底の構成を表わす世界。
（9）　ロゴス的世界：(1)と同様、存在そのものや論理的構造、存在原理などを問題とするような宗教的、哲学的象徴によって示される世界ではあるが、無意識の最根底だけに、直観的、感覚的な現れ方をする。

もちろん、この図式を前提に考えるということであって、このまま進行するというわけではない。この発生的遡行の場合にも、その段階にこそ、夢を見た本人がその時解決すべき問題がある、と捉えるのである。さらにこの場合特に顕著なのは、ある段階での問題が解決すると、徐々に標準的な段階としての(2)の人間社会の表現へと接近するが、解決が不完全であれば、どこか途中の段階で表現し、時にはまた下降などしつつ、徐々に(2)と接近していく。

（2）　夢の構造的解釈の側面

すでに述べてきたように、夢もまた現実と同様、構造的な現れ方をしている。実際の解釈では、個々の象徴的な事柄の象徴的意味を解釈しなければならないが、それらの意味については、シンボル事典などを参考にすることになる。しかし、象徴的事柄は「ＡはＢという意味を持つ」とは単純に置き換えられないものである。さまざまな意味のうちどの意味なのかを判断する時に、全体の構造を考慮しなければならない。すなわち、全体の構造との関係においてはじめて、象徴的意味が決定されるのである。

以下、筆者の経験から、それら構造的解釈の幾つかを考察する。

a　テーマの反復

解釈は独断的であってはならない。したがって、ある事柄が一見明らかな意味を伴って現れても、それを鵜呑みにしてはならない。このような意味で解釈の手がかりになるのが「テーマは反復する」という事実である。

まず、方法を具体的に述べれば、夢全体のストーリーをテーマの固まりの連続として構造的に分解してみる。そうすると、一見異なる事柄でも、なにか共通のテーマで結ばれていることが見えてくる。

あるテーマがさまざまに姿を変えていることに気付く。

例えば、「はじめ自分が車の運転をしようとしている。その時急に、自分は免許を持っていないことに気付く。しかたがないので歩いていこうとするが、重要な試験を受けにいく途中だと気付き、あわてて駆け出すが全く進まない」などという夢は、無免許や試験によって繰り返し象徴される自己の能力に対する劣等感の現れだといえる。

なお、この場合、「駆け出すが進まない」というのは、劣等感の現れでもあるし、ＲＥＭ睡眠特有の、夢を見ていながらも筋肉は弛緩していることの現れでもある。

b　述語による理解

構造的解釈においては、事柄個々の直接的意味よりもそれらが相互にどのような関係にあるのかが、重要な鍵になる。したがって、第二章二でも述べたように事柄の主語的側面よりも述語的側面に着目しなければならない。

例えば一本の針葉樹が現れたとする。フロイト流の置き換えをすれば、それは男性的要因ということになる。もちろんそのことは解釈の鍵ではあるが、この夢の場合にはそれがどのような意味での男性的要因なのかということになれば、述語に、すなわち、その事柄がどのような姿をして、どのよう

な行動をとったのかに着目しなければならない。

このような述語によって、主語の意味が規定されていくが、これはまた、属性の普遍的意味に厳密に着目することをも意味している。象徴解釈的な意味において主語に無限の意味あると同様に、述語にも無限の意味がある。ひとつの形容詞が他の形容詞とどのように連関しているのか、ひとつの動詞が他の動詞とどのように関連しているのか。ひとつの主語をめぐるこのような構造的考察が複雑になればなるほど、ひとつひとつの語の普遍的な意味を広範に知っておくことが必要になる。

c　違和感（異和感）と構造的目安

構造的解釈をする場合には全体を常に見通すことが必須条件であることはいうまでもない。しかし、全体を見れば見るほど、なにがテーマかが分かりにくくなる。その場合の手がかりは自分の感性しかない。しかし反面、現象学的還元の立場からいえば、その感性に、対象を超越的、客観的だと思い込む主観的判断の誤謬の可能性が忍び込んでいるのである。これらをふまえても感性を手がかりにしなければならないのだから、なんらかの方法的手順が必要になる。構造的解釈そのものがその方法的手順であるが、構造的解釈にとりかかる瞬間に求められるのが、違和感である。

違和感とは、対象の全体と、自己の認識の全体との不一致である。ありえないことではあるが、仮

に自己の認識が完全であるとするならば、その違和感はそのまま対象のテーマになる。

では、自己の認識が不完全であるというごく一般的な場合にはどのように考えればよいのか。この場合、とりあえずは、その違和感をあらわにすることからはじまる。次に、その違和感の原因を、対象と自己認識との双方に展開させて追求する。

構造的に考える際、意識と無意識の全体のどこかに、不安定な要素があれば、違和感を感じるであろうことはすぐに思い当たる。その典型的なものが、コンプレックスや心の傷、すなわちトラウマである。コンプレックスやトラウマについては、それぞれ語を使用する研究者によって少しずつニュアンスが異なるが、共通して言えることは、意識と無意識の全体のどこかにシステムとして定着している、過去の体験および誕生と同時に組み込まれたなんらかの異常（おそらくはそのままであれば生存に不利な条件）を指す。この場合には、夢に現れた違和感をてがかりにしつつ、体験を遡り、連想法や催眠を併用して違和感の原因を探ることが行なわれている。

また、いかなる場合にも必要になるのは、それぞれの目標に応じた構造的な意味合いを持つ普遍的な目安である。

その中でも、最も重要でかつ有効な目安は、どんな人も、どんな年齢でも、必ず無限の人格発達を遂行しつつある、という前提である。重い精神障害の人も、脳死状態の人でさえも、この前提で捉え

るつもりになると、行動や状態の説明が容易になる。夢の解釈でも、この無限の人格発達のダイナミズムを前提にすると、うまく説明できることが多い。

そして、それゆえに、その人格発達をより詳細に知るために作られた幾つかの目安を背景にして、当初の違和感を説明すると、違和感の意味が明確になる。

例えば筆者は、人格発達であれば、第一章ですでに述べたように、エリクソンのライフ・タスクの諸段階の図式や昔話の英雄譚における発達図式を用いたり、また、交流分析（ＴＡ＝Transactional Analysis）のエゴグラムの基準(*)を用いたりする。これもなるべく複数の図式を用いる。

＊　交流分析（Transactional Analysis）とは、一九五〇年代にアメリカのエリック・バーン（Berne, Eric）によって創始された、本来は二人以上の人格の相互交流を通して、相互に人格発達を促進しようとする考え方と技法で、わが国には一九六〇年代後半に、主に杉田峰康によって導入された。筆者はその実践的な技法の成果を参考に、背景となる人格分析の基準を、さまざまな解釈に応用している。下の表は、筆者が用いる人格分析の基準であるが、新里里春・水野正憲・桂戴作・杉田峰康共著『交流分析とエゴグラム』や杉田峰康『交流分析の基礎知識ＴＡ用語１００』等を参考にしつつ、筆者なりに改変している。

この表を現実の個人に適用し、個人の人格を五つの要素に大別して、発達程度を確認するものである。それぞれの要素の各項目ごとに＋－のどちらに近いかを確認して〇を付け結び合わせて出来上がる表が、エゴグラムである。厳密な確認には問診表を用いるが、詳細は右の参考文献に委ねる。

一見して分かるように、すべての項目がバランスよく＋であることが目標である。

表　交流分析のエゴグラムの基準

	＋	－
批判的・批評的親性（CP）	原理原則をふまえた厳格さ	あら探し
養育的親性（NP）	保護、激励	過保護、過干渉
成人・大人性（A）	現実性、情報収集力、客観的判断、真の合理性	非現実的な合理性、説明のための説明
自由な子ども性（FC）	創造性、自発性、相手も愉快にできる	自己破壊、傍若無人、わがまま、快楽志向、他罰性
順応的子ども性（AC）	真の良い子、他人への理解と配慮	依存、甘え、消極的反抗、自罰性

このように、違和感にはその背景となる構造的目安、普遍的図式というものが前提になっている。夢解釈においても、その前提を確認しつつ、違和感の意味、すなわちテーマを求めていくことになる。

d　組み込み

夢の構造的解釈で、しばしば有効なのが、組み込みという構造である。組み込みとは、あるストーリーの流れや、連続する状況に、他のストーリーや状況が組み込まれる場合である。

例えば、先に述べた「退行的表現」の「歴史的遡行」と関連するものとして、現代の光景だったのが、突然時代劇になる、という組み込みが起こる。この場合は、まず、その時代劇部分のテーマが、深層における当面のテーマであり、したがって、今、そこになんらかの問題を感じているということになる。次に、そのテーマと、テーマの反復を意識しつつ、現代の光景の部分を考慮すれば、そこにテーマの反復が示されるはずである。こうして、組み込みの場合はテーマを見つけ易いことになる。

この組み込みは、映像的にも起こる。黒澤明監督・脚本、映画『夢』では、夢を見ている本人でもある主人公が、ゴッホの絵の中に入り込み、さまざまなゴッホの絵の中を、ゴッホその人を捜し歩く、というシーンがあったが、最後の「麦畑」の絵の中で、ゴッホの絵の極意を聞くのである。この極意がテーマだし、この夢で主人公が求めていた違和感の真の意味がこれだということはいうまでもない。

このように普通の風景から、風景の中の絵画に入っていく、という組み込みも見逃してはならない。いずれの場合においても重要なのは、この組み込まれている部分に、その時隠されているテーマの鍵があるということである。

e　右と左

夢の映像的構造の中で、右と左は重要な意味がある。一般的には、右は意識的な側面を意味し、左は無意識的側面を意味する。よく注意してみると、映画にせよ、夢にせよ、ストーリーの多くの場面では、画面の右半分で物語が遂行されている。その方が意識に訴えるからであるし、自ら右に意識的行為が反映されるのである。

同じ対象が現れても、意識と無意識とでは意味が異なる。例えば、海が左に現れれば、無意識の海を自然に捉えているということになり、右に現れれば無意識へと積極的に退行したいということを意味している。登場人物の右や左へと動く方向も同様である。左に動けば、無意識へとさらに退行することを意味し、右に動けば、意識的に変化したいことを意味している。

f　明るさと暗さ、具象と抽象

いずれも、前者、すなわち明るさや具象が意識的な側面を意味し、後者、すなわち暗さや抽象が無意識的な側面を意味する。また、後者が退行的側面を意味するのに対して、前者は統合的な側面を意味する。

g　典型的テーマ

以上のさまざまな構造的背景と、シンボル事典などで示される個々の事柄の象徴的意味がからんでテーマが形成されるが、そのテーマにおいてさえ、すでに普遍的構造の一角を構成するといってよい典型的なテーマが指摘されている。以下、そのうちのほんの幾つかを取り上げて考察する。もちろん、現象学的還元、もしくは現象学的判断中止を考慮しなければならないのだから、このような典型が現れたからすぐにその意味なのだと決めつけるのは危険である。あくまで、ひとつの構造的データとして、全体の構成の中に位置づけつつ、全体の解釈を遂行しなければならない。

テーマ①　死と再生の夢

枯れ木、骸骨、切り株、廃墟などのように死を連想させるような象徴的事柄の夢や、自分が殺される夢など、文字通り誰かが死ぬ、もしくは死ぬことが暗示させられるような夢は、「死の夢」と呼ぶこ

とができ、多くの場合、「再生の夢」と同時もしくは時間をおいて連動して現れる。再生の夢は、赤ん坊や妊娠、木の芽、双葉、さらには一度死んだものが甦るなどといった姿で現れる。これらをセットにして「死と再生の夢」と呼ぶ。

「死と再生」をひとことで言えば、人格発達ということである。

現象学的還元を意識して考察すれば、「死」とは、たとえどれだけ現実的な様子であったとしても、まず、最も直接的な意味としては、「無意識における何かが終わった」と取る。もちろん、先の考察における「現実の反映」という意味で、現実の誰かの死と対応する場合もある。そのレベルにおいてはそのように位置づけて解釈しなければならないが、その場合も根底には、「無意識における何かが終わった」ということがあると取っておく方がうまくいくようである。

同様に「再生」は、「無意識において新しいなにかが始まった」ということを意味している。そして、多くの場合、「死」とセットになって現れる。時期を置いた場合には、相互の連関は掴みにくいが、後述するように、夢解釈と現実とが対応しているかどうかを目安にして考えればよい。「死と再生」の夢を見れば、現実にもなにか人格発達やそれにともなう変化が起こるものである。

テーマ②　戦いの夢・曼荼羅（まんだら）の夢

夢になんらかの「戦い」が現れれば、それは欠如や対立的要因のために内面的な葛藤をしていることと理解する。意識・無意識を通じた全体は、欠如を満たし、対立的要因を統合すべき、本来の運動を行なっている。この運動を人格発達と呼んでもよい。人格発達の過程においては、数多くの欠如や対立を経験し、乗り越えていかなければならない。このような欠如や対立の統合過程が、「戦い」の夢として現れる。

第一章一の（4）の『桃太郎』では、鬼との戦いについてこの点に言及したが、同時に、エネルギーについても言及した。すなわち、戦いの夢が現れるような葛藤的な事態においては、エネルギーが充塡されれば、より高いレベルでの統合へと結びつくはずである。

そして、ある段階の統合は、「曼荼羅」の夢として現れる。東洋の文化において曼荼羅は、金剛界、胎蔵界の両界曼荼羅が代表的なものであるが、諸仏を幾何図像的に並べた両界曼荼羅に限らず、例えば桃太郎が最後に宝を得て凱旋してきたように、当面の欠如や対立的要因の統合によって安定的な状態を示す内容であれば、それを広義の「曼荼羅」として理解する。

このような曼荼羅の夢は、ひとつの安定的な状況を意味するが、他方、次のより高い人格発達をめざして崩壊する可能性をも含んでいる。

テーマ③　飛翔の夢・墜落の夢

「飛翔」の夢については、徳田良仁「典型的な夢の解説」（『自然読本　夢・眠り』四二―四八頁）では、「現実生活の厳しさから逃避しようとする欲望の現われ」「自然に課せられた限界を超越しようとする欲望」「冒険とか躍進に対する期待」などという未来型の説明と、性的な欲望などという意味が紹介されている。いずれにしろ、ある状況から、異次元的な状況へと変身することを意味している。

しかし、この場合も、他の諸条件と複合させて考えなければならない。左から右へと飛翔すれば、無意識的な状態から意識的な状態を目指すのであり、右から左へと飛翔すれば、その逆である。

また、エネルギーも解釈の鍵になる。激しい動きは、激しい変化を、緩やかな動きは、緩やかな変化を意味する。

現実に航空機に乗った体験の直接的な影響で飛翔の夢を見ることもあるし、眠りが浅くなる際に、上昇する夢を見ることもある。

これに対して、「墜落」の夢は、「典型的な夢の解説」では、現実的な体験の反映をのみ述べているが、おおむね上に述べた「飛翔」の夢の逆だと考えればよい。

テーマ④　追いかけられる夢

人格発達期に誰かに追いかけられる夢を見るものは、意外に多い。青年期に見る夢の種類の中でも最多に位置するとされるくらいである。そして、この夢はほとんどの場合、恐怖を伴うものである。

徳田良仁「典型的な夢の解説」では、隠れん坊などの幼児期の体験、性的興奮に伴う硬直体験、時間体験における不調和などの意味が述べられているが、構造的に捉えれば他にもいくつかの意味を考えることができる。

自覚的な意識と、無自覚的な無意識との構造を想定してみると、われわれにとって無意識的な事柄は常に、意識にとっては未知である。一方、人格発達とは、常に意識に対して無意識的な何かが現れて、意識と無意識の全体を通した大きな構造変化をもたらすことである。一般的に、変化はそれまでの恒常性の崩壊を意味するだけに、ある種の恐怖を伴う。そして、人格発達に伴う変化は、これまで考察してきたように、その時必要な人格発達の条件として現れる。その条件が例えば「戦い」のテーマとなる場合もある。しかし、人格発達、すなわち統合に必要な条件が、本人にとって未だ遠いものである場合には、それは単純に恐怖となって現れる。

例えば、女性の人格発達期に見られる追いかけられる夢で、姿のよく分からない男に追いかけられる夢を見た、というものがある。まず、注意すべきは、恐怖の程度である。恐怖心が強ければ、その追いかけるものによって象徴されている人格発達の条件は遠い。逆に、恐怖心があまりなければ、す

でに統合に近づいている、と理解する。次に、その男の年齢を確かめる。それが若い男性であれば、性的な欲望（これも人格発達の重要な条件であるが）の抑圧だということが考えられる。また、中年の男性であれば、父親の厳しいしつけである可能性を考える。厳しいしつけは成熟した社会人にとって必要な規則を教えるものではあるが、無限の人格発達という自由な運動に対しては枠をはめることでもある。この枠に対しては、本人としては未熟で不可解なだけに、追いかけられるような印象を持つ。

このように、追いかけられる夢には多様な側面と意味が想定されるが、いずれにしても人格発達と重要な関係があると思われる。

（3）　夢解釈の実践的側面

最後に、夢解釈の実践を考察しなければならないが、これまで述べてきたことのすべてが、実践の一端であることはいうまでもない。ここではそれらを意識しつつ、おおまかなまとめを行なう。

はじめに本章では、現象学的還元を前提にしているので、まずはその大前提として、

第一点　いかなる判断をもせず、事柄そのままにとらえることから出発する。

第二点　断定的な判断を避け、事柄を全体との区別において捉えるのではなく、いわば全体との連

続を維持する焦点として捉え、論理的理解、および構造的理解をする。

という二点を起点にする。

例えば、鑪幹八郎『夢分析入門』では、夢分析の手続きと称して、次の順序で夢分析を行なうように述べられている（三一七−三二九頁）。

［夢分析の手続き］

a　まず記録した夢を、そのままで何度も読んでみること。

b　次に、夢を少し焦点づけて扱う。

c　主題の発見と関係させて一晩にいくつもの夢をみたり、一週間にいくつもの夢をみたりしたら、それを一連のシリーズとして扱ってみる。

d　夢の中にみられる動作や行動、行為をとらえる。

e　夢の中にみられる情緒、情動の状態をとらえる。

f　夢の状況、事物および人物像を分析する。

g　そこで、最後にもう一度夢の分析と総合を行う。

h　夢の分析や解釈が面白くなったからといって、一つの夢にあまり時間をかけるのは生産的でな

い。

ここでのａは、第一点と対応する。そして、現象学的還元を前提としたすぐ次の段階がｂである。第二点でも述べているように、現れたものに対して超越的な判断を下すのではなく、全体との関係を保ちつつ、全体の焦点として緩やかに捉えるのである。

第三点は、夢を時間空間的な系列として、全体の流れに現れるテーマを捉え、そこからいま、ここでのテーマと結びつけるということである。このテーマの発見に、違和感が重要な手がかりになることはいうまでもない。

ｃは、テーマの発見について述べられているが、それはすなわち、今何が問題なのか、を考察することである。そしてここでもうひとつ述べられているのは、ひとつの夢として捉えるのではなく、複数の夢の系列として捉え、論理的理解をするということである。意識と無意識は本来連続している。人は一生を通じて大きなたったひとつの夢を見ているといっても過言ではない。その大きな流れの中にその都度のテーマが次々に現れるのである。

第四点は、主語に囚われるのではなく、述語による理解を軸にするということである。

ｄ、ｅ、ｆ、が、述語による理解とそれを基にした総合的な理解を意味することはいうまでもない。

とはいえ、具体的な解釈においては、主語の意味をシンボル事典で確認することからはじまるであろう。しかし、シンボル事典とは、なにかひとつでも例があればすべて掲載するという性質のものだけに、どれがふさわしい意味なのかを発見するのは困難である。その時その主語の述語に着目すれば、事典における主語のどの意味が妥当するかが限定されてくる。

第五点は、全体を見通しつつ、総合的理解を行なうということである。

gが、全体を見通す総合的理解を述べていることはいうまでもない。

第六点は、全体を見通す場合、本章では特に、構造的解釈、すなわち、テーマと構図に関する比較論的考察を重視するということを強調する。

これは例えば

・構図の普遍的意味と言葉で表現されるテーマとが共鳴しているか。

・この夢のテーマは典型的なテーマのうちどれに相当するのか。

・個人的なテーマと普遍的テーマとの絡み合い。

・退行における思想の現れ、つまり、退行時こそ真の考えや傾向性、性格が現われる。夢は退行時の典型だし、退行時のストーリーにも真の考え、傾向性、性格が示される。

などの点を意識しつつ考察を進めることとして述べてきた。

第七点は、夢を解釈するとは、クライエントの治癒や癒しを第一の目的とするということである。

hは実践上の心得であるが、夢を解釈しなければならない時とは、多くの場合、クライエントの切実な治癒や癒しを前提としている。治癒や癒しを通して、できるだけ早く立ち直らなければならない。また、解釈上も特定の夢の内部に固執するよりは、系列として捉えたり、現実との対応によって論証したりする方が早く正確にテーマを捉えることができるものである。まして、夢の解釈をなにもかもクライエントに伝えてはならない。クライエントの治癒や癒しに役立つと決断できない内容については決して伝えてはならない。筆者の経験では、例えばスポーツの相談や訓練に訪れた健康なクライエントで充分エネルギーがある場合でも、解釈できた内容の三割以下しか伝えることができない。

さて、このように、現象学的還元の立場を前提にして展開される夢解釈の方法であるが、このような方法論についての論証は、具体例の検証によって論理性を高めなければならない。また、多くの研究者が指摘するように、夢解釈は多様に展開される。本節では、その点を割愛しつつ、夢解釈の一端を考察するにとどめたが、以降、より詳細に夢解釈の方法を考察することをかねて、本節の方法を用いて、現実的な夢の解釈を遂行してみる。本節の方法で行なった解釈と、現実的な行為とが一致すれ

ば、その解釈は妥当性を得たということになるし、同時に、現実的な行為との対応が得にくい箇所についても、論理的に連なっている以上、妥当しているといえることになる。そうでなければ新たな構造的前提や新たな方法を編み出さなければならない。このような現実的な夢の解釈の遂行こそが今後の課題であるが、本書では少し視点を変えて、夏目漱石の『夢十夜』を「夢として」考察し、そこから得られる作者の癒しについて考察する。

二　夏目漱石『夢十夜』「第三夜」の夢解釈

本節と次節は、夏目漱石『夢十夜』「第三夜」および「第四夜」を夢として解釈し、作者夏目漱石の癒しを探ろうとする試みである。

もちろん、この作品は、本来、小説であり、夢そのものではないというのが正当である。まず、夏目漱石自身が小説として発表している。小説家として創作方法を苦悶し続けた漱石が、小説を執筆するのに小説としての虚構をしないはずがない。その虚構については笹淵友一『夏目漱石――「夢十夜」論ほか――』で、「漱石が第三夜において企てたのは、怪談の中からこの不快な不純物〔江戸末期から明治初年にかけての怪談物の持つ、官能に直接迫る恐怖感や不快感＝荒木注〕を除き去り、官能より

も想像に豊かな余地を残したものを創造することだった」（六三頁）と、具体的に述べられるくらい明確な意図さえ窺えるものである。また、仮に誰かの夢としても、すべて漱石自身の夢だと断定するのは、特に注意を要する。たしかに後述するように、漱石がこの作品のヒントを得た夢を見たという形跡もあるが、創作とは自己の体験をそのまま記述するものではないし、特に漱石は、例えば、『坊ちゃん』で、自分の友人と自分との体験をひとりの主人公に創りあげ、森田草平の「煤煙」事件を『三四郎』に援用するなど、しばしば他人の経験や、他人の手紙をみずからの小説の材料に用いているからである。

このような常識的な理由から、夢そのものではないという事実を重視する研究者は当然ながら数多い。

例えば、伊藤整・荒正人などがこの「第三夜」を夢と見立てて、キリスト教的原罪論やフロイト派精神分析の影響の強い分析を行なったのに対して、『夏目漱石――「夢十夜」論ほか――』では、「作品の構想分析を抜きにした観念の移入」だとしてこうした分析を退け、この「第三夜」の虚構を媒介したものは「近世末期から明治初期にかけての文学・演劇の一様式としての怪談噺」と述べられ、それは「文学様式からすれば怪談噺の一こまであり」「世界観からすれば輪廻転生譚である」とされている（七頁）。

また、相原和邦「『夢十夜』試論――第三夜の背景――」では、漱石が直接影響を受けたであろう日本の伝統文学や民話が丁寧に列記され、「盲殺し」「背負った子どもの石地蔵への変身」「田圃という舞台」などの類比が述べられている（『日本文学研究資料叢書　夏目漱石Ⅱ』一六五-一七五頁）。

本節は、あえて夢として解釈するという試みであるが、後述するように、深層心理を読まなければならない夢解釈においても、特定の普遍的概念による単なる置き換えは危険なことである。最終的には、個的存在としての夢主の個の同一性をこそ明らかにしなければならないからである。その意味においては、これらの論文に示されるような、個人としての夏目漱石が直接影響されたであろう諸作品を明らかにすることこそが、重要な課題だといえる。

筆者はまずこの作品がこのような小説としての虚構に立つという前提で理解していることを確認しておく。

ところでまた一方で、小説という虚構の大きな枠の中で、他ならぬ漱石自身がこれを「夢」という枠組みにおいて記していることも事実である。以下の解釈の中で明らかになるように、この作品は漱石の優れた技法と、夢とはかくあるものだという直観的感性によって、一般的な夢特有の構造と普遍的意味を持ち、そこに反映される漱石自身を焦点とする時代や社会を含む全存在を表現している。また、特にこの「第三夜」については、『夏目漱石――「夢十夜」論ほか――』でも、「明治三八年一月

一五日、野間真綱宛て書簡」（自筆絵はがき）（『漱石全集』第二十二巻、三五三頁、以下、巻数、頁数のみ記す）を引用して、漱石が人殺しの悪夢を見たことに触れ、それが「第三夜の構想と無関係ではあるまい」（六二頁）と推測されている。したがって、これらのことからも、まずは、夢解釈の方法を適用して解釈し、その上で改めて大枠としての小説として論じるという段階をふむこともひとつの意義ある試みだといえる。

本節はそのような試みの中で特に、この作品を夢として解釈する点に焦点を合わせて紙幅を割き、大枠としての小説と捉えて論じる点については、考察の方向性の一端に言及するにとどめる。

ところで、この「第三夜」は、場所がテーマに関わり、場所の移動と夢の深まりが構造的に相関関係を為している。したがって、解釈する場合の全体的な構成も、場所と場所移動の意味に着目することになる。そして本節では、このように場所に着目する方法的背景として西田幾多郎の場所論を適用するが、それを筆者なりに展開させて応用する。

また、内容を瞥見すれば、登場人物は、親と子の二人だけである。その二人の関係は、「対等だ」（『夢十夜』一〇六頁）と明記されるように、単純な親子の関係ではない。そればかりか、一種の気味悪さを感じさせる異様な関係である。本節では、作品のテーマの底に流れるこの親と子の関係に特に着目して、解釈を遂行する。

その上で作者夏目漱石の癒しを考察するのであるが、この場合の考察の基本は、すでに述べている。すなわち、本章の冒頭に言及したように、「夢を見る」という生理的現象それ自体を、人格発達や癒しの契機として捉えるということである。また、夢とは自由に退行している場面だから、どんな事柄でも自由に現れることができるという社会通念を逆手にとって小説の手法とし、本来表現しにくいテーマを表現することは、よく用いられる方法である。『夢十夜』というこの作品も、本来はそのように考えなければならない。そのうえで、本章の冒頭で述べたように、物語のテーマはそもそもひとつの安定的なホメオスタシス（恒常性）の崩壊から展開しはじめるが、作者の癒しという観点からすれば、それを表現しないで無意識にしまいこんでおいては作者の生育史において得られた人格発達に対するさまざまな阻害要因を解決することはできなかったと考えられる。たとえ悲劇だとしても、悲しみは悲しみなりに表現し、客観的に見つめなおすことだけでも、作者や読者の意識と無意識の全体の構造が変化し、それがエネルギーの質の改善につながって人格発達を得、癒されるのである。

以上のように本節は、哲学的場所論や人格発達論を軸として、心理学、文学などの比較論的考察の試みでもある。

なお、テキストは岩波書店版『漱石全集』（一九九三―一九九九年）を使用するが、他の引用文献を含め、引用について、旧かな旧漢字は現在のものに直した。

（1）　場所の構造と夢の構造

a　現象学的還元と構造的解釈・述語に基づく解釈

この作品を夢として捉えると、すべてが夢を見る人、夢主の主観的なイメージだと捉えるべきことは明らかである。したがって、表現されるすべては、自覚するしないにかかわらず、意識現象、すなわちこの場合は夢主の心像だと解さなければならない。それが、厳密にどのような構造を持つものかを考察する手がかりは、これまでしばしば述べてきた現象学的還元という考え方にある。つまり、現象学的還元とは、すべての事柄をとりあえず、意識の地平に成立している現象として捉えるということである。これは特に夢解釈に必要なことだといえる。この作品には、登場人物、場所など、さまざまな事柄が現れるが、それらすべてが夢主の心像だというつもりで解釈しなければならない。

次に具体的な考察に関わるが、すべてを夢主の心像だというのは、総合的、全体的な解釈を要求されることを意味する。すべての事柄が意識の地平に成立しているということは、すべての事柄が因果関係をもっていることを意味する。したがって、夢として現れる事柄は、夢主の肉体の殻に閉じ込められたものだけに影響されているわけではない。夢解釈に必要なその一端を後述するように、心身のさまざまなメカニズム、社会、歴史、そして、絶対的な存在すべてが夢という現象に関与する。夢解

釈において、それらを可能な限り解きほぐすことが求められる。

しかし、かといってなにもかもを手当たり次第に述べるわけにはいかない。すなわち、全体を見通しつつ、テーマに向かって焦点合わせをしていくことになる。特に、象徴的な事柄を解釈する場合に顕著なように、事柄の意味をどのように確定するかは、辞書の一項目を機械的に選んで並べればよいというものではない。

解釈の具体的な方法として、まず、ここで求められるのが構造的解釈である。

構造とは、ひとつの前提的側面から全体を表現するものである。その意味で、全体を因果的に捉えなければならないという現象学的還元から生じた要求に適合する。

個々の事柄の意味は、ひとつの前提的な構造に組み込まれてはじめて意味相互の論理的整合性を生じる。したがって、具体的な解釈の場合には、いかなる構造を選択しているかを認識しておく必要がある。真の全体とは、それらの構造相互の連関と統合によって成り立っているものだからである。本節で用いる場所論的解釈は、このような構造的解釈の一端である。

さらに、夢解釈の場合であれば、おもに生理的な背景に基づく夢特有の構造がある。その上で、物語分析や哲学的解釈学などの構造的研究を応用することもできる。そのどれを利用するかは、解釈すべき対象が決定することである。このような意味で、『夢十夜』「第三夜」においては、まず、先に述

べたように場所の移動とその意味が顕著な特徴として挙げられるので、場所論的考察を導入するのである。

解釈の具体的な方法として、次に求められるのが、述語に基づく解釈である。

現象学的還元から導かれたように、総合的、全体的な解釈をするということは、存在全体から切り取られた枠の中で解釈するというのではなく、常に全体を背景として見通しつつ解釈しなければならないことを意味している。もちろん、かといって、すべての連関を表現することはできない。そこで、解釈すべき主語を焦点としつつ、現象学的還元を現象学的判断中止とも呼ぶように、その主語に勝手な意味を与えることを一時中止し、その主語を取り巻く述語（主語以外のすべてを含む）によって主語がどのように構成されているのかを確認するのである。このことは、後述するように、場所論からも導かれる重要な方法である。

b　『夢十夜』「第三夜」における場所の構造

『夢十夜』「第三夜」において、まず情況設定を定めた上で、場所は次のように移動する。

1　情況設定

・父親が、六歳の自分の子を背負っている。
・いつのまにか子どもの目が不自由になっている。子どもは、そうなったのは昔からだと答える。その言葉つきはまるで大人。そして、対等である。

2　田圃（たんぼ）

・背負った子が「鷺が鳴く」と予言し、その通りに鷺が二声鳴く。
・わが子ながら怖くなり、子どもをむこうの大きな森に捨てようと考える。すると、こどもは、拾ててしまおうとする親の心を読み、「ふふん」と笑う。
・子どもは「今に重くなる」といい、親の自責の念を予言する。
・田の中の路は不規則にうねってなかなか思うように出られない。

3　二股の別れ道

・小僧（この場面から「子ども」から「小僧」へと表記が変わる）は、見えないにもかかわらず、石の道標を知っている。石の道標には、「左り日ヶ窪、右掘田原」とある。
・井守の腹のような真っ赤な字で書かれている。

・小僧は、左へ行くよう指示する。それは森の方なので少し躊躇すると、小僧は「遠慮しないでもいい」と推し進める。
・目が不自由なのに何でも知ってるな、と考えていると、背中で、「親にまで馬鹿にされるからまずい」といい、さらになにか重大な秘密を知っているかのようにいう。

4　森の中・杉の根のところ

・雨の中、暗くなる路を夢中で歩く。
・背中に小さい小僧がくっついていて、「自分の過去、現在、未来を悉く照して、寸分の事実も洩らさない鏡のように光っている」。「しかもそれが自分の子である」、「そうして盲目である」。堪らなくなる。
・小僧は、百年前、文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、父親がひとりの目の不自由な男を殺し、その男が自分なのだという。
・父親が、自分は人殺しだったのだと気付いた途端、背中の子が急に石地蔵のように重くなる。

c　場所論の方法

さて、以上の場所の構造に着目して解釈する場合、場所とはいかなるものかという点が問題になる。この本では第一章の二で述べたように、それを西田幾多郎の場所論をてがかりにして考察している。ここでは、本章の考察に必要と思われる要点のみを列記する。

（1）西田幾多郎の哲学的場所論における場所とは、哲学の主題としての存在そのものと同義である。したがって、唯一、絶対、無限（いかなる区別もない）という性質を持つ（『場所』二〇八-二〇九頁）。

（2）唯一の存在としての場所は、場所自身を自己限定して個、すなわち個別的な事柄を生じる（『無の自覚的限定』二〇八-二〇九頁）。

（3）個は、場所を表現し、場所を豊かにするものとして場所を限定する（『現実の世界の論理的構造』四七〇頁）。

（4）このような場所と個の相互限定の運動は、無限対有限、絶対対相対、といった相矛盾する運動であるが、その運動によって、場所と個の相互、および個相互の同一性が明らかになり、全体が多様化する。この運動は、現実的には歴史として示される（『哲学の根本問題』一九一頁）。

さて、現象学的還元に端を発した本節の夢解釈の方法と、この場所論の方法とは、以下の点で、論理的連続性がある。

第一章、二の（2）で、現象学的還元とは、すべての事柄をとりあえず意識の地平に成立している現象として捉えることだと述べた。さらにそこから、事柄を解釈する場合には、すべてを主観的な現象として曖昧にするのではなく、主観が成立するのは存在全体の構成が関わるという事実を重視し、全体に関わる方法としての構造的な解釈を導入することを述べた。場所論の方法はそのひとつである。

これまでのところ、この考察と、(1)-(4)は、次のように対応していると考えられる。

(1)については、結局はすべての事柄を唯一、絶対、無限な地平において成立するものとして捉えなければならないという基本的な事態を意味することと対応する。

(2)については、そのような絶対的な存在が、現象するひとつの事柄として意識に現れるのであるが、それは、存在それ自体が、存在自身を構成して成立させていると考えることができる。西田幾多郎はこのことを「自覚」という概念によっても説明する。「意識作用というのは自覚的限定によって考えられたものでなければならない。自覚的限定とは場所が場所自身を限定することである」（『無の自覚的限定』九六-九七頁）と述べるように、個々の事柄が成立するのは知るという認識に関わることではあるが、その認識さえも唯一、絶対、無限な存在としての場所が場所自身を構成し限定することだ

とされている。そして、第二章の二で述べたように、このことを意識して解釈を遂行するとなれば、認識による限定でもある主語に対する先入観を捨てて、主語を取り巻く述語の構成を考慮しなければならないことになる。

（3）（4）については、本節で言及する限りでは不十分であるが、フッサール現象学においては、個の個たる在り方を重視すること、歴史的視点から事柄の本質を認識すべきことについてはむしろ常識だといってよい。

さて、次項ではこの方法を場所論的な夢解釈の方法へと、本項ｂの内容に対して具体的に展開することになる。

（2）『夢十夜』「第三夜」における場所の構造的解釈

場所論的解釈を行なう場合、具体的な空間としての場所を手がかりとすることはいうまでもない。しかし、その意味は物理的な意味だけではない。ひとつの事柄がいかなる意味を持つかを、場所との関係において考察する場合、それが夢ならば、まず、夢特有の場所の現れ方がある。それは、夢の生理的な深まりと並行的に示されると考えられているものである。

第三章一の（1）ｂで述べたように、おおむね夢はＲＥＭ睡眠時に見るとされる。この時期は、眠

ってはいても意識が働いているが、より深いＮＲＥＭ睡眠に入ると、意識は働かなくなる。眠りに伴うこのような生理学的な段階、すなわち、夢を生じる意識作用の段階は、夢の内容に影響することが考えられる。

本項で取り上げようとしている場所論の方法との関連でいえば、眠りの段階は場所の段階として現れるといえる。

この場所の段階を考える場合の目安になる概念が、「退行」と「再統合」である。これらについても筆者はすでに第一章一の（2）で述べてきたが、おおむね次のようにまとめることできる。

「退行」とは、「子ども帰り」ともいわれるように、個人の生存における社会生活につきものの意識的、自覚的仮面を緩め取り外すことを意味する。これは、個人の統合性を緩めることになり、それまでの恒常性を失い、混乱し、生命力すなわち「エネルギー」の消耗を招く。反面、個人が自分の殻を破って発達するためには、意識的、自覚的な仮面を外すことも必要である。したがって、退行とはまた、発達の契機にもなる。

発達するとは、新たな、より生存能力の高い恒常性を手に入れることである。それを、退行し、緩んでいたものが再び統合されるという意味で「再統合」と名づける。退行から再統合に到り得るためには、エネルギーの補充が重要な鍵になる。

すなわち、そのままエネルギーが消耗している状態が続けば、個人は生存の危機に直面することになるが、十分にエネルギーが補充されれば、むしろ高レベルの再統合が得られ、大きな発達が期待されることになる。

このエネルギーは、量と質の両面から考えることができる。量については、食欲、睡眠など量的に計ることができるエネルギーとして考える側面である。しかし、例えば、量だけの側面からでは計れないものもある。むしろ重要なのは、質の側面である。これは、個人の全体の構成である。肉体の殻に包まれた個人ではなく、無限の存在全体の焦点としての個人を取り巻くすべての事柄が、個人にとって統合的な状態かどうかがその目安となる。したがってこの質の側面には、真の統合を考えることができる知識が重要な要因となる。

退行と再統合のダイナミズムとテーマの関係は次のように考えられる。先に述べたように、退行とは、発達の契機でもある。つまり、人は発達にとって必要な段階にまで退行する可能性を持つと考えられる。そこで、必要な事柄がテーマとして現れると考えられる。テーマとは、本来の恒常性が崩壊している様子であり、ストーリーはそれが本来の恒常性に到る過程である。もちろん、そこですぐに発達に結びついてそのテーマが解決に到る可能性は少ない。したがって、必要な退行を得られる段階にまで、何度も退行し、そのテーマの解決を図ろうとする。これが、繰り返し見る同じ夢として現れ

ると考えられる。

なお、「退行」「再統合」「エネルギー」に関する以上のダイナミズムは、人間にのみ妥当するだけではなく、自然、生物、社会、組織など、すべての有機体の生存に当てはめて考えることができる。

この「退行」「再統合」と、場所との関係は次のように考えることができる。

これまでの考察から、大まかな目安は、人間の意識的な活動に関わる場所から、無意識的な要因の強い場所へという系列である。後者に近いと退行しているし、その退行している場所から前者に近づくと再統合する可能性を持つ、と考えればよい。

特に夢の場合には、先に述べたＲＥＭ睡眠期の中でも、ＮＲＥＭ期に近づくと退行し、そこから覚醒に近づくと再統合する可能性を持つとともに生理学的なダイナミズムと並行的に考えることも必要である。例えば、夢の中で暗い場所から明るい場所に出たという場合でも、特に深い意味はなく、単に外が明るくなって目覚めに近づいたという可能性も考えなければならない。

さて、このような夢解釈の前提から、「第三夜」の場所に着目してみると、全体の流れは退行に向かっているといえる。

まず、田圃は、人間の意識的な手が加わった自然である。これに対してこれから向かおうとする向こうの森は、人間の手があまり加わらない場所であり、退行を意味する。

田の中の不規則にうねった路は、さらに退行していくことに対する抵抗を意味している。これは、先に述べたことから、真のテーマに到ることに対する抵抗を意味しているといえる。この点については、夢主の複雑な心理が窺えるが、後にテーマとの関係から考察する。

そこで、二股の別れ道に到るのであるが、「日ヶ窪」「掘田原」という地名の詳細は、『漱石全集』第十二巻の注解に記してあるが（六五二頁）、これまで述べてきたような場所のダイナミズムを考えれば「左」を選んだことに意味がある。

芸術療法における映像表現の左右性の問題は、岡田康伸『箱庭療法の基礎』では、でき上がった砂箱表現を左右逆に置いた場合の「ピッタリ」感の有無というテーマで研究され、やや不明瞭な結果が報告されているが（一四一-一五八頁）、筆者にとって、場所論の立場からむしろ重要だと思われるのは、そこに引用されている、四角の中における各場所の持つ意味を模式化したグリュンワルトの空間図式に見られるような、場所が本来持っている普遍的、象徴的意味である。すなわち、同書の研究は「でき上がった砂箱表現」という主語が、左右逆になってもぴったりくるか、というものであるが、ある対象が左右逆になればそれはそれで別の主語として意味を発揮するために、それなりにぴったりくるはずである。同書の研究はむしろそれを明らかにしたという点で評価できる。

さて、そのようなぴったり感の背後には、表現という主語を支える背景としての述語がある。それ

こそが、場所が本来持っている普遍的、象徴的意味である。筆者はサンドプレイ（箱庭療法）や絵画療法の体験例から、それをかなり単純化して、次のように考えている。

まず、左右の問題は、左が無意識的、無自覚的要因が強く、右が意識的、自覚的要因が強い。また、上下は、上が意識的、自覚的要因が強く、下が無意識的、無自覚的要因が強い。そして、左右性と上下性とでは、左右性の方が強いダイナミズムを持つ。

したがって、方向性としても、左へは、無意識、無自覚、過去、そして、母性、大地性、身体性などへの方向性を意味している。これに対して右へは、意識的、自覚的、未来、そして、父性、論理性、宇宙性などへの方向性を意味している。

四隅については次のように考えられる。

左上隅は、家庭、出自が示される。左下隅は、無意識、可能性、出現してくる未来の契機が示される。右上隅は、意識、発展、目的、結果、意図的な未来が示される。右下隅は、意識と無意識を貫く真の現実、本当のテーマ、本音が示される。

さて、このような視点から「第三夜」の場所を考えるのであるが、二股の別れ道で「左」を選んだのは、まずは、無意識の方向を選んだと考えられる。いいかえればその方向性は、より深い退行へと至る方向性である。さらにそれは、母性や過去、大地性という方向性でもある。これらがやがてどの

ような意味を持つかは後に考察するとして、ここでは、背中の子供が無意識の方向を選ばせたことに着目しておく。

夢主にとって背負った子どもが左を選ばせたという意識は強い。表現も「子ども」から「小僧」へと代わり、ここで夢を遂行する主人公が逆転しているのである。もちろん、現象学的還元を顧みれば、この小僧も、夢主自身の一側面である。生理的構造からいえば、夢主自身が夢の深まりとともに退行しているのであるが、退行を促す主体を他者に委ねようとしている。これは、一種の防衛反応である。すなわち、夢主にとって退行することであらわになる不都合なことや、隠しておきたいことに対する抵抗である。その内容が、いよいよ森の中で明らかになる。

森の中であらわになったことは、先にも述べたように、百年前、文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、父親がひとりの目の不自由な男を殺し、その男が背中の小僧なのだということである。このような荒唐無稽な内容を夢主は素直に受け止めている。ということは、この内容は夢主にとって当然の意味を持つテーマだということになる。

場所の意味を考えれば、森は、無意識の象徴であり、その中のランドマークともおぼしき杉の根元は、無意識の心奥である。したがってそこでは、この夢のテーマ、すなわち、この夢を見なければならなかった真の理由が明らかになる。

その理由とは何だろうか。

場所の意味と場所の移動の方向性の意味に着目したこれまでの考察から、この最後の場面の内容を厳密に解釈することで、この夢の真実が明らかになることが推測されることになる。

（3）『夢十夜』「第三夜」における夢のテーマ

『夢十夜』「第三夜」の最後に到達した場所、森の中の杉の根元で判明したことは、夢主が百年前にそこで目の不自由な男を殺し、その男が今背負っている自分の子供と同一人物だという事実であった。

したがってまず、起こったことは殺人である。

夢や芸術表現において、死は、決して悪い意味ばかりではない。それは「死と再生」という一連のテーマに繋がるからである。

第三章一の（2）gで述べたように「死と再生」は、具体的な例としては、何かが死に、何かが生まれるというセットで現れる。小説の末尾に、主人公の死とともに、その子の誕生が描かれていればそれは典型的な「死と再生」のテーマだといえる。「死」は分りやすい死の姿ではなく、木が枯れる、町が崩壊するなどと、象徴的に示される場合もある。「再生」も必ずしも同じ種類のものが再生するとは限らない。ミッチェルの『風とともに去りぬ』の最後に、すべてを失った主人公が、故郷に目覚め

るというのも、死と再生のひとつの現れである。少なくとも主人公と読み手の心理には、何かが終わって新たな何かが生まれているからである。

このように「死と再生」は、一言でいえば、発達を意味する。すなわち、死とは何かが終わったことを意味し、再生は、なにか新しいことが始まったことを意味すると考えられる。もちろん、「死と再生」がスムーズに進展するためには適切なエネルギーを必要とする。

死は必ずしも悪い意味ではなく、むしろ発達の契機だから、良いもののはずであるが、実際には、死にまつわる夢や表現に対しては恐怖や不安を感じる。この夢の場合も、父親が、自分は人殺しだったのだと気付いた途端、背中の子が急に石地蔵のように重くなる、というように、自責の念に襲われたりもする。これら否定的な反応については次のように考えられる。

一般にある事柄に恐怖や嫌悪といった否定的な感情を持つ場合には、ふたつの相反する理由が考えられる。

ひとつは、それが生存に反するものの場合である。この夢の場合、死はたしかに生存に反するものであるから、否定的な感情を喚起するといえる。

いまひとつは、それが生存に役立つものでありながら、自分の現状からはまだ遠い場合である。この夢の場合、死と再生という一連の発達の契機に達していながら、いまだ現状からは程遠く、それゆ

えに死という事実の恐怖のみが表面化していると考えられる。

このことをもう少し追求しようとすれば、死んだのは誰なのかという問題が浮上してくる。そして、それを考えるためには、先に述べたようにこの作品に即して、死んだもの、目の不自由な男、子ども、小僧の述語をたどり、その性格を確認しなければならない。物語は場所とともに退行に向かっているのだから、第三章二の（1）bにおける1-4を参照しつつ、それに従って改めて確認する。

これまで述べてきたように、場所の移動は退行の進展であり、それは、テーマをあらわにする方向性を持つものであった。したがって、述語性に着目した各項目に対してもこのような方向性を意図しつつ解釈しなければならない。

はじめに呼び名である。当初は、「子ども」と表記されていたものが、二股の別れ道からは「小僧」が主流になる。それでも、森の中において、「自分の子」「背中の子」というように、親との関係において述べられる時には「子」という表記が用いられている。このことは、「小僧」という自立的な存在に対する気持ちと、自分の子という血族的関係の中でとまどっていることを意味していると考えられる。

そのつもりで、モチーフ場面、すなわち情況設定場面に着目すると、「たしかに自分の子」「言葉つきはまるで大人」「しかも対等」と、すでにこのとまどいが提起されていることに気づく。

自分の子どもであるとともに、それが対等な自立的存在でもあること、これは、現実的な親の場面を考えれば、ごく常識的な感情である。子どもというものは、当初は親を絶対的な存在として捉えつつ人格発達し、人格発達してしまえば、対等になり、さらには親の知らないことをも知り追い越して行くべきものである。この夢の場合も、ひとつのテーマとして、このような親と子の人格発達に伴う関係の変化が含まれていることは明らかである。

さらにとりあえずは、田圃以降の展開も、この延長として考えることができる。子どもは人格発達するに従って、親の知らないことを言い当てたり、捨ててしまおうという、すなわち、自立させてやろうとする親の心を読んだりする。死と再生ということを考慮に入れれば、象徴的には、親は子供を見捨て、その子ども性を殺すことによって発達させるという表現もできるであろう。

すなわちはじめに指摘できるのは、この夢には、このような親子の双方の発達に伴う常識的な葛藤がテーマの底に流れているということである。

そこにさらに関わってくるのが、全体を流れる神秘性や不気味さである。この神秘性や不気味さはこれまでの考察の連続性として、親子双方の人格発達にともなう感情としても捉えられる。特に、この不気味さという否定的感情は、先に述べたことから、夢主自身の人格発達にとって、まだ自覚せず、遠いことのように思われるための感情だともいえる。

しかしそのうえで、百年前のエピソードの必然性はどのように考えればよいだろうか。このエピソードが漱石のどのような個人的体験に基づくかについては、先述の『夏目漱石――「夢十夜」論ほか――』や「『夢十夜』試論――第三夜の背景――」に述べられるような、江戸後期から明治初期に至る芸術活動の風潮が最も直接的なものだと考えるのが妥当であろう。したがって、まず、それが最大の必然性である。

そのうえでさらに、より深奥の必然性を、退行の極、すなわち無意識の最深奥という場所構造における意味から、元型的な意味との関連で考えることができる。ただし、これまでも述べてきたが、以下のような元型的意味づけは、一般化してそれを結論としてはならない。とりあえず一般的な意味として解釈したうえで、個としての夢主の現実的な生育史と重ねるなどの具体的検証を伴わなければ、個人が消滅するからである。

殺人についてはこれまで述べてきた通りだが、「目の不自由な男」とはどのように考えればよいのだろうか。この事件が起こったのは、場所構造的には無意識の最深奥であり、しかも、夢主が生まれる以前の過去ということで、ひとつには元型的意味として捉えることができる。

筆者はこの「元型」という語を、河合隼雄、林道義などに倣って（河合『ユング心理学入門』、ユング、林道義訳『元型論――無意識の構造――』など）、ユング心理学の用語“Archetypus”の訳として

用いる。

ユングはこの“Archetypus”を「原像（das urtümliche Bild）」とも呼ぶが、その特徴は「常に集合的（kollektiv）」と述べられ、また、その成立について「記憶の沈殿物」「生理学的、解剖学的に規定された素質の心的表現」などと述べられるように（Jung, Bd. 6, S. 453）、時空間を超え、個々に所属する意識の深層において共通な性格を持つ。

では、「目の不自由な男」（＝子ども）は、どのような元型的意味として述べられているのか。

考察の方法としては、ここで象徴に関する事典を参照すれば一応の答は出ることになるが、その方法は数多くの意味の中に埋没させる危険性をも孕む。ここでは、述語性によって考察すべき方法を導入し、同時に元型的意味を求めることにする。

「目の不自由な男」（＝子ども）を主語として、その述語性に着目すると、二つの特徴が明らかになる。

ひとつは、人間の能力を超えた知を持つ、ということである。父親の心を読み、鷺が鳴くことを予言し、百年前の殺人を知っているのである。

いまひとつは、当然ながら、背負われている子どもだということである。

そして、この二つが合体している元型について、一例として、アト・ド・フリース『シンボルとイメージの事典』（山下主一郎監訳『イメージ・シンボル事典』）を参照すると、「子ども（child）」の項

に、「神秘的な子ども（the mystic child）は、智恵を授け（例えばイエスが福音書記録者にしたように）、謎を解き、地下の、もしくは、心理的な怪物から、世界を解放する」とされている（Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p.96）。

この定義は、「目の不自由な男」の解釈にひとつの示唆を与える。

場所の段階では、最深奥に退行している場面では、殺された男は必ずしも子どもではない。しかし、その少し浅い、現実に近い層までは子どもなのである。

本節の始めに現象学的還元から述べ始めたことを顧みて、かつ元型的な発想をすれば、この矛盾は難なく解決できる。

すなわち、殺された男は、夢主の意識に生じた像のひとつである。それが子どもとして登場したのだから、それは、夢主自身における「子ども性」とでもいうものである。それは、元型的なまでに神秘的な子どもなのだから、夢主自身にとってまだ遠い存在であり、したがって、不気味な感じを与えるのである。遠い存在というのは、先の、『シンボルとイメージの事典』の、神秘的な子どもについての説明では、むしろ、新たな可能性の感じを与えるのに、同じように、「智恵を授け」「謎を解く」ことが、この夢では不気味な印象を与えていることからいえることである。

そしてこのことは同時に、この夢が、本当は自覚されない新たな可能性でもあることを意味してい

ることになる。夢において、なんらかの怪物から世界を解放することは、夢主にとって癒しであり、人格発達でもある。

ということになれば、死んだ男は大人のようで、背中にいるのは子どもだという理由が明らかになる。すなわち、死んだ男は、夢主の過去であり、子どもは夢主の可能性である。

そして、不気味な印象は、夢主の過去が本当には死にきっていないことを意味する。すなわち、夢主が、人格発達できず、現実的、意識的に新たな未来に向かって出発できないでいるということが示唆される。

さて、夢主は、この夢の中では、親を演じている。それは、現象学的還元から派生してきた、すべてを夢主の心像だという考え方からいえば、夢主自身における「親らしさ」つまり「親性」である。これに対して背負っている子どもは「子ども性」である。

「親性」からいえば、「子ども性」は、不気味な存在である。それは、自分の内部が人格発達するためには、自分のより未熟な側面を見捨て忘れなければならないのに、それをまだ完全には遂行できないでいることを知っているから不気味なのである。

ここでこの夢の、もうひとつのテーマが現れてくる。

それは、先に述べた現実的な親子関係につきものの葛藤に対して、それと連関しながらも、自分自

身の内面における「親的な側面」すなわち「親性」と、「子ども的な側面」すなわち「子ども性」との葛藤である。

この物語に即していえば、「親性」は親としての優位を保ちたいと意識するような現れ方をしている。しかし、注意してみるとこの親は、親としての行動は背負うこと以外には何もせず、ひたすら子どもを捨てようと森へ急ぐ。他のさまざまな親らしさすなわち「親性」が現実的な親には限りなく指摘されるだろうが、この夢において選ばれたのは、捨てるという行為である。これは明らかに、テーマを象徴している。そして、この捨てようという行為が、ひとつの主体における「親性」と「子ども性」との間で起こったことだとすれば、すなわち、ひとつの主体の行為だとすれば、それは「子どもの自立」という行為にほかならない。

夢主、つまり一個の人格は、その内面に、「親性」を持っている。それは、自らが人格発達し自立するために、自らの「子ども性」を捨てていかなければならないということを知っている。その捨てるという行為は、自分の過去を抹殺することでもある。

他方、一個の人格の「子ども性」の側からも、子ども性自身を捨てなければならないということは分っている。この夢の場合も、むしろ子どもが、無意識への退行を指し示すのである。さらに、一個人における「子ども性」もまた、「親性」よりも、未来への発展可能性を持っている。それゆえに、「神

秘的な子ども」に顕著なように、その可能性を目的論的に延長すれば無限の知識や超越的な知識に連なることになるが、この点でも親性は、子ども性に対して反発し、抹殺しようとする。夢主という主体が未発達であればあるほど、この反発と抹殺は、夢主自身にとって、強くかつ不気味に現れることになる。

かくして、夢主自身は、自らの未発達さゆえに、夢においてさえ「親性」と「子ども性」のせめぎ合いに苛まれることになる。

そして、この夢の深層にあるこのような「親性」と「子ども性」のせめぎ合いは、先に述べた、現実的な親と子のそれぞれの人格発達に伴う変化というテーマと、夢主の意識の上で重なることは明らかである。現実に親は子に、子は親に自分の可能性を投影し、その現実との差異に葛藤するが、それは、最終的には、本人の意識における現象である。

かくして、『夢十夜』「第三夜」を夢として解釈する試みから、これまで述べてきたような意味での「親性」と「子ども性」のせめぎあいというテーマに至ったが、それがなぜ起こったのかという点について言及しなければならない。

そのうち、最も深層においては、人格発達本能とでもいわなければならない。

第一章一の（3）で述べたようにエリクソンは、人格発達の内的法則を前提として、発達に伴うラ

イフステージの各段階で出会うべき危機やその克服の典型を詳説するが、その前提として「人格発達するものはすべて予定表（ground plan）を持っており、この予定表から各部分が発生し、各部分はそれぞれの特に優勢な時期を持つが、それはすべての部分が一つの機能的全体（functioning whole）へと至るまで続く」（Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p. 53）とし、いわば無限の完成を目指す人格発達本能があることを述べる。本節の夢解釈においても、このような人格発達本能を前提として遂行する。

それと同時に重なってくるのが、これまで述べてきたような「親性と子ども性とのせめぎあい」という元型的あり方である。すでに述べたように、これは、本来すべての人格の深層に横たわり、条件さえ整えばいつでも姿を表そうとする型とでもいうものである。

したがって、夢主自身がそれを特定の夢であらわにするには、夢主自身の個人的条件が反映されているはずである。

もちろん、その個人的条件のひとつには、直接的に影響を受けたであろう芸術的風潮がある。ちなみに、先述の元型的考察は、これら芸術的風潮が江戸末期から明治初期という時期に起こったことに対しても、ひとつの視点を提供することができる。それは、まさにその時代が、価値観の激変期に当たり、本質的に「親性と子ども性のせめぎあい」が激しい時期だったのではないか、という視点であ

る。これは、漱石自身に関係することでもあり、詳細な考察を要するものであるが、限られた紙幅の本節では問題提起にとどめて割愛する。

さらに考察すべき個人的条件は、漱石自身の個人的事情である。それは、二つに分けられる。ひとつは、漱石がこの小説を書いた時期の問題であり、もうひとつは、漱石の生育史の問題である。これらの問題は、いかに漱石が時代の芸術的風潮の影響を受けてこの作品を創作したとしても、創作の因果性からいえば、より作品に密着しているはずである。そしてこの点は、先に述べたように、一般的な夢解釈においても避けては通れない事柄である。紙数の限られた本節ではその点に詳細に触れる余裕はないが、本節の考察を検証するためにも、文学研究の一端を纏めておく。

（4）『夢十夜』「第三夜」と夏目漱石

まず、漱石がこの作品を書いた時期の状況についてであるが、『夢十夜』は、一九〇八（明治四十一）年、漱石四十一歳の時に書かれた。その前後の事情は多くの研究者によって触れられているが、一例として小宮豊隆『夏目漱石』に記録されている内容から、本節に関わるひとつの典型的な事実を確認しておく。

このころ漱石の身の上に起こった最大の変化は、東京帝国大学および第一高等学校の教官を辞して、

朝日新聞社に入社したということだといえる。『夏目漱石』では、一八九五（明治二十八）年の『愚見数則』（第十六巻、三一九頁）や、『明治三〇年四月二三日正岡子規宛て書簡』（第二十二巻、一二二一二四頁）などを引用して、漱石が自らを教師に向いていないと感じ、文学三昧に生きたいと考え、自らの本職とは何かと悩み、さらには神経症にさえなりかかっていたことが述べられている（二五一-二六八頁）。したがって、良い職さえあればいつでも転職したいと思いつつ過ごしていたようである。しかし、もちろん生活を考えれば簡単にはいかず、一九〇六（明治三十九）年ころから報知新聞社や読売新聞社から就職の依頼が来るが、迷ったあげく断っている。そして、結局決定したのが、一九〇七（明治四十）年の朝日新聞社入社であった。朝日新聞社側の意気込みと、これと対比的な漱石の迷いについては『夏目漱石』に経緯が記してあるが（二六九-二八二頁）、本節のテーマと特に結びつくのは、この深刻な迷いである。

この場合の迷いは新しい変化に対する迷いである。その変化は、結果的には『文芸の哲学的基礎』（第十六巻、六四-一三七頁）に見られるような、自己の主張と発展を生き生きと述べ始めるような好転をもたらしたのではあるが、神経質な漱石は変化に順応するのではなく、次々に起こる新しい事態や、矢継ぎ早の執筆依頼に表面上は対応しつつ、内面は葛藤していたようである。『夢十夜』の直前に書いた『文鳥』（第十二巻、七九-九八頁）には、書斎でペンを淋しく走らせるという記述が繰り返し

出てくるし、執筆やその他の多忙事、おそらくは弟子、森田草平と平塚雷鳥との駆け落ち事件、いわゆる「煤煙」事件の後始末などで、結局文鳥を死なせてしまう結末などは、当時の心中を暗示しているといえる。

いうまでもなく、この変化は、「死と再生」のテーマである。しかも、完全には再生し切れないまま推移している。自らの中に生まれようとする新しい要素としての「子ども性」の可能性に期待しつつも、それまでの価値観としての「親性」は「子ども性」の未知的な内容に戸惑い恐怖するのである。

次に、漱石の生育史の問題である。

この点について研究史的には、荒正人「漱石の暗い部分」（坂本編『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅰ』一四三-一四五頁）が一つの角度からの解釈として特徴づけられる。この評論では、目の不自由な子どもを、生理的に去勢されてしまっている父親とみて、それを、漱石が父親五十四歳の時の子どもだという事実や、漱石が父親を憎み母親を愛したという事実、そして、漱石が実父晩年の末子であることから誕生と同時に里子に出され、二歳で別の養父母の許にやられ、十歳で実父実母の家に二人が祖父母と教えこまれて戻り、やがて真実を知るという経歴などによって、フロイト的精神分析でいうエディプスコンプレックスに相当するという主張が述べられている。

漱石の生育史にまつわる事実はまさにその通りであろうし、それがエディプスコンプレックスに結

びつくこともあり得ることだが、それをすぐさまこの「第三夜」に適用するのは、本節でこれまで述べてきた方法論からもやや短絡的な感が否めない。ほんの一例であるが、表現そのものを重視し、述語性に着目して考察すれば、先に述べたように、「背の子ども」はやはりまずは「子ども」の意味を担い、それが叙述に従って目の不自由な男の意味をも担っていると、作品に沿って考えるのが常識的だと思われる。そこから、エディプスコンプレックスにまで引きつけるのはやや因果性に飛躍がある。

その上で、この漱石の原点ともいえる生育史は、本節のこれまでの考察にひとつの論拠を与えることになる。すなわち、本節の考察から到達したひとつの仮説として、先に「親性と子ども性とのせめぎあい」が現れる理由は、本質的に未発達だからと述べたが、漱石のこの生育史からは、特に父親に対する信頼感が育たなかった経歴や、同時に漱石自身が内面的な「親性」を育て確認する基準を、原初的に得る機会を失っていたことを意味する。第一章一の（3）で述べた、エリクソンの人格発達モデルを参照すれば、人生の最も基本的な段階、すなわち乳児期に、すでに基本的な信頼感を得る機会を逃していたことが分かる。その後の各段階についても、荒正人「漱石の暗い部分」で言及されている限りにおいても、人格発達に関してはさまざまな阻害要因があったといえる。その場合、人格発達そのものがアンバランスなまま進行するので、自らの人格発達に対しても違和感を抱き、人格発達本能や社会的変化によって生じてくる自らの新しい可能性としての「子ども性」に対しては不気味なも

のとしてしか対処できないのである。

現実的な資料による考察は、さらに展開しなければならないが、このように、人格発達に伴う元型的な認識形態に、このような生育史が重なり、時代的な芸術風潮が重なり、さらに当面の自己の環境と心身の変化に対する戸惑いなどから、この夢が形成されたと考えられる。

（5）『夢十夜』「第三夜」と夏目漱石の癒し

では、この「第三夜」において、夏目漱石自身の癒しは、どのように考えればよいのであろうか。

考察の軸になるのは、テーマそのものであることはいうまでもない。本節の考察からそのテーマは、さまざまな背景を背負った「親性と子ども性のせめぎあい」だと述べてきた。それを、夢という自由な形で表現する時、夏目漱石の内面では、曖昧なものを文章化する論理的思考が働くことになる。そのことで自身の意識と無意識の全体を再構成し、エネルギーの質を整え、また、少なくともこの場合には、客観的な評価が得られたのだからエネルギーの量も得たことになる。これらの総体として、作者は、このテーマそのものを当面の個人的なコンプレックスから解き放ったのである。すなわち、このような「親性と子ども性のせめぎあい」を表現することで、そのことから抜けだす契機を得たといえるのである。これまで述べてきたことからいえば、それは、生育史上の問題であったと同時に、作

者を取り巻く現実的な諸問題でもあり、社会的な諸問題でもあった。それらすべてを担って作品は生まれ、作品は、表現されることでそれらすべてを乗り越えて、作者が癒される方向を示したともいえる。

かくして本節は「第三夜」を夢として捉えた場合、どれほどのことがいえるかを論じてきたが、冒頭でも述べたように、本節に続いて、このような視点から漱石の創作活動を検証すること、それが今後の課題であることはいうまでもない。次章では、「第四夜」について考察する。

三　夏目漱石『夢十夜』「第四夜」の夢解釈

本節は前節に続いて夏目漱石『夢十夜』の「第四夜」を、夢として解釈し、それを基礎にして、文学としてのテーマを探り、この作品を記すことによる作者夏目漱石の癒しの意味を求めようとする試みである。はじめに、前節と同様に、以下の三点を大きな枠組みとしていることを確認する。

第一点は、夢解釈を適用することの意味である。『夢十夜』は本来、文学作品であり、心理学的な対象としての夢とは異なるが、この作品の場合、前節で述べ、また以下論じていくように、一般的な夢と類比できるような内容と構造を持つ。また、三好行雄による新潮文庫『文鳥・夢十夜』の解説にも

「漱石ははやくから〈夢〉、あるいは〈無意識〉を描くことに自覚的な作家だった」（二六〇頁）とあるように、この『夢十夜』を、夢として、あるいは「無意識」のダイナミズムの発露として読み解くことも、また、漱石研究の一端であるともいえる。したがって、考察のひとつの入口としてあえて夢解釈の方法を用いることも有意義だと考えられる。なお、夢解釈の方法については、すでに述べてきた本章の方法を踏襲するが、論理の流れで必要に応じて概略的にその方法についても述べつつ、解釈を遂行する。

第二点は、第一章で述べたような、また、前節でも用いたような、場所論的思考の導入についてである。後述するように、特にこの「第四夜」に対しては、この作品を場所論の視点から捉えて分析することが有効である。したがって、「場所と場所の意味」に着目して解釈を遂行する。

第三点は、文学的本質の保持である。このような異分野からの解釈は必ず、当の対象の本質的分野（この場合は文学）の一般的な考察に繋がり、本質的分野へと戻って来なければならない。さもなければ単なる特殊な前提の押しつけになってしまうからである。本節では（4）で、文学における一般的な解釈との橋渡しを紙幅の許すかぎり行なう。もちろんこの点は橋渡しであって、文学的な議論を遂行するにしては不十分である。そのような意味で本節は、比較文学と比較思想との比較論的な解釈の試みの端緒である。

『夢十夜』のテキストは引きつづき『漱石全集』第十二巻（岩波書店、一九九四年）を用いる。また、同書からの引用に関しては頁数のみ記す。

なお、参考文献からの引用は、つとめて原典に忠実に行ない、欧文は拙訳を掲載した。また旧かな、旧漢字については、現代のものに直し、読みにくい語句にはルビを付した。

（1）　現象学的還元と夢における場所

筆者の夢解釈の基点は、これまで述べてきたように、フッサールの「現象学的還元」にある。それは、とりあえずすべての事柄を主観、すなわち意識の地平に展開する現象として捕らえようとするものである。特に、夢の内容はまさに、夢を見る夢主の心に起こった現象なのだから、まずは、夢の中で起こったことを、そのまま受容することが求められる。

しかし、夢はあくまで夢であり、その意味は単に現れるままに捉えるわけにはいかない。そこで夢の解釈が求められることになる。その際、個々の事柄の象徴的意味に関しては、シンボル事典などを参考にするが、事典中における多くの意味のうちどれがふさわしいかは、全体との関係の中で決まることである。そして、その全体の仕組みや構成の状態を表現しているものを「構造」と呼ぶ。

構造と個々の事柄の象徴的意味とを組み合わせて、はじめて夢解釈が成り立つのである。しかし、

その構造にしても、全体を表すという共通点があるとしても、さまざまな構造が指摘され、どの構造で解読を進めるのがふさわしいか、という問題が生じる。この問題に対して筆者は、第一章二で述べたように、論理構造に沿った解釈妥当性の常識に照らして、ひとつの構造上に複数の事柄とその意味が論理的整合的に位置づけられ、ひとつの事柄が複数の構造上で同じ意味と判断される場合には、その意味は妥当していると見なしている。

さて、このような立場から、この『夢十夜』の「第四夜」を解釈しようとする時、まず手がかりとなるふさわしい構造を発見するために、ストーリーの大枠を素直に捉えてみる。すると、このストーリーは、空間の枠、場所を移動していることに気付く。

すなわち、土間から表へ、さらに柳の下へ、河の岸へ、そして河の中へと、夢の中の主な対象としての老人の移動に従って、夢を見る本人（夢主）の視点は移動する。

後述するように、この移動に関しては、夢特有の生理的現象および心理的現象との対応が考えられる。そしてそのような解釈を可能にするために、場所に豊かな意味付けを与える仕方には、これも第一章の二で述べたような「場所論」の考え方を活かすことができる。その要点は第一章の二で述べた通りであるが、考察の便宜上、簡潔に列記しておく。

（1）　「場所」は唯一絶対無限な存在そのものを意味する（場所の唯一絶対無限性）。
（2）　場所は自己を限定して個すなわち個別的な事柄を生じる（場所の自己限定）。
（3）　個は、場所を表現するものとして場所を限定する（個による場所の限定）。
（4）　以上のような場所と個の相互限定は、相矛盾しつつ相互の同一性を保つという性質、すなわち絶対矛盾の自己同一という性質を持つが、その相互限定しつつ同一性を指向する運動が歴史において示されていく（場所の歴史性）。

このように、本節の夢解釈の立場は、現象学的還元の理論に基づいて、解釈者の主観による独断的解釈を避けるため、構造的解釈の方法を取り入れ、また、場所の理論によって、夢全体が個々の事柄を構成し、個々の事柄が夢全体、すなわち夢主の状態を表現し、さらに、その双方の関わり合いのダイナミズムがストーリーを構成していると捉えて、夢の本質的意味を捉えるものとする。

（2）　『夢十夜』「第四夜」における場所の移動と「意識」-「無意識」構造

上記の概念を背景にして、『夢十夜』「第四夜」を解釈するが、ここで手がかりとするのは場所の移動という構造である。

場面の変化に着目すると、以下の各場所を順に移動している。

① 「広い土間の真中に涼み台の様なものを据えて、其周囲に小さい床凡が並べてある」（一〇九頁）と述べられる「土間」。

② 「爺さんが表へ出た」（一一〇頁）と記される「表」。

③ 「爺さんが真直に柳の下迄来た」（一一〇頁）と述べられる「柳の下」。

④ 「（爺さんは）柳の下を抜けて、細い路を真直ぐに下りて行った」（一一一頁）と述べられる「細い路」。

⑤ 「（爺さんは）唄いながら、とうとう河の岸へ出た」（一一二頁）と述べられる「河の岸」。

⑥ 「爺さんはざぶざぶ河の中へ這入りだした」（一一二頁）と述べられる「河の中」。

このように場所を移動することには、どのような意味があるのか。そして、謎のように述べられた場所、「御爺さんの家は何処かね」と聞かれたのに、「臍（へそ）の奥だよ」と答えたその「臍の奥」とは何処か。

いま、本書一五八頁（※のちに確定）の（1）場所の唯一絶対無限性を考慮しつつ解釈を遂行すると

するならば、場所に関する普遍的な意味づけを援用して解釈の手がかりを得るという方法が生じる。

したがっていまここでは、この構造的な場所の移動に着目して、第一章の一で述べた「意識」「無意識」「退行」「再統合」「エネルギー」などの概念を用いて、とりあえず一般的な解釈を試みる。

大まかに言えば、この移動はより意識的な層から無意識の深層へと「退行」していく方向性を持つ。第一章一の（2）で述べたように「退行」とは「子どもがえり」「幼児がえり」などといわれるように、まず、「意識」と「無意識」の境界が曖昧になることである。日常身につけている意識的な仮面がゆるみ、日ごろ抑圧している内面的な衝動やコンプレックスなどの内面の不安定な状態が現れやすくなる。したがって、混乱しているし、エネルギーの浪費も大きい。しかし、そこにエネルギーを量的に満たしたり、エネルギーの浪費が少なくなるように質的に整えたりすると、「意識」と「無意識」とが溶け合っているだけに、むしろ大きな、したがってより高い「再統合」すなわち人格発達が期待できる。仮に、このエネルギーの質が整わなかったり、量が不足したりすると人格発達がうまくいかないばかりか、状況によっては死に至ることになる。

手がかりとして大きなストーリーの流れに着目すると、この夢は、それぞれの象徴的な意味から、このような「退行」の流れとして捉えることができる。

まず、土間から外へという、日常生活している場からその外へという移動は、「意識」から「無意識」

への「退行」を意味する。さらに、地上から河の中、そしておそらくは河の底へという移動も、「無意識」への「退行」を意味する。しかも、その移動は、手品らしきものを見せる一時的な停滞はあるものの、文中にしばしば述べられているように、「素直ぐに」進んでいくのである。

すなわち、土間で飲んでいた爺さんが「あっちへ行くよ」と言ったのに対して、神さんが「真直かい」と聞くと、爺さんがふうと吹いた息が、「障子を通り越して柳の下を抜けて、河原の方へ真直に行った」（一一〇頁）と述べられている。また、柳の下で手品を見せようとして見せず、「今に見せてやる」と言いながら、「真直に歩き出し」、「柳の下を抜けて、細い路を真直に下りて行った」（一一一頁）と述べられている。さらに河の中に入った爺さんは「深くなる、夜になる、真直になる」と唄いながら「どこまでも真に歩いて行った」（一一二頁）と述べられている。

つまり、この夢を見る限り夢主は全体として「真直ぐに」「退行」していることになるが、この夢がこのような「退行」として解釈できるというのであれば、その「退行」とはなにか。

これが夢であるのなら、まずはその「退行」は、夢の生理的な深まりとして理解しなければならない。

夢の生理学的な研究の歴史に関しては、本章の一でも述べたし、シャルル・ケゼール『睡眠と夢』などに詳しいが、同書でも記されているように、一九五三年にシカゴ大学でＲＥＭ睡眠が発見されて

から飛躍的に進展しつつある。その概要については、本章の一でも述べたように、本書では、諸説を比較し、他のイメージ表現に対する筆者自身の経験例などを比較検討した結果、夢の内容との並行的な仮説をおおまかに次のように設定する。

眠りはＲＥＭ睡眠からＮＲＥＭ睡眠へと深まるが、一般的に、ほとんどの場合、夢はＲＥＭ睡眠期に見るとされる。この、まずＲＥＭ睡眠に入る際に夢が始まり、そして、ＲＥＭ睡眠からＮＲＥＭ睡眠への深まりの際に、夢が終了する。その双方の際、夢の内容としてはいずれも、「落ちる」「沈む」「扉の向こうに行く」など、一言で言えば、ちょうどキャロルの『不思議の国のアリス』でアリスが穴に落ちて別世界に行くように、別の世界に入り込むという運動を示すようである。

さらに、眠りの深まりは「退行」の深まりでもあるが、「退行」時の夢やイメージ表現について、筆者が種々の描画表現やサンドプレイ（箱庭療法）などイメージ表現を利用した教育相談の場で確認したことなどを参考にすれば、このような「退行」時には、「意識」と「無意識」との境界が緩み、全体が渾然としているだけに、その際のテーマが直接的に表現されるといえる。

さて、このような「退行」を考慮して、場所の移動を考察すれば、先に述べたように、まず運動として「真直（まっすぐ）」が、特徴的に表現される。

主人公の爺さんは、「真直かい」と聞く神さんには答えないが、「ふうと吹いた息が、障子を通り越

して柳の下を抜けて、河原の方へ真直に行った」とその後の彼の行動の方向が、すでに示されるのである（一一〇頁）。また、爺さんの唄、これは本章の一でも述べた、イメージ解釈の技法の「組み込み」もしくは「囲い込み」に相当し、全体の本質を象徴するとされるが、最後の唄にも「（前略）真直になる」と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行った」（一一二頁）と、「真直」が強調されている。

夢解釈と、これまで述べてきた諸概念からいえば、この理由については次の各項の可能性が指摘される。

（ア）生理的には、一気に眠りが深まり、「退行」したということを意味する。

（イ）第一章の一や本項の「無意識」の規定を顧みれば、それは健康な意味で、眠りに至る程度に「エネルギー」が枯渇し、一気に眠りに至ったと理解することもできる。

（ウ）同様に「無意識」の規定を顧みれば、「抑圧」しなければならないことに関して「エネルギー」を失うことなく一気に「退行」していったと解することもできる。

（エ）さらに「無意識」の規定を顧みれば、現れようとしたテーマが、夢主にとって価値性が少なくて、すぐに「退行」へと向かったことも考えられる。

いずれにせよ、その「退行」の深まりが、それぞれの場所で意味を持ちつつ、進行したということであるが、その意味を確認するためには、個々の事柄の象徴的意味を分析しなければならない。次項ではそれを考察する。

（3） 場所と象徴的意味

ここでは、場所と事柄の象徴的意味を確認する。

先に現象学的還元に関して、夢の中で起こったことをそのまま受容すべきことを述べたが、今度は、表現の側から、その「退行」を再確認しなければならない。すなわち、場所に関する個々の象徴的事柄について、本節（1）の(2)を考慮しつつ、個々の事柄がその場所によってどのように意味づけられているのか、また、(3)を考慮しつつ、逆に個々の事柄の述語性、すなわち、属性や行動がどのようにその場所を意味づけているのか、を考察し、この「退行」を再確認しなければならない。そのためには特に、その事柄の述語に、すなわち、その事柄が全体の中でどのように行動し、ある状態を示しているのか、それらがどのように表現されているかに着目しなければならない。

以下、前項で述べた各々の場所に沿って考察する。

①「土間」は、日常的な場所である。「土間」「涼み台」「床几」「四角な膳」などに共通する「四角」

も現実的なホメオスタシス（恒常性）を意味するので、夢の始まりは日常的レベルだということがわかる。ところで、爺さんはそこで酒を飲んでいる。「酒」は「退行」を促す事柄だし、食事自体が「退行」を意味するので、ここから「退行」が始まるということを暗示しているが、その場面はまだ日常的な光景であり、「退行」に至る前段階だといえる。また、後の考察とも関連して、夢解釈の一般的な説明として、食事の場面は、エネルギーを得たいという状態だということをも確認しておかねばならない。

②「表」は、イメージ解釈においても、「退行」を意味するが、ここで展開しそうなことは、非日常的なパフォーマンスである。ここでは、「退行」を示唆する表現が次々に示される。まず、爺さんそのひとであるが、「浅黄の股引を穿いて。浅黄の袖無しを着ている。足袋（たびだけ）丈が黄色い。何だか皮で作った足袋の様に見えた」（一一〇頁）と述べられるように、ここでは狐のような動物が化けているのではないかということを暗示している。

このような動物へのイメージの変容は、「退行」のひとつの特色である。本章の一で述べたように、筆者は、サンドプレイ（箱庭療法）などの映像に関する芸術療法での実践体験に基づいて、この点についての図表化を試みたが、それによるとおおむね「退行」は生物の系統発生を遡行するものと考えられる。

③「柳の下」も、一般的に幽霊の出没する場所として設定されるように、「無意識」の不安、すなわち「退行」を意味する場所である。また、パフォーマンスも、日常的な手拭いが蛇になるかも、というものである。これも動物への変容であり、「退行」を意味する。しかも、そのパフォーマンスは子どもに対して行なわれる。夢主はいま、子どもの視点を持ち、全体的なレベルにおいて、ここで「退行」して子どもになっている。

⑥「細い路」はさらなる「退行」に至る道である。これがやや歩行困難な「細い」というところは、別の世界に至る道を意味するが、もし、これが上昇する道なら、夢から醒める方向を向いているともいえる。しかし、ここでは河へと下っている。すなわち、眠りが深まり、「退行」が進むということになる。

⑤「河の岸」は、より深い「退行」に至る境界である。先に、室内から表に出たことが「退行」を意味すると述べたが、ここでは、その表からさらに深い「退行」へと至るのである。

⑥「河の中」は、この夢では最も深い「退行」のありかである。少年の目を借りた夢主さえ、夢見ることができないほど深い「退行」だといえる。

したがって、最後に「河」に爺さんが姿を消してしまうところで、とりあえずは、本書一六三頁の(ア)に則して、一気に眠りがＮＲＥＭ期に深まり、この夢が終結した、と解すればよい。

しかし、同時に、「退行」には、前項(イ)のように、健康な意味での「退行」もあれば、(ウ)のように、「抑圧」する場合もある。また、(エ)のように、夢主にとって価値性が少ない場合も考えられる。この「第四夜」の「退行」がどのような意味での退行に相当するのか、以下、それが考察の軸となる。

ところで、爺さんは姿を消して、自分のあるべきところに帰ったと考えられるが、それは「臍の奥」と語られている。「河」と「臍の奥」とが一致するためには、どのような意味を持たなければならないのか。

夢において爺さんが姿を消した「河の中」は、「無意識」の心奥を意味する。「無意識」の心奥とは、「意識」と「無意識」の中心でもある。河合隼雄『無意識の構造』で、「(意識も無意識も含めた)心全体の統合の中心としての「自己」」と端的に述べられるように(一四六頁)、それはユング心理学では「自己(Selbst)」と呼ばれる「意識・無意識」の中心であり存在全体の原理原則を司る中心を意味すると考えられる。「臍の奥」はまさに夢主にとって身体の中心のそのさらに奥にある真の中心を意味するのであるから、「河の中」の「意識・無意識」の中心という解釈と一致する。

では、このような行動を述語とする主語としての「爺さん」はどのように解すればよいのか。

はじめに場所に付帯する普遍的な意味を求めて、やはりユング心理学の概念を援用すれば、この「意識・無意識」の中心的存在としての老人は「老賢人(old-wiseman)」として、存在全体の原理原則を

知っているものを意味すると仮定される。『無意識の構造』では、「自己が神格化されるとき、それは超人間的な姿をとり、老賢者（wise old man）として顕現する」（一五四頁）とされ、昔話などの例をあげて、「主人公が困り果てているときに、助言を与えたり、貴重な品を与えたりして消え去ってしまう。その知恵は常にまったく常識と隔絶しており、それに従ったものは成功するが、妙に人間の知恵をはたらかして疑ってかかったりしたものは失敗してしまう」（同上）とその性格が、超越的だと述べられている。

本書一五八頁（※のちに確定する）（1）を考慮して、普遍的な場所のありかとその意味を考察すれば、この「老賢人」の本来居る場所が、「意識・無意識」の中心であることはいうまでもない。そして、場所に関する先の考察と重ねれば、この「爺さん」も、「老賢人」に相当するようにみえる。

しかし、ここで、やはり一五八頁（※のちに確定する）の（2）や（3）を考慮して、表現されている個としての「爺さん」の属性を厳密に確認しなければならない。

ここでひとつの疑問が生じる。「爺さん」は「老賢人」に相当する何か賢明な態度をとったのか、という疑問である。

「爺さん」の行動や属性をたどってみると、次のようになる。

まず、「爺さん」は年齢不詳である。容貌も、顔中つやつやして皺がない。また、白い髯（ひげ）が生えてい

るから、老人ではないかと想像される。本人も「幾年か忘れたよ」と、年齢を示さない。

住んでいる場所を「臍の奥」と言い、狐が化けているのではないかと思わせる点については先に述べた。

さらに、爺さんは不思議な手品を期待させ、奇跡を期待させ、そして裏切るが、どこか憎めない。

これらの属性に示されるのは、超越的な存在を思わせる不思議なところと、無時間的なところと、無害な印象である。

このうち無時間的なところと無害な印象については、超越的であり、絶対的な善人だとして、時には「老賢人」の属性となる。そして、不思議なところについては、その内容をさらに詳細に考察しなければならない。

老人は、円を描いてタオルを置き、蛇になるという。芸術療法の象徴解釈では、円は自己、すなわち「意識・無意識」の全体もしくはその中心を意味し、全体の存在原理を意味する。そして、蛇は多くの意味を持ち、一般的な研究でも、例えば、山中節子「この現実の向こうに――漱石とギリシャ悲劇から（『夢十夜』試論第二部）」には、直観的に「蛇は正に邪悪なるものの代表というべき」とされ、それは漱石の「罪」もしくはエゴイズムの象徴であったとされている（坂本編『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅱ』一五頁）。たしかに、漱石の他の作品から、また、漱石自身の生きざまから、エゴイズ

ムの問題は避けて通れないが、この箇所の必然性からすぐ導くには少し論理的必然性に隙間があるように思われる。もし、直観的に述べるとするならば、むしろまず普遍的な意味をふまえつつ、そのうえで、叙述上漱石自身がどう捉えていたかを確認しなければならない。

そこで、蛇の一般的意味であるが、単に邪悪とだけはいえない多様な側面を持つ。例えば、アト・ド・フリース『シンボルとイメージの事典』(Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Images*) では、「蛇はすべての原初的、宇宙的な力を表すので、すべての古代の基本的な象徴（例えば鷲やライオンなど）のように曖昧さを持つ」と述べられるように、現れる際には、あたかも反対でもあるかのような意味を持つ場合がある。同書にも、心理学的意味の項があるが、集団心理、原始的・本能的無意識などという基底的概念とともに、無意識の非人間的冷酷さや弱点、生命力の破壊などという邪悪に繋がる側面と、キリスト、超越や深さなどという英知に繋がる側面とが示されている(ibid., p. 556)。さらに、夢解釈に欠かすことのできないエネルギーや運動を考慮に入れれば、例えばキリストという意味には、「キリストの出現を畏怖する」(ibid.) とされるような「出現」という運動的意味があり、「生と死や意識と無意識の境界」(ibid.) という「境界」には、それぞれ対立する双方の世界を繋ぐものという意味が示唆される。

すなわち、このようなシンボル事典などを参考にして大きく分類すれば、蛇は本能と知恵との両義

を持ち、「意識」と「無意識」をつなぐ役割を持つといえる。

「第四夜」の場合も、蛇をめぐる主人公の行為をみると、蛇に引かれて、無意識的な河の畔（ほとり）までたどり着いている。

そして、蛇を見せるという老人の行為は、夢主にとっては、「無意識」の中心にある自己の行為として示されている。それは中心であるだけではなく全体の存在原理でもあるのだから夢主の深層にある真実である。そして、その自己の行為とは、真実の情報のメッセンジャーとしての蛇を遣わせようとするものである。このような行為をする老人は、「老賢人」といってよい。

また、先に述べた、移動の様態としての「真直」であるが、岩井寛『色と形の深層心理』によると、直線は「上下、縦横を分ける線」「天上と地上、物と人、人と人との間を分け、区切りをつける」「境界の線であり、決断の線であり、けじめの線である」「情緒に対して知性の線であり、不条理に対して条理の線である」などと述べられている（四二頁）。

ということであれば、この夢の夢主は、自らの問題解決に当たって、区切りをつけ、けじめをつけ、知性で解決し、条理を求めるという性格の持ち主だということが想定される。心理療法においては、このような性格の場合、問題解決においては、対決を避け、論理的な対応をしたり、神秘的な原理に委ねたりする傾向があると解する。となれば、問題解決に「老賢人」が立ち現れるのも理解できる。

さらにつけ加えなければならないのは、夢に「真直」がしばしば現れるのは、そのこと自体がテーマだということでもある。すなわち、後述するように、この「老賢人」が示そうとするのは、「まっすぐに」問題解決を図れということでもある。

このように「退行」した夢主の前に、「老賢人」が現れるが、「老賢人」は本能と知恵とを持っているのではあるが、ここで手品を披露しない。ここにひとつの違和感、もしくは物語の終結が生じる。この違和感が、この「退行」考察のひとつの手がかりになる。

場所の移動と重ねつつ、エネルギーの流れに着目すると、まずは、現実から本来の自己のありかへと、一直線に「退行」を深めている。しかし、そこで途絶えている。もちろん絶対的な原理としての本来の自己は認識できないのではあるが、作品における感じ、すなわち直観的印象は、健康なものではない。夢主の退行した分身としての子どもは、裏切られて、爺さんが消えた水面をいつまでも見つめているのである。つまり、夢主は、「老賢人」のメッセージを理解できず、ただ待ち続けるのである。

夢解釈において、その事態が肯定的な印象を持つものか、否定的な印象を持つものかは、重要な意味がある。

楽しい、嬉しい、心地よいなどの肯定的な印象の場合には、その夢が象徴している意味は、夢主の生存にとって役に立つことである。

辛い、怖い、悲しいなどの否定的な印象の場合には、その夢が象徴している意味が夢主の生存にとって役に立つのかそうでないのかは、次の二つの場合が考えられる。

まず、生存の役に立つ場合は、本来肯定すべきことでありながら夢主の成長がまだそこまで到達していない場合である。神を恐れる、難しい授業を嫌いになるというような場合である。また、特別な場合として、「死」に関する夢は、否定したくなるような夢の場合が多いが、実は、何かが終わったつまりその何かが自分のものになり、その分人格発達を遂げたとして、むしろ生存の役に立つ内容を意味している。

次に、生存の役に立たない場合は、文字通り否定したくなる場合である。

このような否定的な印象の場合は、「死」に関する夢のように、夢を見ている時の自分にとっては否定的な印象であっても、実は肯定的な意味を持つことがあるので、慎重に解釈しなければならない。

ところで「第四夜」の最後に至った事態は、やはり、否定的な印象を持つ。そして、「老賢人」が「無意識」に沈み込んだのをいつまでも待つという徒労を行なっている。

このことは、当初の場面で、食事という象徴によってエネルギーを得たいという状況にはなっているが、「退行」して夢主自身の問題のありかに届いたところ、まだ本来のエネルギーが不足しているため、人格発達に結びつく再統合はなされなかったと解することができる。

ただし、先に述べたことから、本能と英知という成長の手がかりだけは認識されていることを確認しておかなければならない。

そして、「老賢人」に相当する「爺さん」が、空間的な「退行」を繰り返して、この段階よりもっと「退行」して、沈み込んでいったのだから、夢主自身の問題は、夢の主人公の子どもよりはもっと深く、原初的なところにあることが示されている。

さて、以上の考察から導かれるこの夢の意味は以下のようにまとめることができる。

一言で言えば、人格発達を遂げようとする本能的ともいえる心の動きが、意識と無意識の全体の真理へと迫ろうとする時、当初は興味深くその真理が姿を見せようとするが、結局、肝心のところで姿を消し、心は中途半端な状態で停滞してしまう、ということになる。しかもこの真理とは、人格発達の手がかりそのものである本能と英知の統合なのである。その真理に、真っ直ぐ進んでいけば良いと示唆し、あるところまでそのように進みつつも、その発展は突然停滞するのである。

さて、この解釈は、もちろん文学作品そのものの本質的解釈ではなく、あくまで心理学的解釈である。このような心理を内包して、夏目漱石は、文学としてこの「第四夜」を創作したはずである。そこから、全体としてのこの作品の統合的意味の探求が必要になる。その手順として、また、夢解釈としても、夢解釈を利用した心理療法においても、文学的考察においても、さらに、本書一五八-一五九

頁の(4)に従って考慮すれば、場所の問題においても、作品に生育史の問題を重ねることが必要になってくる。

（4） 漱石の生育史と時代

かくして、夢の全体への考察は、漱石という作者を焦点とする全体への考察へと移行する。ここから先は、いわば常識的な文学研究に連結することになる。紙幅の関係から、多くを語れないが、今後考えていく方向性を指摘しておく。なお、夢は、「無意識」を考慮にいれれば、一生を通して連続したひとつの夢を見続けているともいえるし、その時その時の因果関係によって刻々と意味が成立する背景としての因果関係が変化しているともいえる。

したがって、以下の考察も、この夢に現われたから、それがすぐに夢主の一般的傾向としてしまうのも危険を伴うし、まして、それがすぐ夏目漱石それ自身の内面的傾向性と決めつけるのも問題である。

しかし、ここで本節の冒頭に帰ってこの作品の在り方を顧みると、次のことが確認できる。すなわち、むしろ小説だからこそ、真の夢ではないからこそ、作者夏目漱石その人の本質が現れているといえるのではないかということである。

大きな前提として、作者夏目漱石は、これを小説として表現した。ということは、他の小説と同様に、作者の本質がそのまま反映する構造を保っていることになる。

次の前提として、作者夏目漱石は、この小説を「夢」に託して表現した。漱石が夢解釈の方法と理念を知っていたかいなかったかはこの際どうでもよいことである。少なくとも夏目漱石その人は、ウィリアム・ジェイムスの心理学などを読みつつ、「夢」の在り方に関して直観的に知り得たものがあったからこそ、この小説を書くことができたのである。その直観的把握の正しさは、この作品を夢として解釈しようとする本節の企てにおいても、夢それ自体が夢解釈の常套的方法によって矛盾なく解釈されることからも示される通りである。

そこで、以下の考察は、この夢の夢としての解釈を通して、あたかも心理相談に訪れた夏目漱石を前にして、その生育史を訪ねつつ夢解釈の妥当性を確認するといった姿勢をとるものとする。

いうまでもなく、これは文学研究の一般的方法と重なる。文学者は、作品の本質を探るために、その作品が成立した頃の作者の状況を調べ、時代背景を調べる。作者が自己防衛の強い性格で、うそつきならば、それらの調査が無に帰することもあるにはあるが、いずれ自己防衛やうそつきという事実もあらわになり、作品を生んだ作者の創作の原因が明らかになる。本節は、夢をテーマにした特殊な作品をとりあえずは夢として扱ってきたが、当の作品の本質を探るという研究としては一般的な研究

の地平に還ってくるべきものである。

このような前提で、これまでの夢解釈の結果と、一般的研究とが結ばれることになる。ということであれば本節の課題の多くはすでに果たしたともいえるが、この点について、本節のこれまでの考察から、文学における一般的研究のいくつかの方向性を分類しつつ指摘する。そこに、本節の次の問題、すなわち夏目漱石その人の癒しの問題も浮かび上がってくるはずである。

まずは、本節（3）で至った原初的な問題である。これは、漱石自身がこの時期においても乗り越えていない生育史上の問題だといえる。

本来の自己の問題へと「退行」する場合には、それだけ深い、原初的な問題を背負っていると解される。特に、幼年期における対人的な信頼感を育む機会を逸したことが想像される。では、漱石の幼時体験はどのようなものであったのか。

これについてはすでに前節で述べたように、幼少時に里子に出され、また、返されたという事実が推測を裏付けることになる。丸谷才一「漱石小伝」でも、生後すぐ里子に出されてすぐ戻されたり、三歳で別の里子に出されて十歳でまた生家に戻されたりなど、「すくなくとも父からはじゃま物あつかいされていたらしい」（『新文芸読本　夏目漱石』八頁）と述べられている。

第一章一の（3）で述べたように、人格発達理論の古典であるE・H・エリクソンは、人格発達を

各段階に分類し、それぞれの段階で獲得しなければならない課題、すなわちホメオスタシス（恒常性）的テーマを、二つの極のバランスだとして説明した。特に、その時獲得されなかったテーマは、ずっとそのまま大人になっても持ち続け、個人の人格発達を特徴づけるとする。そのエリクソンの基準における最も原初的な段階は、生後一か年とされ、ここで得られるべきものは、「基本的信頼対基本的不信（Basic trust versus Basic mistrust）」の両者のバランスだとする（Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p. 57）。エリクソンは、この「信頼（Trust）」については、「他人については一般に筋道の通った信頼（reasonable trustfulness）という意味を、また、自分自身については信頼する価値がある（trustworthiness）という単純な意味を」与えるとする（ibid.）。

夏目漱石の幼児期と、このエリクソンの記述とを比較すると、少なくとも構造的に、漱石が自身の原初的な問題と常に向き合わねばならなかったことが分かる。その意味では「第四夜」の終結に至って、ただ待つしかなかった子どもの、人格発達を阻害された悲しみが伝わってくる。

もちろん、本節の、いわば文学研究の側道ともいうべき、他の領域の知識を援用して解釈するという方法に対して、文学研究の王道を貫いて、この最後の場面に、作品の内部構造から厳密に導き出した鋭い指摘も存在する。山崎甲一「「夢十夜」の叙法、一夜と四夜　――読者の創造力ということ――」もそのひとつである。その論文では、「まっすぐ」を「難問を解決し、理想を実現するための」かかわ

りかたとして、そのことを示すべく行為した爺さんの、その行為の意味を思わずにただ待つだけの自分が表現されていることが、全体の構成と作者の緻密な暗喩を明らかにしつつ示されている（坂本編『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅲ』三一八−三一九頁）。

本節よりは少ない材料を用いつつ、結論的には本節と同じところに到達しているだけに、その論文の鋭さが際立つのであるが、まさに、本節の方法がこのような研究の傍証になることを期待するのである。

このように、作者の生育史を参考にしつつ、作品の謎を解く方法の背後に、より大きな背景としての歴史から、問題を解決しようとする方法もある。

これについては、江藤淳『漱石とその時代』をはじめとする多くの研究を参考にすることが可能になるが、この『夢十夜』「第四夜」に関する限りは、時代の直接的反映は認めがたい。ただ、四角や円や真直ぐに関して、高山宏「夢の幾何学」において、『夢十夜』が発表された一九〇八年は、キュービズムの全盛期であり、漱石の思考にもそれが反映している（『漱石研究』第8号、六七頁）、という指摘は、特殊な角度からの指摘として注目に値する。

これらの文学的な諸研究を考慮に入れてこの「第四夜」の、全体的統合的な意味を述べようとすると、表現は象徴的になり、むしろ原作の表現に近づくことになる。すなわちそれは、興味深い未知の

世界の扉を少し開けられて、それに素直について行ったのに、ただ待たされ続ける少年の悲しみ、とでもいえるものである。

かくして、本節の方法は、文学の王道的研究との橋渡しへと到達した。

王道的研究とは、ひとつには、作品内部の厳密な構成と暗喩とに着目しつつ、作者が作品そのもののみを通して伝えたいことを理解することである。

また、表現する行為の直接的背景としての、作者の生育史に着目することも重要な作業である。

さらに、作者の背景としての時間・空間的条件、すなわち、総合的な意味での歴史的背景を考察することも重要な意味がある。

そのほかにも文学研究は、通時的、共時的にさまざまな方法が展開している。

本節は、それら諸研究の結果導かれようとする夏目漱石とその作品の深層を掘り起こそうとするものであるが、本節の方法が陥る危険性の可能性については確認しておかなければならない。

危険性のひとつは、対象の外側における特定の偏光フィルターが規定する特定の角度に縛られていはしないかというものである。本節では紙幅の関係で詳細に説明できなかったが、基盤に用いた現象学的方法は、第一章二の（2）で述べたように、この点について、次々に現れる事柄の論理的説明の背後に常に、エポケー（判断中止）の括弧を与えることで、つまり、認識の枠を超越した客観をとり

あえずは括弧に入れておくことで、この危険性を回避しようとするものである。

いまひとつの危険性は、心理学なり、解釈学なりの普遍的な概念の組み合わせに終始して、個としての作品や作者の特殊性が消滅しはしないかというものである。本節を詳読すれば明らかなように、本節では特にこの点には配慮して、まず普遍は普遍として論じ、次にむしろその普遍を破る個性を洗い出すことを試みた。このような方法によって危険を回避することが可能になり、むしろ個性をより鮮明に表すことになる。

ともあれ、本節は、本節の立場として、王道としての文学研究への橋渡しに終始しているつもりである。これが、傍証として少しでも役に立てば幸いである。

さて、残された課題は多いが、次項では、ここから導かれる『夢十夜』「第四夜」に関する夏目漱石の癒しについて考察する。

（5）　『夢十夜』「第四夜」と夏目漱石の癒し

「第四夜」における、夏目漱石の癒しも、テーマそのものから導かれねばならない。

先に、「第四夜」の全体的なテーマを、興味深い未知の世界の扉を少し開けられて、それに素直について行ったのに、ただ待たされ続ける少年の悲しみ、と述べた。また、心理学的なテーマを、人格発

達を遂げようとする本能が、意識と無意識の全体の真理、すなわち本能と英知の統合へと迫ろうとする時、当初はその真理がまっすぐ姿を見せようとするが、結局、肝心のところで姿を消し、心が中途半端な状態で停滞してしまうこと、と述べた。

ところで先に、夢見ることや創作活動は、意識と無意識の全体の構造を変化させることだと述べた。本書で一貫して述べてきたように、その変化の要点は、作品のテーマにある。このように、新たな未知の世界を前に、ただ待ちつづける少年の姿は、夏目漱石の姿でもある。生育史を辿ればその姿には、根の深いものがあることは事実であるが、この作品を書いている時期の漱石の現実的な心の痛みは、前節で述べたように、さまざまな事実の絡み合いによって成り立っていた。特にこの時期の漱石はまさに、小説家として生きようか、東大教官を続けようかと、未知の未来に向かって迷っていた。そのような心が反映しているといえば、この作品が漱石自身の見た夢として理解し、否、仮にそうでなくてもこの作品を創作したということで、直接的には分かりやすいであろう。では、その時、表現することで癒されるエネルギーは得られたのか。これについては、結果から推測するしかないが、結論的には当面得られた、というべきであろう。このあと、彼はまさに充実した作家活動に入ったのだから。しかしもちろん、「第三夜」「第四夜」を瞥見しただけでも、問題の根は深い。すでに述べてきたように、最大の要点は、最も幼い時期に、自らと世界全体の存在への信頼を得られなかったことである。

これは結局、漱石の全作品を通して典型的に示されるように、彼の一生のテーマとなった。その意味では、『夢十夜』で得られた癒しは、通過点でしかなかったともいえる。

かくして、筆者が継続して試みなければならないことは次の通りである。

まず、『夢十夜』の他の章についても解釈を試みなければならない。「第三夜」「第四夜」は、十章によって構成される『夢十夜』全体の一部にすぎない。紙幅の制限があるとはいえ、前節および本節で述べてきたことは、本来、この全体の解釈によって精確に語り得べきことであることはいうまでもない。さらにそれが、夏目漱石その人を貫く人生全体において、どのような意味あるのかを、他の作品との関係において論じなければならない。ここで、考察はさらに文学の王道に接近することになる。そして、そのことが同時に、それらすべての諸作品の研究もまた、本書のテーマである人格発達と癒しという側面からの考察を検証することはいうまでもない。

参考文献

■欧文文献

Erikson, E. H., *Identity and the Life Cycle*, W. W. Norton co., 1959.

Grimm, J. ud. W., *Kinder-und Hausmärchen*, Verlag Werner Dausien, 1961.

Hegel, G. W. F., G. W. F. Hegel Werke 3 *Phänomenologie des Geistes*, Suhrkamp, 1970.

Husserl, E., *Die Idee der Phänomenologie* : fünf Vorlesungen, Herausgegeben und Eingeleitet von Walter Biemel, Martinus Nijhoff, 1973.

Jung, C. G., C. G. Jung *Gesammelte Werke, Sechster Band*, Walter-Verlag, 1976.

Jung, C. G., C. G. Jung *Gesammelte Werke, Achter Band*, Walter-Verlag, 1976.

Vries, Ad de, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing co., 1974.

■邦文文献

相原和邦「『夢十夜』試論――第三夜の背景――」『日本文学研究資料叢書　夏目漱石Ⅱ』有精堂出版、一九八二年。

荒正人「漱石の暗い部分」坂本育雄編『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅰ』大空社、一九九六年。
荒木登茂子編・荒木正見共著『心身症と箱庭療法』中川書店、一九九四年。
荒木正見『昔話と人格発達』九州大学出版、一九八五年。
岩井寛『色と形の深層心理』日本放送出版協会、一九八六年。
江藤淳『漱石とその時代』〈新潮選書〉新潮社、一九七〇-一九九年。
エリクソン、E・H『自我同一性』小此木啓吾訳、誠信書房、一九七三年。
エリス、ハヴロック『夢の世界』藤島昌平訳〈岩波文庫〉、一九四一年。
大原健士郎「夢」大原健士郎編集解説『現代のエスプリ　夢』至文堂、一九七三年。
――――『夢の不思議がわかる本』三笠書房、一九九二年。
岡田康信『箱庭療法の基礎』誠信書房、一九八四年。
河合隼雄『ユング心理学入門』培風館、一九六七年。
――――『無意識の構造』中央公論社、一九七七年。
グラント、ラッセル『夢の事典』豊田菜穂子訳、飛鳥新社、一九九二年。
黒澤明監督・脚本『夢』ワーナー・ブラザーズ社、一九九〇年。
ケゼール、シャルル『睡眠と夢』松本淳治監訳・森田雄介訳〈文庫クセジュ〉白水社、一九八九年。

小宮豊隆『夏目漱石』中〈岩波文庫〉岩波書店、一九八七年。
笹淵友一『夏目漱石――「夢十夜」論ほか――』明治書院、一九八六年。
新里里春・水野正憲・桂戴作・杉田峰康共著『交流分析とエゴグラム』チーム医療、一九八六年。
杉田峰康『交流分析の基礎知識　ＴＡ用語１００』チーム医療、一九九六年。
関敬語編『日本昔話大成３』角川書店、一九七八年。
――――『日本昔話大成４』角川書店、一九七八年。
高山宏「夢の幾何学」『漱石研究』第８号、翰林書房、一九九七年。
太宰治『お伽草子』〈新潮文庫〉新潮社、一九七二年。
鑢幹八郎『夢分析入門』創元社、一九七六年。
チェトウィンド、トム『夢事典』土田光義訳、白揚社、一九八一年。
徳田良仁「典型的な夢の解説」『自然読本　夢・眠り』河出書房新社、一九八四年。
中村元監修・峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、二〇〇〇年。
夏目漱石『文鳥・夢十夜』三好行雄解説〈新潮文庫〉新潮社、一九七六年。
――――『夢十夜』、『漱石全集』第十二巻、岩波書店、一九九四年。
――――『文鳥』、『漱石全集』第十二巻、岩波書店、一九九四年。

――――『愚見数則』、『漱石全集』第十六巻、岩波書店、一九九五年。
――――『文芸の哲学的基礎』、『漱石全集』第十六巻、岩波書店、一九九五年。
――――『明治三八年一月一五日、野間真綱宛て書簡』、『漱石全集』第二十二巻、岩波書店、一九九六年。
――――『明治三〇年四月二三日、正岡子規宛て書簡』、『漱石全集』第二十二巻、岩波書店、一九九六年。
西田幾多郎『無の自覚的限定』（昭和七年）、『西田幾多郎全集』第六巻、岩波書店、一九四八年。
――――『場所』（大正一五年）、『西田幾多郎全集』第四巻、岩波書店、一九四九年。
――――『哲学の根本問題』（昭和八年）、『西田幾多郎全集』第七巻、岩波書店、一九四九年。
――――『現実の世界の論理的構造』（昭和八年）、『西田幾多郎全集』第十四巻、岩波書店、一九五一年。
フッサール、エドムント『現象学の理念』立松弘孝訳、みすず書房、一九六五年。
フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下主一郎監訳、大修館書店、一九八四年。
フロイト、S『夢判断』上・下、高橋義孝訳〈新潮文庫〉新潮社、一九六九年。
ポングラチュ、M／ザントナー、I『夢占い事典』種村季弘他訳〈河出文庫〉河出書房新社、一九

九四年。
丸谷才一「漱石小伝」『新文芸読本　夏目漱石』河出書房新社、一九九〇年。
三木紀人他校注『宇治拾遺物語』の三「鬼に瘤取らるる事」、『新日本古典文学大系42』岩波書店、一九九〇年。
妙木浩之「「夢分析」の現在」妙木浩之編『夢の分析』至文堂、一九九七年。
柳田國男『柳田國男全集』第八巻〈ちくま文庫〉筑摩書房、一九九〇年。
山崎甲一「「夢十夜」の叙法、一夜と四夜――読者の創造力ということ――」坂本育雄編『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅲ』大空社、一九九六年（初出は『文学論藻』六十五号『東洋大学文学部紀要第四十四集国文学篇』一九九一年）。
山中節子「この現実の向こうに――漱石とギリシャ悲劇から（『夢十夜』試論第二部）――」坂本育雄編『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅱ』大空社、一九九六年（初出は『文学地帯』四十一号、一九七三年）。
唯円、金子大栄校注『歎異抄』〈岩波文庫〉岩波書店、一九三一年。
ユング、C・G『元型論――無意識の構造――』林道義訳、紀伊國屋書店、一九八二年。

おわりに

序でも述べたように、この本は、昔話や夢を、人格発達と癒しという視点から解釈し、われわれの日常生活に生かそうとする試みである。

そしてその前提として、癒しを得るためのひとつの仕方として、人格発達を遂げることがあげられた。癒しを得るためにはさまざまな方法があるが、本書で述べてきたさまざまな例は、結局は悩みや苦しみや劣等感や障害を、それぞれの個性に応じた人格発達によって乗り越えようというものであった。そこで得られた最も重要なことは、それら悩み苦しみや劣等感や障害というものが、むしろ、それぞれの人格発達にとってこれからどのように生きていけばよいのかという手がかりになるということであった。

その場合、エネルギーの質、つまり、その手がかりをどのように生かすかという知識が最も重要なポイントになる。もちろん、それには個人の努力だけではかなわないことも多い。親や友人でさえ力の及ばないこともある。その場合には、医師や看護者、心理治療者、カウンセラー、教育者などの専門家の力を借りる方法もある。肝心なのは、本人も周囲も、可能な限りゆとりをもって、柔軟に対処

することである。

本書も、そのような手がかりになることを期待して記述した。

第二章では、昔話の解釈を通して、伝承によって典型化したさまざまな癒しの型を確認したし、第三章では、夏目漱石というひとりの作家が、これも癒しの重要な手段である夢をテーマにして創作することで、自らの癒しを求めようとする姿を確認した。いずれもそれぞれに、ひとつの手がかりになることを望む。

次に、この本では、読み、考えることによって癒しを得るきっかけとなることをも意図した。これは、これまで述べてきたように、エネルギーの質を高めようとするものである。知識によって具体的な癒しの仕方を知ることで人格発達を促し、最終的な癒しを志向するのである。そこで、自ら考えるために、この本では、人格発達や癒しを考える一般的な方法や目安を比較的丁寧に述べた。特に、第三章においては、それらについて、グリム童話の『ヘンゼルとグレーテル』を例にしつつ述べた。

そのような方法的な議論は、即決的な知識とは異なるが、自らの生活そのものに常に根元から関わっている思考の訓練という意味では、エネルギーの質を高める働きを持つことはいうまでもない。そして、その延長線上に、学問的な叙述が要求されることになる。ここまで至れば、一般的ではなくなり、時に難解な印象を与えてしまうことにもなるが、思考の究極には、この本で述べてきたような解

釈学や哲学的な基盤があることまで述べておくことで、個々の解釈に筆者なりの妥当性を与える意図があった。

したがって本書は、一般的には人格発達と癒しの諸相を述べるものとして、表面的には心理学、特に発達心理学を意識して叙述してきた。そこですべての考察対象に、心理学的な前提に基づく考察が為されてきた。

しかし、筆者なりの解釈妥当性を考慮すれば、本書で取り扱う考察対象としての、昔話や童話や、小説の本来のあり方を軸にすえなければならない。すなわち、それらは本来、文学に属するものである。文学は、感動をこそ、その本質とする。作品の感動を、作品そのものに密着して考察することこそが、文学研究の王道なのである。

そして、人格発達と癒しという観点からしても、それぞれの文学作品は、文学としての感動という本質をもって、人格発達に寄与し、癒しを与えているのである。その意味で、本書においても、可能な限り文学を文学として研究する姿勢を保ってきた。そのために、第二章では、昔話を物語として分析する意味と方法について論じ、第三章では、夏目漱石の生育史、成立時の状況、文学研究者の研究内容などをつとめて述べてきた。

このような本書の企ては、広義の比較論、すなわち比較論でのアメリカ学派の立場に近いように思

われる。それは、このような異なる領域の解釈を結びつけようとする企てである。この本では、文学と他の領域の比較研究という意味での比較文学としての解釈学でもあるし、哲学的基盤に基づく解釈学として、諸学を等距離に捉えつつ、解釈対象の本質を明らかにしようとする比較思想の試みでもあったのは既述の通りである。このような学問的位置づけの上で、この本は述べられてきたが、それは筆者なりの新たな試みでもあった。

筆者のこの拙い試みは、さらなる問題を提起する。すなわち、方法論への研磨を継続しなければならない。本書における解釈の方法が、どのように普遍性を持ち、妥当するのか。具体的な対象の多様な考察を通して一層きめ細かく探究していかなければならない。

そして当然、人格発達と癒しという内容に関しては、本書には入りきれない多様な側面をも有する。それらをいっそう広げ、深く研究しなければならない。

最後に、本書のような広範な比較論的考察を遂行するにあたっては、各領域の優れた先達の助けなしには不可能であった。揺藍としての哲学や比較思想、そして、発展していく過程での臨床心理学、文学、医学などのすべての領域で、わが国を代表する方々に出会うことができ、暖かくご教授賜ったことは、筆者にとって最高の幸せであった。各位には謹んで感謝と御礼を申し上げたい。

また、出版にあたってはナカニシヤ出版の編集部に多大のご迷惑とご苦労をおかけした。改めて感

謝申し上げる。

初出一覧

本書は以下の拙論をもとに大幅に加筆、再編した。

第一章、第二章……「物語解釈と場所の意味――人格発達と癒し――」『福岡女学院大学人文学研究所紀要』第三輯、二〇〇〇年三月

第三章……「夏目漱石「夢十夜」「第三夜」における親性と子ども性の対決――場所論的夢解釈――」『比較思想論輯――比較思想学会福岡支部紀要』第二号、二〇〇〇年五月、「夏目漱石「夢十夜」「第四夜」の夢解釈――方法と場所の意味――」『福岡女学院大学人文学研究所紀要』第四輯、二〇〇一年三月

著者略歴

荒木　正見（あらき・まさみ）

一九四六年　福岡県に生まれる。

一九七一年　名古屋大学文学部哲学科卒業

一九七七年　九州大学大学院文学研究科哲学・哲学史専攻科博士課程単位取得退学

梅光女学院大学助教授・福岡女学院大学教授・日本赤十字九州国際看護大学教授・福岡歯科大学教授・文京学院大学教授を歴任

二〇一九年現在は各大学・短大・専門学校等で非常勤講師（哲学・倫理学・心理学・論理学・人間関係論・家族社会学・生命医療倫理学）。

著　書

『場所論と人間行動――演劇・ドラマ・教育相談――』〔共著〕（中川書店、２０００年）、『共時的解釈の方法』（中川書店、１９９４年）、『尾道という場所論――志賀直哉・小林和作・大林宜彦の風景――』（中川書店、１９９３年）、『昔話と人格発達――コード分析試論――』（九州大学出版会、１９８

５年）、『人間、何処からどこへ』〔共編著〕（ナカニシヤ出版、１９９８年）他。

（本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです）

表　題／人格発達とＱＯＬ（クオリティ・オブ・ライフ）昔話・夢解釈
発売日／２０２２年５月
著　者／荒木正見
発行者／向田翔一
発行所／株式会社22世紀アート
〒１０３―０００７
中央区日本橋浜町３―２３―１
ＡＣＮ日本橋リバーサイド　５階
電　話／０３（５９４１）９７７４
本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部または全部について、株式会社22世紀アートから文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複写およびデータの転用することを禁じます。本書へのお問い合わせについては、お客様相談センター　０３（５９４１）９７７４　までご連絡ください。
www.22art.net
info@22art.net